偉大な人間

偉大な人間

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

はじめに

2025年は金日成（キムイルソン）主席の生誕113周年に当たる年である。

伝説や神話上の人物ではなく、実在した大聖人であり、人民と共に笑い、泣き、創造も建設も共に行った金日成主席を、朝鮮人民は純潔な理性と人間としての熱い感情をもって高く仰いでいる。

金日成主席は偉大な生涯の全期間にわたって、朝鮮革命の陣頭に立って世紀を先取りしてきた。13歳の若い年で革命の道を踏み出した主席は、長きにわたって地下革命闘争を行い、朝鮮人民の2度の革命戦争と2段階の社会革命、2度の復興建設、度重なる社会主義建設を勝利へと導いた。

しかし、主席は傑出した指導者、革命家である前に偉大な人間であった。20世紀に金日成主席を戴いて激動の年代を体験した朝鮮人民は、傑出した指導者、革命家の歴史はすなわち偉大な人間の歴史から始まり、偉大な人間が導く革命こそが聖なる歴史の推進力であることを痛感した。

実に金日成主席の人間像は「天の賜った方」と表現するしかない。

主席は高い知性とあつい人間愛、不屈の精神力と平民的生活

によって偉大な生涯を輝かせた。主席の高い知性はすなわち朝鮮革命と朝鮮人民の前途を示す灯台であり、限りない人間愛はその花園を築くための滋養分であった。主席の強靭な精神力は朝鮮人民の尊厳と勝利の源泉であり、高潔な平民的風貌は朝鮮人民の渾然一体の礎石であった。

主席の生涯は美しく剛毅で、かつ高潔な生涯であったし、多くの人の風貌と生活の大全書となっている。自らの生涯を通じて人間の高潔な品格と資質を示した金日成主席は、朝鮮人民の心の中に生き続けている。

目 次

1

探究に探究を重ねた生涯

　人間としての金日成主席の偉人像について語る時、まず挙げるべきことは主席が到達していた高い知性の世界であろう。

　しかし、主席が備えていた知性は決して天賦の才ではなく、生涯知性を重視する観点に立ち、苦心惨憺の思索とたゆまぬ探究を続けてきた努力のたまものであった。

　生涯を終えるまで知性の塔を築いてきた主席は、理性と真理によって時代と歴史、人民大衆の運命開拓の前途を示した。

　朝鮮革命という巨大な学問を自らの専攻と見なし、人民を生涯の師と見なした主席の探究の過程で、人民大衆の前途を示す旗印が掲げられ、千万軍民を奮起させて世紀の変革と勝利をもたらす原動力が生まれた。

実践による特異な学歴

人間の知性は社会的産物であり、それを培養する最も重要な手段は教育である。世界的な学者や文人の大多数が教育水準の高い名門大学の出身であることは否定し得ない事実である。

金日成主席は大学や書斎で知性を養ったことはなかったが、知性の高さと幅において比肩する者がいなかった。

主席は特異な学歴を持ち、生涯思索と探究を続けてきた。主席の人生行路に記された学歴は、受難の植民地民族の苦痛がひしひしと感じられる学歴であった。

1919年の秋、父の金亨稷（1894年7月10日～1926年6月5日）は日本帝国主義の弾圧のため活動拠点を中国・東北地方の臨江に移した。そして1920年の春、息子の成柱（金日成主席の幼名）を臨江小学校に入学させた。

その後、主席の一家は八道溝に居を移し、主席は1921年の夏に八道溝小学校の2学年に編入され、1923年の初めまで在校した。

人は自分の国のことを知らなければならないという父の教えを胸に刻んだ主席は、中国の八道溝から故郷の万景台までの「千里の道」を歩いて1923年4月の初めに彰徳学校の5学年に編

入され、1925年1月までそこで学んだ。

1925年1月、彰徳学校在学中に父が再び日帝警察に逮捕されたという知らせを受けた主席は、国を独立させることができなければ二度と再び帰って来ないと心に誓い、また「千里の道」を歩いて中国・東北地方に入った。そして、1925年4月の初めに撫松第1小学校の6学年に編入され、1926年の春までそこで学業に励んだ。

1926年6月、父が他界した後、独立軍運動家たちの推薦により2年制の軍事・政治学校である華成義塾に入り、同年12月の初めに中退した。

華成義塾を中退した後、先進思想を探究するために1927年1月に吉林毓文中学校の2学年に編入された。そして1929年の秋に中退し、職業革命家になった。

主席の学校教育の学歴はこれが全部である。

それさえも幼年時代の学歴は体系的な教育課程によるものではなく、編入と中退の繰り返しであった。ことに、最後に学籍を置いた華成義塾や吉林毓文中学校の在学当時、主席は学業にのみ専念したのではなく、日本帝国主義の銃剣の下に苦しむ朝鮮民族の受難の歴史に終止符を打つために精力的な革命活動を繰り広げた。そして、1929年の秋、日本帝国主義にたきつけられた反動軍閥警察に逮捕され、1930年5月の初めまで吉林監獄

で獄中生活を送った。主席は獄中で、朝鮮革命を勝利に導く思想と進路について思索した。出獄した後、主席は、搾取と抑圧に苦しむ人民の中に入り、革命活動に身を投じることを決意した。

職業革命家として実践に身を投じることはもちろん主席が下した決断であった。しかし、革命闘争のために中学を退学することにした時の主席の心境は非常に複雑であった。後日、主席は回顧録『**世紀とともに**』で、その時の心境について次のように述べている。

「中学を中退し、いざ吉林を発つとなると、私の心はちぢに乱れた。生前、父が祖国に行って勉強せよと、冬のさなかに単身私を故郷へ送ったこと、学校から帰った私を机の前に座らせて朝鮮の歴史や地理を教えてくれたこと、臨終を前に、成柱だけはぜひ中学校へ通わせようと思った、私の志をついで日に三度草がゆをすするようなことがあっても、成柱を必ず中学校へあげるのだ、と母に遺言したことなどが脳裏に浮かんで気が晴れなかった。

卒業を１年後にひかえて学校を中退したことを知れば、3年の間指がすりへるほど、洗濯や裁縫などの賃仕事で毎月仕送りをしてくれた母はさぞかし落胆し、弟たちは残念がるだろう。私を息子のようにかわいがり、学費を援助してくれた父の友人

や私の学友はどんなにがっかりすることだろう。

だが、母は理解してくれるだろうと思った。父が崇実中学校を中退した時にも母は、学校を止めて革命運動に専念したいという父の意向を支持した。そんな母だから、息子が中学ではなく大学を中退するといっても、それが革命と祖国のためになるなら反対しないだろう、と私は信じた。

毓文中学校を中退して人民の中に入ったのは、私の人生において一つの転機だった。その時から私の地下活動が始まり、職業的な革命家としての新たな人生が始まったのである」

このように、主席の学歴は、血涙を絞る思いをしながらも向学の念を遂げることができなかった過去の植民地朝鮮の青少年の不幸な境遇の縮図であった。されば、主席が達していた知性の高い境地について事新しく考えさせられる。なぜなら、知性そのものが天賦の能力ではなく、社会的産物であることを考慮すると、なんらの基盤もない知性の世界というものはあり得ず、また存在しもしなかったからである。

しかし、主席は苦心惨憺の探究とうむことを知らぬ思索によって知性の塔を一つずつ築いていった。主席は幼年時代から人一倍探究心が旺盛であった。どんな物事や現象も注意深く観察し、問題の本質を見極めるまで思索と探究を続けた。

幼い時に虹の謎を解いた話や、蓄音器の仕組みが知りたくて

それをばらばらにしてしまった話などは、幼年時代の主席の探究力をよく物語っている。小学校時代にはよく質問をする生徒として知られていたが、その質問に教員がたじたじとなることもあったという。

主席は早くから神秘主義を一種の病気と見なし、人が神秘主義の病気にかかると愚か者になると考えていた。「大きい頭に小さい脳」という言葉があるが、主席はこのような人を一番憐れんだ。何事によらず最後まで掘り下げて思索と探究を続ければ、この世に神秘なことは一つもないというのが主席の独得な思考観点であり、うむことを知らぬ探究姿勢であった。

特に、現実の中における真理の体得は、主席が早くから体質化した重要な探究方法であった。

先に述べたように、朝鮮反日民族解放運動の指導者であった父の金亨稷が、日本帝国主義の弾圧と革命活動上の関係のため、しばしば活動拠点を移したので、主席の一家はそのたびに居を移さなければならなかった。主席は、5歳の時には万景台から烽火里に、6歳の時には烽火里から再び万景台に転居し、7歳から13歳までは万景台から中国・東北地方までの道を何回も行き来した。その過程で主席は、搾取と抑圧に苦しむ人民大衆の境遇と抑圧者、略奪者の本性を悟った。また、正義と真理に対する熱烈な志向を培い、革命的かつ科学的な世界観の

基礎を一つ一つ築いていった。

朝鮮革命の進路を新たに、独自に切り開かなければならなかった主席の人一倍の責任感と探究心は、主席を新しい大学、革命実践という大学へと後押しした。

主席には大学卒業や研究機関修学の経歴がない。もとより、専門の学術団体や出版・報道機関に勤務したことはさらさらない。一言で言えば、主席が物静かな書斎で思索をめぐらし、探究を行ったことは皆無である。

かと言って主席の生涯に正規の大学で専門教育を受ける機会が全くなかったわけではない。1930年代の初め、コミンテルンと同志たちが主席にコミンテルンがモスクワで運営する大学で学ぶよう勧めたことがあった。

その時、主席は、朝鮮革命に関する戦略戦術と方法論を見いだすためには人民の中に入らなければならない、人民の中に入って彼らと生死を共にしながら朝鮮革命を完成するための方法論を見いださなければならない、私はソ連ではなく人民の中に入って朝鮮革命の理論と方法を学ぶ、と断言した。

1984年12月5日、金日成主席は党と国家の責任幹部への談話で次のように述べている。

「私はこれまでほぼ60年にわたる革命闘争の過程で、地下革命闘争と武装闘争を指導し、民主主義革命と社会主義革命も指

導し、社会主義建設も指導してきましたが、革命と建設に必要な知識を学校の教師から学んだことはこれといってありません。もちろん、なかには書物から学んだこともありますが、ほとんどは革命同志と人民の中に深く入り、彼らと生死、苦楽を共にしながら実践を通じて体得したものです」

1988年1月1日にも、主席は幹部たちに活動方法と作風について述べ、あの時私は、朝鮮革命については朝鮮人民が一番よく知っている、朝鮮革命に関する戦略戦術と方法論を見いだすためには朝鮮人民の中に入っていかなければならない、人民の中に入って彼らと生死を共にしながら朝鮮革命を完成するための方法論を見いださなければならないという信念を持って、ソ連に留学せず、人民の中に入って革命闘争を行ったのがどんなに幸いしたか知れない、と感慨深げに語った。

職業革命家としての道を歩むにあたって主席が打ち出した目標は、人民を師と見なし、彼らが体現しているすべてのものを学ぶことであった。主席にとって革命実践が知識と探究のための巨大な専攻であったとすれば、主席がこの上なく立派な師として押し立てたのはほかならぬ人民であった。

生誕70周年を迎える意義深い席においても主席は、人民は常に私の手厚い保護者であり有り難い恩人であっただけでなく、立派な師であったと真情を吐露した。

1994年4月、朝鮮を訪問したアメリカのCNNテレビ放送会社の記者団と会見した時にも、主席は**「私の最も知恵深い博識な教師は人民」**だと言った。そして感慨深げに自身の半生を顧みて、**「人民の中には哲学もあれば経済学もあり、文学もあります。それで私はいつも人民の中に入り、人民から学んでいます」**と語った。

主席のこの言葉は、朝鮮革命を勝利へと導く全期間にわたって人民大衆を師と見なしてきた自身の革命指導史を端的に集約化した名言であった。このように、人民を師と見なすのは主席の生涯にわたる信条であり、主席が活動と生活に具現してきた鉄則であった。

主席は、何かを一つ思索し探究しても、それはひとえに人民の自由と幸福、革命と建設の勝利のためであり、いつも人民の率直な意見に探究の種と糸口を見いだした。

それについて主席は、1980年6月14日のペルー・朝鮮親善文化協会代表団への談話で**「労働者、農民の言うことは平凡なようでも、その中に核心があります」**と述べている。

人一倍知性を愛した主席にとって、人民は搾取と抑圧に苦しむだけの無知な存在ではなく、この世で一番立派な師であった。

1991年、祖国を訪問して主席と旧懐の情を分かち合った在

米同胞の孫元泰は、国のあらゆる問題、ひいては複雑な経済問題にまで精通し、それを具体的に指導する主席の高い実力に驚いた。

　すると主席は、**「先生は私が経済学を専攻していないのに経済的な見積もりに明るいと言われましたが、私は常に人民から学んでいます。いつも人民の中に入り、彼らに教えたり彼らから学んだりしています」**と言った。

　主席は、革命家の真の探究はなんのためのものとならなければならないか、一生をささげて達成しなければならない探究の内容はどんなものか、探究の高い目標に到達するためにはどこから何をどのように掘り下げなければならないかといったことをすべて平凡な人民大衆と革命実践に求めた。

　……人民を師と見なし、生涯人民から学んだので、金日成主席がチュチェ思想のような人間中心の偉大な思想を創始し、百科全書的な思想と理論を打ち出すことができたことを知った私の気持ちを今なんと表現したらよいのか分からない。人民を師と見なした金日成主席こそ偉人の中の偉人である。……

　これはチュチェ思想国際研究所の初代理事長であった安井郁の言葉である。日本の法政大学教授であり、法学博士であった安井郁は、1950年代に原水爆禁止のための積極的な社会活動を繰り広げたことによって国際レーニン平和賞とドイツ平和賞を

授与され、1965年には世界平和研究所を設立し、その所長を務めた。彼は世界のほとんどの国を訪問し、世界の数多くの著名な政治家と会見した高名な国際問題の専門家であった。

安井郁がチュチェ思想の熱烈な信奉者となり、金日成主席に欽慕の念を抱くようになったのは、チュチェ思想に接し、特に、1970年代の初めに再三朝鮮を訪問して主席と会見した時からであった。その時彼を感動させたのは主席が非常に博識だということであった。

彼は自分の文に、マルクス・レーニン主義に接した時から50年近くになり、マルクス・レーニン主義の創始者たちの歴史的遺産から多くの教訓を得たが、研究の過程ではいつももどかしさを覚えた、金日成主義こそがまさに私が研究している問題点に対して百科全書的な面と深さと豊富さをもって明確な回答を与えた、と書き記した。

彼は主席の卓越した識見と思想・理論に深く感服した。主席は、政治なら政治、哲学なら哲学、経済なら経済、文学なら文学、実にどの分野であれ知らないことがなかったし、国際問題においても専門家である自分も感心するほど非常に深みのある豊かな見識を持ち、すべての問題について一家言を吐いた。

彼は、専門の学者でもない一国の政治家である主席がどうしてそんなに博識なのかという疑問を解くことができなかった。

後日、朝鮮の社会科学者代表団に会って話し合う過程で、主席は革命に身を投じた時から人民を師と見なし、生涯人民から学んだので、あのように多くの知識を得ることができたと知って膝を打った。人民を師と見なし、人民から学んだ偉人、ここに過去の政治家や偉人と根本的に異なる主席の特出した偉人像があったのである。

主席は80を過ぎた晩年まで、工場や農村を訪ねて人民の声を聞き、彼らと打ち解けて絶えず新しいものを探究して定立した。その過程で、人民の気持ちを誰よりもよく分かる博士、政治や軍事、経済や文化を完全無欠に体得した博識な人、朝鮮革命の戦略と戦術を最も完璧に示す傑出した戦略戦術家としての資質と品格を全面的かつ完璧に備えた。

このように、金日成主席の生涯は、人民を最も傑出した師、革命実践を最高の大学、必須の専攻と見なし、終生探究を続けた偉大な生涯であった。

主席は人民の中に入って、個々の分野でなく、革命という巨大な偉業を専攻とし、それを終生研究し続けた。

思想・理論の分野においても、誰もがすぐ理解できる人民大衆の運命開拓のための思想と理論を打ち出し、それを膨大で複雑な朝鮮革命の諸問題を解決しうる百科全書的な思想・理論に発展させた。

主席が示した反帝反封建民主主義革命に関する思想と理論、社会主義革命と建設に関する理論、全社会の革命化、労働者階級化、インテリ化に関する理論など民族解放、階級解放、人間解放に関する理論と、党、国家、武力、経済、文化などあらゆる分野に関する理論は、すべてその時代性と独創性、完璧性により永遠の生命力を持つ思想であり理論である。

金日成主席は、朝鮮革命の具体的な現実問題の研究を第一としながらも、他国の先進的な経験や実態についても決して無関心ではなく、絶えず探究した。先進的な思想を探究するにしても、経済問題と科学や文化の問題を探究するにしても、孤立主義的で民族主義的な傾向を排した。主席が終生反対したのは、自主性を失って他国に盲目的に従い、自分の力を信じずに他国に依存し、他国の経験に批判的に対するのでなく鵜呑みにする傾向であって、決して閉鎖主義ではなかった。

主席は常々、事大主義的な傾向にあくまで反対しなければならない、だからといってわれわれは昔のある王のように鎖国政策をとったり孤立主義に走ってはならず、外国の科学技術を取り入れることに反対してはならないと述べていた。

1984年にヨーロッパを訪問した時のことである。旧チェコスロバキアの某自動車工場を見学した時、主席は、トラック1台を生産するのにかかる時間やその重量、燃料の消費量、エンジン

の鋳造に使われる金属材料など、自動車の生産に関するさまざまな問題について尋ねた。その国の幹部たちは、世界が認める傑出した政治家である金日成主席が自動車生産に関する細かい技術上の問題にまで精通していることに感嘆した。

このように主席は、祖国と民族の富強・繁栄に少しでも資することであれば深い関心を払って研究した。

終生人民の中にあって、革命実践における不眠不休の探究によって高い知性の世界に達した金日成主席の生涯は、文字通り実践における特異な学歴でつづられた革命的生涯であった。

一生続けた読書

本のない生活というものは考えることができない。理性と探究心を持つ人なら誰でも本を愛し、読書を好む。

しかし、革命と建設の重荷を一身に担いながらも読書を中断しなかった偉人、終生本を愛し、読書に生きがいを見いだした偉人はまれであろう。

金日成主席は人一倍本を愛し、終生読書を中断しなかった愛書家であった。主席の読書熱は、本と読書に対する主席の気高い観点の発現であった。

主席は、本を単なる知識の伝達者でなく、生活と闘争の最も

重要な武器、無言の師と見なし、常々、本は人々に知識を与え、真理を悟らせてくれる無言の師だと言っていた。

1987年2月のある日のことである。

主席が生まれて幼年時代を送った万景台の生家とその周辺の事績遺物を見て回った旧ソ連の児童文学雑誌社主筆が、書物が主席にどんな影響を与え、それらの書物が困難な時期に何を教えたのかと質問した。

主席は、自分の思想と信念、意志は一朝一夕にして生まれたものではなく、長期にわたる闘いと生活の過程で生まれたものである、その最初の出発点はほかならぬ読書を好んだ幼い頃だったと思う、と答えた。そして、自分にとって書物は、闘いと生活の真理を教えてくれた立派な教師であり、真の人生の出発を助けてくれた道連れだった、と感慨深げに語った。

主席が少年時代を送った万景台の家庭は、実際、主席の学費を工面するのも困難な状態であり、主席が読みたい本を手にするのは容易でなかった。

主席は中学時代、金がなくて本が買えないので進んで学校の図書室の責任者になり、図書室運営費の半分以上を新書の購入にあて、新聞も一度に1カ月分の図書館閲覧券を出して読んだ。

主席が本をどんなに愛し、読書熱がどんなに高かったかを語る逸話がある。

1. 探究に探究を重ねた生涯

祖国解放（1945年）の前夜に、主席が対日作戦会議に参加するために何人かの指揮メンバーと共にモスクワへ行った時のことである。招待所にいた主席はある日の晩、本に関する素晴らしい夢を見た。

大きな部屋の書棚に本がぎっしり並んでおり、抗日の女性英雄金正淑（キムジョンスク）女史が、これらの本を思う存分お読みください、本がこれだけあれば司令官同志が一生読み続けても読み切れないでしょう、と言うのであった。一瞬にして蔵書家になった夢であった。

この夢の話を心に留めておいた金正淑女史は、解放後、解放山のふもとの邸宅に各分野の本が書棚にぎっしりと並んでいる書斎を整え、主席に、もう国も解放されたのですから思う存分本をお読みくださいと言った。この日、主席は夢がかなったことを喜び、書斎で金正淑女史と共に意義深い記念写真を撮った。

このように、主席の本に対する愛着、読書熱は夢に見るほど強いものであった。

人が本をたくさん読む時期は大体限られている。しかし、本を革命家にとってなくてはならない糧、革命の道で失ってはならない第一の道連れと見なした主席は、幼年時代に体質化した読書を終生たがえることのない日課としてきた。

実際、主席は終生仕事に追われていたと言っても過言ではない。人民の運命を守るための2度の革命戦争と幾段階の社会革命の重荷も一身に担い、党と国家の活動、軍隊の活動、経済活動や対外活動など国の大小の仕事が主席の肩に掛かっていた。また、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、ラテンアメリカの多くの国の指導者や人士が引っきりなしに主席を訪ねてきた。

しかし、主席が本を読まない日は一日もなかった。時と場所を選ばずに本を読み、革命と建設を指導しながら空き時間をすべて読書に当てた。早朝には新聞や新しい通信資料を読み、仕事の合間には各種の図書や雑誌を読み、夜には夜で小説をはじめ各分野の本を読んだ。

主席は10代の少年時代に、大人も難しがる『共産党宣言』や『資本論』『社会主義大義』のような先の理論家たちの著作を耽読し、それに完全に精通した。また、『李舜臣伝』や『春香伝』『沈清伝』のような朝鮮の歴史や昔の生活を反映した本はもちろん、『鴨緑江上』『母』『阿Q正伝』『レーニン一生記』『少年漂泊者』『祝福』『壊滅』『鋼鉄はいかに鍛えられたか』『チャパーエフ』『アブ』『西遊記』のような外国の革命的な文学作品や歴史小説もたくさん読んだ。

主席は外国語の学習に力を入れたので数カ国語を身につけていた。中国語は原稿なしに談話や演説ができるほど堪能であっ

た。それで、年を取っても外国の多くの政治書や科学技術雑誌を読むことができた。

主席にとって本は光明をもたらしてくれる灯火のようなものであった。それで主席は本を生涯の友としたのである。人民に玉子と肉を供給しなければならないと考えたら、戦時中でもニワトリの飼育法に関する本を読み、人民にサツマイモも供給しなければならないと考えたら、夜を徹してサツマイモ栽培に関する本を読み通した。また、外国の先進的営農技術を体得するために、農業技術に関する外国の書籍を毎日2時間以上読んだ。

それゆえ、ある文筆家は、金日成主席が本を友として続けてきた苦心惨憺の探究と、そうして極めた知性の高さを正確に測ろうとするなら、人類の身長が今よりずっと高くなければならないだろうと述べている。

人の心を推し量って

金日成主席は、人間を最も尊び、いつも人民の中にあって、各階層の数多くの人の心を正確に推し量る人間の心理に精通した偉人であった。

主席は人に対する時、まずその心中を推し量ることを鉄則と

した。そして、人々の心理状態を正確に把握した上で話をし、仕事の手配もした。個々の幹部に簡単な課題を与えたり何か聞くことがあっても、直接会って話し、心理状態を把握してから課題を与え、仕事の手配をした。

人が人の心を正確に把握するというのは決して容易なことではない。それは、人の心の内や心理状態が常に表面化しているわけではないからである。千丈の水の深さは測れても一丈の人の心は測れないという言葉がある。これは、千丈の水の深さは苦労をいとわずにその中に入れば知ることができるが、人の心の深さは一丈にもならないが思うがままにのぞいて見ることができないという意味である。

このように人の心を把握するのは難しいことであるが、主席はこの問題を片時もおろそかにしたことがなく、相手が誰であろうと瞬時にその胸中を見通した。

金日成主席が人の心を把握する上で常に重視したのは、具体的な状況下における人々の感情と志向であった。

各階層の多くの人々に対する時、主席がまず注意を払ったのは、彼らの具体的な感情・情緒状態を把握することであった。

主席が重視し、推し量った人々の感情・情緒には、頑是ない子供の気持ちや青年男女の愛情、さまざまな職種の人たちの職

業的特性による感情的・情緒的趣味、年長者の感情の細部など、人間が体験しうる心理現象がすべて含まれていた。

主席が人々の気持ちをどんなによく理解したかは、小学生がそれまで誰にも話さなかったことを主席にそっと耳打ちしたり、老人が膝を打って話したかったことをみな話したことを見てもよく分かる。主席はまた、戦況が困難で複雑であっても、人々の感情と情緒を重んじてつぶさに把握し、それに応じて彼らに接した。

初期革命活動を展開していた時期、主席はまだ10代であった。しかし、主席の行く先々で人民は、自分たちの気持ちを誰よりもよく分かってくれ、それに応じて接してくれる主席を心から尊敬し慕った。

抗日武装闘争の時期、主席が部隊を率いて汪清地方で遊撃区生活をしていた1930年代の中頃のことである。ある日、小汪清を発った部隊が嘎呀河方面に行軍していた時、見知らぬ娘に行き合った。微笑を浮かべて隊伍を眺めていた娘は、隊伍が近づいて来ると目を伏せ、そそくさと通り過ぎてしまった。ところが、隊員の一人が彼女の方を振り返ったかと思うと、うつむいて何か物思いにふけるような様子で歩き続けるのだった。そして、彼はまた後ろを振り返った。

主席は、誰も気にとめなかった彼らの行動と懐かしげな隊員

の視線に、哀憐の情に燃える青年男女の胸中を瞬時に読み取った。そして、その隊員を呼び出し、小声で今しがた通り過ぎた娘と何か縁があるのかと聞いた。

　すると隊員は、ぎこちない笑みを浮かべて、あの娘はいいなずけであり、彼女に自分の軍服姿を見せたいと言った。愛情が溶岩のように噴出する青年男女の気持ちを読み取った主席は、心置きなく彼女に会い、君の軍服姿も見せるようにと言い、部隊に休憩の命令を下した。主席の命令が下るやいなや、隊員はいいなずけのところへ一目散に駆け出した。その後、二人は祖国と民族に恥じることなく、最後まで反日闘争を続けた。

　こうした感銘深い話は抗日武装闘争の時期だけでなく、その後にも数限りなくある。愛の力は非常に強いものである。しかし、春日のかげろうのように、誰かに見つかりはしまいかと心の奥に人知れず芽生える青年男女の愛情を読み取って守ってやらなければ、それは絶対に美しい花として咲くことができない。長きにわたる革命の日々、主席はこのように、実の親のように青年男女の愛を誰よりも深く読み取り、花と咲かせたのである。

　金日成主席が人の心を把握する上で感情・情緒に劣らず重視したのは人々の志向であった。

1. 探究に探究を重ねた生涯

人々の感情・情緒を読み取ることが主席が人の心を把握するために必ず経た第一工程であったとすれば、人々の志向と要求を正確にとらえることは、人の心の中に深く入る今一つの重要な目標であった。

主席は、革命的生涯の全期間にわたって人民大衆の志向と要求を正確に把握することを自身がなすべき最も重要な活動の一つと見なし、いつどこにあっても人々の志向と要求を把握することに大きな注意を払った。

主席が生前会った人は数知れない。人々の国籍や経歴、年齢や職業、出身や社会的地位がさまざまだったので、彼らの志向と生活上の要求もやはり百人百様だった。

しかし、主席は千差万別の人々の志向と要求を常に注意深く透視し、それに応じてすべての活動を行った。工場を訪ねては、労働者をさびしがらせてはいけないと、ガスの臭いがする生産現場にも足を運んだ。

主席が人々の志向と要求をどんなに重視し、深い関心を払ったかは、人々の苦情申し立てに対する幹部の姿勢と立場を正したことにもよく現れている。

苦情申し立ては、個人や集団の権利や利益に対する侵害を未然に防いだり、侵害された権利や利益を回復することを党および国家機関、企業、勤労者団体に提起する人々の要求である。

苦情申し立てが提起されたら、実態を正確に把握し、問題解決の実務的対策を立てることで苦情申し立ての処理を終えるのは、どこでも一般的な慣例となっている。

しかし、主席はそれだけでは人々の要求をかなえることができないと考えた。1966年10月18日に朝鮮労働党中央委員会の幹部に行った演説と多くの談話で、主席は、人民の苦情申し立てを処理する上で幹部が取るべき姿勢と立場について述べた。

主席は、一部の幹部は「閻魔大王」のように振る舞い、人民の苦情申し立てを官僚主義的にいい加減に処理していると厳しく批判し、苦情申し立ての手紙を受け取ったら、幹部は当然、苦情申し立て人がどんなに思い悩んでこの手紙を書いたのか、どんなに悔しくて苦情申し立てをしたのかを深く考え、問題解決の科学的方途を正確に見いだすべきであると切々と述べた。

人間を知り、大衆の心を正確に推し量るのは、主席が最も重要なことと見なした革命家の第一の実力であった。対人活動は本質上、人の心、思想・感情との活動である。人の思想・感情を正確に知り、それに応じて大衆を動かしてこそ、形式主義や主観主義、官僚主義や教条主義を犯すことなく、すべての活動を立派に行うことができる。

それゆえ主席は、人の心を知り、その具体的な心理状態を正確に把握することを革命家が備えるべき第一の実力と見なし、機会あるごとに幹部たちに、子供の心理をよく知っている小学校の教員のように、人の心理をよく読み取り、それに応じて活動すべきであると強調したのである。

金日成主席は、人の心を推し量ることを革命家の第一の実力と見なしていただけでなく、長きにわたる革命闘争の過程を通じて、さまざまな部類に属する人々の群集心理を誰よりもよく知っていた。

主席自身が述べているように、主席は小学校と中学校に通ったので青少年・学生の心理をよく知っていたし、長年軍隊生活をしたので軍人の気持ちを誰よりもよく知っていた。それで抗日武装闘争の時期、隊伍を率いてマクワウリ畑のそばを通りかかった時、マクワウリを食べたいという隊員たちの気持ちを見て取り、その思いをかなえてやったのである。また、人民軍の指揮官たちには、軍人たちが自分の家にいる時のように餅やそば、初トウモロコシ、マクワウリといったものを切らさずに食べさせるようにと指示した。そして、工場や農場に出向いては、労働者の油だらけの手を握り、農民の泥まみれの手を見て「宝の手」だと言って、彼らを励ました。

1951年1月、人民軍の再進撃が始まり、最高司令部が乾芝里

にあった時のことである。

戦局は転換期に入っていたが、最高司令部の生活状態は困難を極めていた。

ある日、最高司令部の親衛中隊を訪ねた指揮官が、最高司令官同志が中隊に来られたら生活状態を確かめるだろう、子供たちが満足に食べていないのを見たら父親がどんなに心を痛めるか知れない、最高司令官同志が何を食べたのかと聞かれたら、白米の御飯に肉汁を食べたと答えるようにと頼んだ。

彼が言った通り、しばらくして金日成主席が中隊を訪ね、まっすぐ食堂へ足を運んだ。兵士たちが朝食を終えたことを知った主席は、**「今朝は何を食べたのか」**と聞いた。彼らが口をそろえて「白米の御飯に肉汁を食べました」と答えると、主席はいぶかしげな顔をして釜のふたを開けた。

塩汁を沸かした釜がきれいに洗われているのを見てしばし黙考していた主席は、**「なんの肉を食べたのか」**とまた聞いた。そんなことを聞かれるとは思っていなかった兵士たちは互いに顔を見合わせていたが、あわてた指揮官が「冷凍しておいた豚肉を食べました」と言い繕った。

すると主席が**「暮らし向きが結構なようだ。肉を煮たそうだが、釜をきれいに洗ったので油気が全然ない」**と言ったので、兵士たちは思わず爆笑した。

兵士たちの気持ちを読み取ろうとするかのようにじっと彼らの顔を眺めていた主席は、低いが厳しい口調で**「私は君たちにうそをついたことがないから、君たちも私にうそをつかないだろう」**と言った。

みながうつむいておし黙っていたが、一番年少の兵士が、本当は雑穀の御飯に塩汁を食べたと正直に言った。

すると主席は、君はいつから兵士たちにうそをつくことを教えたのか、われわれがいくら困難な状態にあっても兵士たちに腹一杯食べさせることができないわけはない、と指揮官を厳しく批判した。そして、どこそこへ行けば蓄えてある米があり、どこそこへ行けば塩漬けにしたサバがあるから早く運んできて兵士たちに食べさせるようにと言った。数日後、米や肉、魚、野菜などが中隊に到着し、兵士たちに供された。

このように、子供の心を読み取る親のように、人の心を推し量り、導いてくれる温かい愛情があったがゆえに、朝鮮人民は主席に人間的に完全に魅せられ、革命と建設で奇跡と偉勲を生むことができたのである。「人の心を推し量る博士」、これは、いつも人の心を見通し、人々の思想・感情との活動を第一として大小の国事をこなしてきた主席に全人民が贈った呼称であった。

秀でた記憶力

真の知性人は、世界を見通すすぐれた眼識と共に、誰よりも多くのことを心にとどめておくことができる秀でた記憶力の持ち主である。多くのことを詳しく知っているだけでなく、一旦体得した事理や事実、事件を歳月が流れても色あせることなく記憶している偉人であってこそ、真に人類の知性の代表者だと言える。

金日成主席は、数十星霜朝鮮革命を導く過程で見たり聞いたりしたこと、経たり体験したりしたことをほとんどすべて正確に記憶しており、それをいつでも再現できる秀でた記憶力の持ち主であった。

主席は、長きにわたる人類史の軌跡とそれに刻まれた数限りない事実や事件、それに関連のある数多くの人々を晩年に至るまで鮮やかに記憶していた。また、20世紀の大小の事件、朝鮮革命の膨大な問題を扱う過程にあった数知れない出来事と数千数万の人々を鮮明に記憶していた。

主席が昔読んだ本の内容を後年まで記憶にとどめていたことを物語る逸話がある。

いつか主席はある幹部に、解放前に朝鮮で出版された『開

闘』という雑誌を見たことがあるかと聞いた。そんな雑誌は見たことがないと彼が答えると、主席は、その雑誌にはすぐれた文章が多く掲載されたものだが、探してみるようにと言った。

数日後、彼がその雑誌を70冊余り手に入れたと報告した。すると主席は、その雑誌には朝鮮の近代の哲学者の一人である李敦化の文章が掲載されている、その中には見るべきものが多いと言った。高齢の主席が半世紀前に読んだ小さい雑誌の内容をあまりにも詳細に記憶していることに、その幹部は驚きを禁じ得なかった。

金日成主席は、読書や学習を通じて知った事件や事実はもとより、自分が目撃したり体験した数限りないことも終生記憶していた。

主席が記憶にとどめていた事実や事件には、朝鮮民族の抗日武装闘争史、解放後の建党・建国・建軍をめざす新しい祖国建設闘争、祖国解放戦争、社会主義革命・社会主義建設のための闘争期の数々の出来事は言うまでもなく、誰もが気にもとめなかった些細なことまで含まれていた。

主席は、自分が経た数多くの出来事の原因と過程、条件と実態、結果と意義などについて詳細に記憶しておき、いつ何時でもそれを再現して人々を驚嘆させた。

1983年7月20日、長年主席の側近として仕えてきた活動家が、龍浦革命事績地を参観した外国人の感想を主席に報告した。

翌日、彼を執務室に呼び寄せた主席は、龍浦革命事績地は江原道法洞郡にあり、自分は1951年4月26日から29日にかけて、当時そこにあった部隊の指揮部を現地指導したと感慨深げに回想した。

窓辺で深い感慨にひたっていた主席は、ふと彼に**「たぶんあの時、君も私について来ただろう」**と聞いた。思いがけないことを聞かれた彼は、30余年前のことを思い出そうとしたが、どうしても思い出せなかった。

主席が重ねて、あの時、故障した車を引っ張っていくようにと君に命じたではないかと言って、彼はやっと一人で車を守るために一夜を明かしたことを思い出した。

それはこういうことであった。彼は前線へ赴く主席の車に同乗していたが、途中で車が故障してしまった。仕方なく主席は車を乗り換え、彼は故障した車を終夜守ることになった。敵の敗残兵がいつ蠢動するか分からない夜、一人で車を守らなければならない彼は、寒さと恐れのため一晩中まんじりともしなかった。これほど恐ろしい目にあったのだから一生忘れられないはずだが、長い歳月が流れたので、そんな目にあった当事者

自身もそのことをすっかり忘れていたのである。

しかし主席は、本人も忘れていた数十年前のことを子細に記憶しており、30余年後にそれを回想したのである。実に主席は、生涯体験したことをすべて鮮やかに記憶していた非凡な才能の持ち主であった。

金日成主席が回顧した歴史的事件や事実は、ほとんどがその主人公である人々を追憶するものであった。

主席は特に、自分と共に革命の試練を乗り越え、先に逝った革命同志の一人一人を終生記憶にとどめていた。

1964年5月某日、黄海南道一帯を現地指導していた主席は、この地域に位置するある単位を訪ねた。

その単位の責任幹部から報告を受けていた主席は、彼の顔をじっと見つめた。

現地指導を終えて帰るやいなや、主席はある活動家に、あの単位の責任幹部は誰の息子かと聞いた。彼が知らないと答えると、主席は、新しい世代の若い幹部に会うたびに先に逝った戦友たちを思い出す、彼の家族のことを調べてみるようにと言った。

その時はまだ、その責任幹部の顔を見た瞬間、主席が先に逝ったある戦友の面影を思い浮かべたことを知る者はいなかった。数日後、その責任幹部が抗日武装闘争の時期に和竜遊撃隊の政

治委員をした人の息子だという報告を受けた主席は、**「そうだそうだ、目つきが父親そっくりだ」**と、失った息子を捜し出したように喜んだ。

そして、彼を見た瞬間、和竜遊撃隊の政治委員をしていた李栄燦の姿が浮かんだと言い、李栄燦の性格と特徴について具体的に語った。主席の話は、李栄燦が非常に有能な政治委員であったし、抗日の老闘士であるある幹部が李栄燦の入党を保証したということにまで及んだ。そこに居合わせた幹部たちは、数十年前に共に戦った戦友の顔立ちまでそのまま再現する主席の秀でた記憶力に感嘆した。しかし、それにもまして驚くべきことは、李栄燦が和竜遊撃隊の政治委員として活動した時期は1年足らずだということであった。

実際、主席は、5・30暴動（1930年5月、中国・東満地域で起きた極左冒険主義的暴動）後、破壊された革命組織を立て直すために大拉子の仮小屋で政治工作員・地下革命組織責任者会議を指導した時と、1931年春の明月溝会議後、抗日武装隊伍結成の準備を進めていた時に何回か李栄燦を呼んで任務を与えただけで、それ以外に会ったことはほとんどなかった。主席が抗日武装隊伍を結成した後は、和竜遊撃隊の活動状況は連絡員を通じて報告されたのである。

にもかかわらず、父親の顔立ちの一部が似ているにすぎない

息子を見た瞬間、その戦友の面影を思い浮かべたのだから、主席の記憶に戦友たちがどんなに生き生きした姿で残っていたかは推察に難くない。

主席が終生記憶していた人々は朝鮮人だけではなかった。

抗日戦争が終わって半世紀になんなんとしていた1994年のある日、主席は平壌に招いた中国人抗日革命縁故者である柴世栄の夫人と感激の対面をした。遠路の労をねぎらった主席は、私たちが別れたのは1945年8月頃で、一緒に来たこの次男はその時2歳くらいだったと記憶を手繰り、柴世栄と苦楽を共にした半世紀前のことを追憶した。

柴司令の本名を教え、彼は和竜県のどこかで警察署長をしていて救国軍に入り、私と一緒に東寧県城戦闘や羅子溝戦闘も行い、ソ連に行ってからも一緒に活動した、柴司令は活動舞台を北満に移した後、東北抗日連軍5軍の軍長にまでなった、私が2度目に北満に行った時、彼の部隊としばしば連合作戦を展開した、と言った。そして、彼は私より20歳ほど年上だったが、私を革命の先輩として遇してくれ、いつも腰が低かったと語り、互いの友情を深めた数々の昔話をした。

半世紀前の細事まで覚えている主席の秀でた記憶力に、柴世栄の夫人はもちろん、主席を補佐している人たちも驚きを禁じ得なかった。

主席は晩年にも、数多くの外国人だけでなく、幼年時代に耳にした村の巡査や地主の名前まで正確に記憶していた。

実際、歴史学を専攻した学者でもない、国の政事を見なければならない一国の元首が、大小の事実や事件、それに関連する数知れない人をすべて記憶するというのは全く信じがたいことである。しかし主席は、生涯にわたって見聞したこと、感じたり体験したことをほとんどすべて正確に記憶していた。

主席は歴史の瞬間瞬間を、単に過去の事実や事件があった瞬間としてのみ見たのではない。主席は過去の瞬間瞬間を、今日と明日のための経験を蓄積し、参酌すべき教訓を垂れる歴史の一ページと見て対したのである。

主席の一生の総括である回顧録**『世紀とともに』**には、9・18事変と朝鮮戦争が勃発した歴史的時期を分析した上で、帝国主義侵略戦争の最も一般的な手口と侵略者の面貌を明晰に定義した重要なくだりがある。

主席は回顧録で、相異なる時期に、異なる場所で、異なる帝国主義勢力によって起こされた侵略戦争である9・18事変と朝鮮戦争という二つの事件の背景を回顧し、それらに内在する明確な共通性を科学的に分析した。主席が導き出した共通性は、ほかならぬ二つの戦争の挑発者が同様に、自分たちの侵略行為

をおおい隠すために戦争開始に似つかわしくない行動をとったことである。

1931年には、満州侵攻のための全面戦争の導火線に火をつけた主犯たちが何食わぬ顔でソウルにやって来て酒宴を張り、泰然として「休息」をとっていたし、1950年には、朝鮮戦争の放火者であるトルーマンが戦争の勃発した時刻に自分の別荘で「安穏」と過ごしていたのである。

主席は、二つの戦争に見られるこうした共通点は帝国主義者に固有な狡猾さと破廉恥さ、侵略的本性の表れであると指摘した。二つの戦争を分析することによって帝国主義者の正体をあばいた主席は、異なる歴史的時代に、相異なる状況と契機に起こる種々の事件や事実をどのような立場に立って見、対するべきかについて、次のように述べている。

「歴史を、繰り返されない事件の累積だと言う人もいるが、その個々の事件の間に類似性や共通した傾向が見られるのも、また無視できない事実である」

主席が述べているように、歴史は単に非反復的な事件の偶然な累積ではない。歴史のあらゆる事実や事件にはそれぞれ固有な理由と過程、結果があるが、それには人類の歴史を一つの脈で貫く共通性と一貫した真理があるものだ。それぞれの事実や事件は個々別々のものであるが、それぞれの事実や事件には必

ず汲み取るべき貴重な経験と教訓がある。

主席はまさに歴史のこうした真理を誰よりも深く体得していたので、歴史の軌跡に刻まれた数限りない事実や事件を終生鮮やかに記憶していたのである。

金日成主席が数多くの歴史的資料や人物を終生はっきり覚えておき、追憶することができたのは、主席が人一倍すぐれた記憶能力を備えていたからでもある。

主席の記憶能力の今一つの特徴は、いくら新しく複雑なことであっても、一瞬にして最も正確に記憶することであった。主席は、あらゆることを最も早く、かつ正確に記憶する特異な能力を備えていた。

1984年に主席が旧ユーゴスラビアを訪問した時、チトー記念センターで随行員やセンターの管理人を驚かせる出来事があった。

センターには大きな熊の皮が1枚陳列されていた。解説員は主席に、その熊の皮を指しながら、チトー大統領がボスニア・ヘルツェゴビナで仕留めた熊の皮であり、世界祭典で金メダルを受賞したと説明した。すると主席は、チトー大統領が朝鮮に来た時、私は彼から熊狩り競技で1等賞をとったと聞いた、あの時、彼は493点をとったと言っていた、と話すのであった。

随行員とセンターの管理人は、7年前にチトー大統領から聞いた話はもちろん、狩猟競技の点数まで正確に記憶している主席を仰ぎ見て、驚きと感激を禁じ得なかった。

ずっと以前に耳にはさんだ数字まで正確に覚えている主席の記憶力は、文字通り反復したり間違ったりすることのない最も速く正確な記憶力であった。

主席の記憶力は強固さと持続性においても特出したものであった。主席には、年をとるにつれて記憶力が減退するという生理的変化もほとんど無視された。

金日成主席は回顧録**『世紀とともに』**で次のように述べている。

「歳月はあまりにも多くのものを打ち壊し、抹消して忘却のかなたへ追いやってしまう。喜びも悲しみも、日が経ち月が変わり年が過ぎるにつれ、しだいに薄れ遠ざかってしまうという。しかし、私の場合は必ずしもそうだとは言えない。倒れた戦友の一人ひとりがどうしても忘れられないのである。去った者も送った者も、骨身にしみる恨みをいだいていたためだろうか。私の記憶には、彼らの姿が数百、数千枚の鮮明な青写真のように刻みつけられている」

曲折の多い人生行路が生き生きと記されている青写真、それは、複雑多端な朝鮮革命の大小の出来事をすべて終生

胸に深く刻んでいた主席特有の記憶力に対する歴史の評価でもある。

主席の回顧録は、まさに世紀と共に数十星霜、時代と歴史、祖国と革命、人民の運命を一身に担い、その開拓と発展のための道を勝利に導いてきた偉人の指導の足跡が生き生きと描かれている不滅の大全書である。

主席の回顧録には数十年前に会った数知れない人が登場し、彼らの生活の細部、複雑な歴史的事実や事件、数多くの人についての詳細な回顧資料が収録されているが、それはすべて主席の記憶に基づくものである。

超人的な記憶力を備え、意義深い追憶に生きた金日成主席は、人々に真の知性の意味と高さを新たに教えた人間の知性の亀鑑である。

英知の灯

英知は人間の知性の高さを特徴づける重要な指標の一つである。

人々が生活を営んでいる現実は、過去からつながっている時の流れの延長線上に展開されたものであり、それはまた、新たに展開される未来につながる前の段階である。この歴史の流

れの中で人間は過去を振り返り、現実を透視するだけでなく、未来を予測しながら生きていく。過去を振り返ってこそ経験と教訓を得ることができ、現実を透視してこそ科学的な手段と方法を選ぶことができ、未来を正しく予測してこそ目的意識的に運命を切り開いていくことができるからである。過去と現在と未来に対する見識を持つ上で最も難しいのは、まさに未来を見通す英知を身につけることである。

科学的な英知は偉人の灯である。

真の偉人は金権や鞭ではなく、英知によって人々を覚醒させ、それを社会の発展を先導する最も強力な武器の一つと見なす。

金日成主席は、千里眼の先見の明によって革命と建設の多くの理論的・実践的問題を最も完璧に解決した天才的な偉人であった。千里眼の先見の明によって人民大衆の自主偉業の遂行を先を見通して導いてきた卓越した指導者だというところに、主席の偉人としての重要な特質の一つがある。

時間的に後に起こる事を前もって見通す能力がほかならぬ先見の明である。

先見の明は人間のすべての活動の成果を左右する重要な精神的武器であるが、願うからといって誰でも身につけられるものではない。それで「一寸先は闇」という言葉が生まれたのであろう。

金日成主席が備えていた先見の明は主席の特出した精神力であった。

前人未踏の道を踏み分け、朝鮮革命に関する問題を独自に解決しなければならなかった事情は、主席をして特出した精神力を身につけさせた。

主席が朝鮮革命の進路を切り開いていた時期、最大の苦衷は、当時朝鮮には取り入れるほどの革命遂行の教範もなければ、指導を請うほどの先覚者もいなかったことである。かといって、外部勢力に依存して国と民族の運命問題を解決していくわけにもいかなかった。すべての問題を自分の力で独自に解決しなければ一歩も前進させることができないのがほかならぬ朝鮮革命であった。

主席は、朝鮮革命のこうした条件に照らして科学的な独自の判断と決断を下すことを原則とした。

独自の路線と政策の樹立とその貫徹における成果は、科学的で現実的な判断と決心を前提とする。

そのため主席は、革命の前途を正確に見通し、今後の主体的·客観的条件と情勢を科学的に判断した上で、すべての路線と政策、戦略と戦術を立てることを鉄則とした。

朝鮮における土地改革は、植民地民族解放戦争の偉大な勝利がもたらされた地で、朝鮮人民が主席の指導の下に第一に

遂行した反帝反封建民主主義革命の最も重要な内容の一つであった。

解放後行われた土地改革は、没収対象と闘争対象の規定、段階別の遂行過程をはじめ、すべてが歴史に類を見ない独特な社会の変革であった。特に注目すべきことは、それが将来必ず遂行することになる社会主義革命の前提として、先を見通して行われたことである。

当時、立ち後れた農業国であった朝鮮において、人口の80%を占める農民の宿願は、自分の土地で農作を行うことであった。それゆえ、広範な大衆の長年の宿願を実現し、彼らを獲得するためには、彼らに土地を分与することが必要であった。

金日成主席はこうした現実の要求を正確に反映して、4万4000戸の地主の土地を没収して72万余戸に上る広範な農民大衆の宿願をかなえる土地改革を推進した。一方、土地改革がこの先、社会主義革命への移行と国の社会主義的発展の有利な条件をもたらす契機となるように、賢明な措置を講じた。

主席は、土地改革法令の草案が作成されていた時にすでに、将来、社会主義革命の段階で遂行することになる農業の協同化を見通し、農民は分与された土地を売買したり小作用に利

用したり抵当に入れたりすることはできないと明記するようにした。そうすることによって、自分の土地を持ちたいという農民の願い通りに彼らに土地の所有権を与えながらも、農村で小作制度と富農の復活を防ぐことができるようにしたのである。のみならず、富農に対しては、必ず自分が仕事をし、常時雇農を置くことを禁じるなどの制限措置もとった。こうした措置の目的は、富農経営の発展を制限して、将来、農業を社会主義的要求に即して協同化するのに有利な前提条件を整えることにあった。農業を協同化する上で主な闘争対象は富農であるから、土地改革を行う時に、富農経営が発展しないように前もって制限しておく必要があったのである。

主席の先見の明により、朝鮮における土地改革は1カ月足らずの短期間に徹底的に遂行されただけでなく、戦後、農業の社会主義的改造を最高の水準で遂行しうる確固たる前提がもたらされた。

主席が打ち出した自主、自立、自衛の路線も、時代と革命の前途を遠く見通す主席の先見の明によって朝鮮革命の戦略的路線として提示されたものである。自主、自立、自衛はチュチェ思想の重要な指導原則であり革命路線である。主席は、自主性は国と民族の生命であり、現代は革命と建設が国と民族を単位として進められる自主性の時代であるという、科学的洞察

と自主時代発展の合法則性に対する判断に基づき朝鮮革命の路程を自主の道と確定したのである。

金日成主席が備えていた先見の明はまた、大勢と情勢の推移を最も明確に判別して予言する科学的な予見性である。

主席は常に世界的規模で起こる事実や事件を注意深く透視した。そして、個々の事件を分析し、その結果を正確に一般化させて最も明確な予言をした。

旧ソ連が崩壊した後、朝鮮を訪問したロシアの高位級政客が「以前、朝鮮がセフ（コメコン）に加入せず、自立的経済を主張するからといってとやかく言われたが、セフに加入していた国はみな滅び、自立的民族経済を建設した朝鮮だけが社会主義を固守している。朝鮮は社会主義建設に成功した国だ」と言ったのは、世紀を超えて遠い将来まで正確に見通す主席の先見の明に対する時代の賛辞であった。

主席の先見の明は、国と民族の運命が決する1950年代の祖国解放戦争の厳しい試練の中で遺憾なく発揮された。

主席は、半島になっている朝鮮の地形学的特性のため、攻撃作戦の成果が拡大するほど海岸防御の意義が大きくなることを科学的に洞察し、戦線で拡大する成果に応じて2個軍団の兵力を朝鮮東・西海岸に進出させて海岸防御を強化するようにした。祖国解放戦争の全過程は、海岸防御を強化する

という主席の戦略的方針がいかに正当なものであるかを実証した。

アメリカ帝国主義は1951年から戦争が終わるまで、朝鮮の東・西海岸の元山や漢川などに上陸して朝鮮を両断し、戦線を北の奥深くに押し上げようと再三試みた。しかし、最後まで自分たちの目的を実現することができず、ついに朝鮮人民の前に膝を屈した。

戦争が苛烈を極めていた1952年に、すでに戦後の復興建設計画が作成され、戦場の兵士たちが大学に呼び戻されるといった驚異的な出来事も、戦争が勝利することを見通した主席の先見の明によるものであった。

1952年のある日、一人の外国人記者が最高司令部を訪ねてきた。そして、アメリカの大規模な「新攻勢」に関連して、今後の戦争の成り行きについての金日成首相の所見を聞きたいと言うのであった。

緊張した面持ちで部屋に入ろうとした記者は、予想に反して室内が静かなので驚いた。

主席は作戦台の前で何かを見ており、そばに立っている兵士が主席に何か話しているのであった。記者はいぶかしげに案内人の顔を見た。案内人は、今、最高司令官同志はあの兵士の学習状況を確かめているのだと耳打ちした。

記者が何のことか訳が分からず、ぽかんとしていると、案内人は、戦後の復興建設のために大学に帰す人たちを前もって準備させているのだと言った。

彼の言葉に記者はまた驚いた。

（それなら、首相はすでに戦争の勝利を確信しているのではないか?!）

記者は軽くうなずき、足音を忍ばせて部屋を出た。案内人がどうしたのかと聞くと、彼は興奮さめやらぬ面持ちで「もう結構です。私は取材を済ませました」と言うのであった。

このように、主席は先見の明によって革命と建設を勝利に導き、朝鮮人民に栄光をもたらしたのである。

金日成主席が先見の明によって朝鮮の革命と建設を勝利に導くことができたのは、主席がなんぴとも及ばない該博な知識と卓越した識見を身につけていたからである。

該博な知識を身につけ、多くの実践的経験を積んでいた主席は、古い経験を固執し、新しい眼識によって問題解決の方策を見いだそうとしない傾向を常に警戒した。

1954年10月某日、平安南道甑山郡二鴨里を訪ねた主席は、朝鮮戦争の一時的後退の時期、アメリカ帝国主義者のために30余人の親類縁者を失った農業協同組合管理委員長の心中を察して、一夜を彼と共に過ごした。

翌日、主席は膝まで来る草むらを踏み分けてナムリへ向かった。当時、この地帯は一面沼地で、道らしい道もなかった。沼のほとりを歩きながら何か考え込んでいた主席は、沼を一周してみようと言って小舟に乗った。

生い茂る葦を掻き分けながら現地踏査を終えた主席は農民たちと対座し、沼に堤を築けば地味の肥えた田地を10万坪ほど得ることができる、10万坪の田で米を生産すれば集落の農民の生活が富裕な中農の水準に達すると話した。農民たちはみな驚き、自分たちの耳を疑った。さざ波が立つさほど大きくないあの沼の底が果たして10万坪になるだろうかと考えたのである。彼らは二鴨里で数十年生きてきた人たちであった。しかし、毎日のように沼を眺めやり、折に触れて小舟で行き来しながらも、葦が生い茂った沼の底が一体どれほどになるのか知らなかったし、知ろうともしなかった。ところが、主席は小舟に乗って一度見て回ってすぐ10万坪ほどの土地を得ることができると明言したので、驚かざるを得なかったのである。

その後、主席の予測は実証された。二鴨里の農民たちは一丸となって取り組み、捨てて顧みなかった沼地を沃土に変えた。彼らがその面積を測ってみたところ、驚いたことに、それは主席が予言した通りちょうど10万坪だったのである。主席の

該博な知識と豊かな経験、神秘的な英知は文字通り千里眼であることを二鴨里の人々は今さらのように痛感した。

このように、金日成主席が備えていた千里眼の先見の明は、朝鮮の革命と建設に対する主席の指導を最も賢明で科学的な指導にならしめた根本的基礎であった。

2

熱烈な人民崇拝

金日成主席は限りなく熱い人、熱の人間であった。

つとに人間愛を第一の家風とする万景台の家門に生まれ、両親の教育と骨身にしみる生活苦の中で人間愛を気高い品性として成長した主席は、一生を人間愛の歴史として織りなしてきた。

主席は人間愛、人民愛によって朝鮮革命の錨をあげ、人民愛を最も強力な武器として2度の革命戦争を勝利に導き、創造と建設の新しい歴史を織りなした人間愛の化身であった。

主席が朝鮮人民に注いだ愛情を全部合わせれば、それはすなわち祖国と革命になり、正義と真理の世界になる。

人民大衆に注いだ愛情があまりにも温かく、いくら歳月が流れても冷めないものであるので、今日も朝鮮人民は主席を慈父として仰ぎ慕っているのである。10年経てば山河も変わるという。しかし、千年、万年の歳月が流れても変わらないのは、金日成主席が朝鮮人民に注いだ限りなく温かい慈父の愛情である。

天として尊んだ人民

愛は人間世界に固有の倫理である。愛があるので人間世界が美しいのであり、愛があるので人間は団結し協力して自分の運命を切り開いてくることができたのである。

金日成主席の人間愛は、人民を天のごとく尊ぶ熱烈な人民崇拝であり、人民への絶対的な信頼であり、温かく深い愛であった。主席の限りない人間愛は、全同胞と数多くの外国の友人を懐に抱いて愛情を注ぎ、見守る無限大の度量と包容力であり、石の上にも花を咲かせる崇高な革命的同志愛であった。

金日成主席は、特異な人間愛を最も高潔な品性として備えた人間愛の真の亀鑑であった。

主席に会った人がみな、主席の人柄に魅せられた理由としてその高潔な人間愛と徳望をあげているのは決して偶然なことではない。満面に浮かべた笑み、太くて温かい情があふれる声、大きな度量と包容力にすぐ魅せられ、温かい人間愛を感じるのは、主席に会った人がみな体験することである。

主席の偉大な人間愛が根を下ろし、育った土壌はほかならぬ万景台の家門である。

人間は誰もが、家庭という小さな垣根の中で人生の第一歩を

踏み出し、父母と家庭の懐で人生の道理を学び、人間的な品格と資質を備えていくものである。人間愛を最高の美徳と見なす万景台家門の家風は、主席が幼年時代から人間への愛、家庭と民族への愛、祖国と人民への愛を体質として成長するようにさせた土壌であった。

金日成主席の人間愛はまた、この世で人間を最も貴重な存在と見なし、人民を何よりも重んじる真の人間尊重の崇高な美徳である。

主席が創始したチュチェ思想は、人間をこの世で最高の尊厳と価値を持つ貴重な存在と見なし、人民大衆は最も聡明で有力な歴史の主体であると宣言した人間尊重、人間愛の思想である。

人間を貴び、人民を重んじる金日成主席の崇高な観点と徹底した立場の精華は人民崇拝である。主席は、終生人民を崇拝し、彼らに愛と情を注いだ人民の慈父であった。

人民大衆は、生活上の肉親愛と共に、社会の構成員がみな他人を同等の人格と尊厳を持つ人間として対し、尊重し、全社会が互いに思いやる社会的な愛情倫理を志向する。

主席は人間愛の花園を築くために一生をささげた。人間の尊厳と人格を尊重することを第一の愛と見なした主席は、人間愛、人民大衆尊重を革命の旗印として掲げ、そのために終生いばらの道を歩み続けた。

人間を貴ぶ金日成主席の人間愛は、人民を天として尊ぶ人民への熱烈な崇拝である。人民に対する主席の観点は、人民大衆こそは終生尊び、仕えるべき崇拝の対象だということである。

金日成主席が天道教（朝鮮民族の土着の宗教）の朴寅鎮道正夫妻と結んだ人間的なきずなに関する話は、人間が持つことのできる真の崇拝心の高さと真価をうかがわせる。

朴寅鎮道正は連共救国の道で功績を立てた抗日革命の愛国の士である。彼は、天道教に入信した後、天道教のさまざまな教職を務め、1932年に智源布の道正になった。当時、天道教は全国に29の布を設けたが、主に豊山、三水、甲山、長白などを包括していた智源布は全国最大の布組織であった。こうした点を考慮すると、彼は天道教団で相当な地位にあったことが分かる。

1919年の3·1人民蜂起の時、彼は豊山で反日デモを組織し、隊伍の先頭に立って1000余人の群集を率いて闘い、敵弾に当たって負傷し、逮捕された。そして西大門刑務所に収監されたが、獄中でも信仰心と抵抗の意志を曲げなかった。

その後、彼は独立軍を援助したり山奥で布教活動をしたりして日を送った。彼がようやく遊撃隊の政治工作の線とつながりをつけたのは、主席が1936年5月反日民族統一戦線組織体である祖国光復会を創立し、それを拡大するための闘争を展開していた時であった。

すでに『祖国光復会創立宣言』と『祖国光復会10大綱領』に接して共感を覚え、革命軍の代表との面談で肯定的な立場を表明していた彼が、主席に会うために密営に入ったのは1936年の初冬だった。

主席は数日間、夜を日に次いで内外の情勢や民族運動の実態、抗日武装闘争の発展過程など、さまざまな問題について彼と意見を交換した。

ある日、清水奉奠の時間（天道教で真鍮の器に入れた清水を供えて拝む時間）になると、主席は伝令に清水を一杯汲んでこさせ、彼に清水奉奠を行うことを勧めた。彼が金日成将軍の前で清水奉奠を行うことはできないと固辞すると、主席は信仰心の強い道正が教の掟をただの一度でも犯してはならないと重ねて勧めた。

仕方なく道正は呪文を唱え、水を一口飲んだ。そして、主席に「私にはぜひ、おうかがいしたいことが一つあります。私たちがハンウルニムを崇めるように、将軍も崇めるものがあるのでしょうか？　あるとすればそれはなんでしょうか」と聞いた。

ハンウルニムというのは、朝鮮の民族宗教である天道教で世界の始原、万物の根源と見なす「至気」の実体を指す言葉で、最高の崇拝対象を意味するものであった。常識的に考えると、共産主義を信奉する人たちが宗教を信じる人たちのように、あ

る対象を崇拝するというのは到底あり得ないことだった。朴寅鎮道正も共産主義者たちが神を信じないことを知らないはずがなかった。

しかし、主席は彼の質問を自分に対する信頼の表示として受け止め、こう答えた。

「……もちろん、私にも神のように崇めるものがある。それはほかならぬ人民である。私は人民を天のごとく見なし、神のごとく人民に仕えてきた。私の神はほかならぬ人民である。この世に人民大衆のように全知全能で威力ある存在はない。それで私は『以民為天』を生涯の座右の銘としている」

主席の答えを聞いた朴寅鎮道正は、今回白頭山に来た甲斐がある、今やっと本物のハンウルニムがなんであり、どこにいるかがよく分かった、と確信に満ちた表情で語った。

人民は天、誰も考えられなかったこの独特な観点は、人民という巨大な実体の威力と価値を最高の境地に高めた主席の崇高な人民観の凝結体である。人民を天のごとく信じ、天のごとく尊ばなければならないというのは主席の終生の座右の銘であった。歴史のどの軌跡にも見られない主席のこのような崇高な座右の銘が「以民為天」という四字に集大成されている。

あまりにも長い歳月、賤民として見捨てられていた人民を天と見なした主席の精神的な拠り所は、自覚し、団結した人民が

発揮する無限の力に対する固い信頼であった。主席は終始一貫、自覚し、団結した人民の力は無限であると見なした。この世のあらゆるものに限りがあっても、人民の力だけは絶対的に無限であるということ、人民の力を発揮させさえすればこの世に不可能なことはなく、天にも勝てるというのが主席が固く信じる人民大衆の威力であった。

前に述べた朴寅鎮道正は獄中での拷問により廃人になり、1939年の春に仮釈放された。いまわの際に彼は妻に、祖国が解放されたら子供たちを連れて金日成将軍のところに行くようにと言い残した。そして愛弟子の一人にこう言った。「金日成将軍が健在で革命軍が白頭山にいる限り、白衣同胞は必ず暁の日を迎えるようになるだろう。お前たちは、いまに百花繚乱たるハンウルニムの国で暮らせるようになるだろう。私にはその日がはっきり見える」

1992年の夏、90を過ぎた朴寅鎮道正の夫人が健在だという報告を受けた主席は非常に喜び、今すぐおぶってでも連れて来るようにと言った。

主席に会った彼女は、主席に対して終始「ハンウルニム」という尊称を使った。主席はそう呼ばないようにと重ねて言ったが、彼女は「私は夢の中でもハンウルニムにお目にかかりました」と言って聞き入れなかった。

人間愛の花園を築いてきた主席の偉大な歴史は、朝鮮人民の心の中に永遠に刻まれている。終生、民心を天の心、人民大衆をこの世の全知全能の存在と見なし、天のごとく尊んだ偉大な慈父を、朝鮮人民は生の太陽、民族の太陽と謳っている。このように、主席の天はすなわち人民であり、その人民はこの世の何物にも比べることのできない最も貴重な存在、最も聡明で有力な存在であった。

思索と活動の中心

金日成主席はいつか、白い物が目に付く主席の頭を見て心を痛め、もどかしがる幹部たちにこう言った。

「元来、私の家族は髪が白くなりませんでした。ところが、私だけ髪が白くなりました。私の髪が白くなったのは、どうすれば一日も早く祖国を統一して人民がなめている民族分断の苦痛をなくすことができるか、どうすれば人民にいい暮らしをさせることができるかという心配のためです。ことに、白米の飯に肉汁を食べ、絹の服を着て瓦ぶきの家に住みたいという人民の長年の宿望を実現するために昼夜心を砕き、あれこれと考えるので髪が白くなるしかありません」

この言葉は、人民のために終生労苦を重ね、心血を注いだ

主席の愛民観がそのまま集大成された真情であった。

何か思索をめぐらせても、何か活動を行っても、主席の思考と実践の中心には常に人民への愛が置かれていた。主席のあらゆる思索と活動の始めも終わりも人民への愛であった。人民への愛から始まり、人民への限りない愛の一念で貫かれ、限りなく繰り広げられたのが、すなわち主席の思索であり活動であった。

主席が平素胸に秘めていた一番大きく一貫した念願は、朝鮮人民に何うらやむことのない豊かな暮らしをさせることであった。

1990年代のことである。ある日、庭園を散策していた主席は珍しい一羽のニワトリに目をとめた。それは、疲れをいやす暇もなく仕事を続ける主席が散策のひとときでも楽しく過ごせるようにと、活動家たちが手に入れた観賞用ニワトリであった。踵にさまざまな色の長い毛が生えているため、「ケアシニワトリ」と呼ばれているそのニワトリはとてもかわいらしかった。

興味が湧いたようにそのニワトリをじっと眺めていた主席は、ふと活動家に、このニワトリは１年に卵をどれほど産むのかと聞いた。活動家が80個ほどだと答えると、主席は驚いて彼の方を振り返ったが、目には失望の色が浮かんでいた。

主席は失望の色を隠さず、**「普通のニワトリは200個ないし250個産むのに、80個しか産まないのでは役に立たない」**と言った。

活動家はあわてて、「このニワトリは肉や卵の生産用ではなく観賞用のニワトリです。大変かわいらしく美しいではありませんか」と言った。

すると主席は、ニワトリは卵をたくさん産むべきであって、見た目がいいだけではなんにもならない、見た目がいくら悪くても卵をたくさん産むニワトリがいれば私は毎日見に来ると言って、こう続けた。

「私は1年に卵を400個ほど産むニワトリがいたらいいと思う。そうすれば人民にもっと多くの卵を供給できるではないか」

いくらきらびやかで新しいものであっても、実際に人民に利益をもたらすものでなければ全く無意味だというのが主席の評価の基準であった。

金日成主席が人民の中でも常に一番愛し、大事にしたのは、国の王様として押し立てた子供たちであった。それゆえ、主席は終生誰よりも子供たちを愛し、子供たちのためならできる限りのことをした。

主席が毎年子供たちと一緒に新年を迎えたことは誰もがよく知っているが、主席の参加の下に玉流館で新春の集いが行われたことを知る人はさほど多くないだろう。

1961年の新年を控えて主席は一つの考えにふけっていた。

それは、今度の新春の集いをどこで行うかということであった。それまで新春の集いを行ってきた大同門映画館は、今ではもう集いの規模や参加者の数からして適さないと思われたのである。

幹部たちとこの問題について協議していた主席は、新たに開館する玉流館はどうかと言った。彼らは自分の耳を疑った。玉流館はまだオープンしていないばかりか、国家宴会場として使われることになっていたのである。ある幹部がそのことを主席に話した。

すると主席は、まだ開業していない建物ならなおさらいいではないか、われわれはまず子供たちに対する観点と態度を正さなければならない、国家宴会はほかの場所で催すとしても、子供たちには思う存分踊りを踊り、歌を歌うように玉流館を使わせるべきだと言った。こうして、国家宴会場である玉流館が子供たちの1961年の新春公演の場所として選定された。

1973年4月8日に平壌体育館が竣工した時にも、主席は、こんな大きな建物を遊ばせておくことはない、幹部壇をなくせばその場所まで利用してより多くの平壌市民に観覧させることができる、幹部は多くないのだから片隅に座席を少し設ければよい、そうすれば子供たちの新春の集いを大規模に行うことができるだろうと述べた。

こうした主席の愛により、首都平壌の中心部の一番良い場所に子供たちの宮殿の敷地が定められ、朝鮮が経済建設と国防建設の並進という困難な道を歩んでいた時にも平壌学生少年宮殿が建てられ、子供たちの歌声がより高く響き渡ったのである。

このように、金日成主席は人民への崇高な愛情を抱き、終生人民のための献身の道を歩み続けた。

1992年4月15日、金日成主席の生誕80周年を迎えて朝鮮民主主義人民共和国政府は宴会を催した。主席は宴会で行った演説で次のように述べた。

「私は祖国と人民のために一身をささげる覚悟で革命の道に立ち、それ以来今日に至るまで、常に私の心を占めていたのは人民への愛情でした」

主席はつとに革命そのものを人間への愛と見なしていた。主席が自分の生涯で胸が張り裂ける思いをした出来事の一つは、抗日戦の日々、馬鞍山の密営で「民生団」(日本帝国主義が抗日革命隊伍を内部から瓦解させるために1932年2月につくりあげたスパイ・御用団体)のレッテルを貼られて苦しんでいる児童団員たちの哀れな姿を目撃したことであった。

その時、主席は密営の給養担当者に激した口調で、私は今日ここで革命家の価値観について改めて深く考えざるを得ない、われわれは何のために革命を始め、今もまた何のために万

難を排して革命を続けているのかと言い、**「われわれは何かを破壊するためではなく、人間を愛するがゆえに革命の道を踏み出したのである。あらゆる不義と弊習から人間を解放し、人間的なものを擁護し、人間が創造したいっさいの富と美を守り抜くために、この呪わしい世の中に向かって反旗をかかげたわれわれではないか」**と痛烈に批判した。

革命を人間への愛と見なしたがゆえに、金日成主席は、人民の利益を侵害する行為であれば、それが些細なことであっても決して容赦しなかった。

主席は現地指導の過程で、人民によりよい暮らしをさせるために努力している幹部を見ると非常に喜んだ。しかし、下部に出向いて、人民をののしり、責め立ててばかりいる幹部を見ると黙過せず、厳しく批判した。

人民を熱烈に愛し、大事に思う金日成主席の思索と活動は、人民生活に対する格別な関心ときめ細かな指導に顕著に現れている。

主席は、終生人民の食衣住の問題を解決するために心を砕いた全国の大家庭の家長であった。主席が一番不安を感じたのは、人民の食の問題が持ち上がった時であった。

衣料問題は徐々に解決することがあっても、人民の食の問題に関しては一歩も譲歩できないというのが主席の信条であった。

人民の食の問題を解決できず、不便な思いをさせているという報告を受けると、主席は不安に駆られて夜も眠れなかった。

解放後、主席が北朝鮮臨時人民委員会の委員長を務めていた時、同委員会の協議会で最初に討議した問題が醤油と味噌の問題であったことを知る人は多くないだろう。

人民への愛をあらゆる思索と活動の中心に据え、終生人民の幸福のためにすべてをささげてきた主席の偉大な人民愛について語り尽くすことはできない。主席の生涯は実に、人民を天と仰ぎ、人民への愛によって生をつづってきた熱烈な愛民献身の生涯であった。

変わらぬ信頼

金日成主席の人間愛は、人間に対する絶対的な信頼に根ざした熱烈で強固なものである。

人間への信頼は、主席の天稟である人間愛の原点であり、最も重要な内容であったし、朝鮮革命史を人間愛の歴史として輝かせた大本であった。

主席は、人間への信頼をもって革命を始め、人間への信頼を原動力として革命を導いた。主席の生涯は文字通り人民と同志への信頼の生涯であったし、信頼は主席が最も重視した革命遂行の強

力な原動力であり、終生具現してきた人生哲学であった。

主席が終生の哲学的信条とした人間への信頼は、革命闘争と人間の生活の深遠な真理を正確に反映した絶対的で強固なものであった。

主席のこうした信頼の哲学は、素手も同然の状態で帝国主義の強敵であった日本帝国主義との戦争を宣言した抗日革命の日々から形成され、強固になった。

国の独立を自分の使命とし、革命の草分けの道を踏み出した主席に、最初から確たる勝算や十分な物質的元手があったわけではない。文字通り素手しかなかった。

主席にあったとすれば、それはただ一つ、心の支えとなってくれる人民への信頼であった。革命同志の限りない忠誠心と道義心への信頼、人民大衆の無限の知恵と力、愛国熱への信頼は主席が選択した革命遂行の唯一の活路であった。

主席の信頼の中で数千数万の革命闘士が育ち、主席の厚い信頼に支えられて祖国と革命、党と人民のための闘争で彼らの比類ない犠牲的精神と闘志が発揮された。さらには、反革命に引きずり込まれていた人たちや敵の手先になっていた人たちまで主席の人間的な信頼に感じ入って革命の側に立ち返った。

主席の回顧録**『世紀とともに』**第7巻に『イタチ捕りの老人』という表題の文章がある。

これは、朝鮮人民革命軍が馬塘溝密営で軍事・政治学習をしていた時の話である。

遊撃隊を助けていたイタチ捕りの老人が日本帝国主義の魔手にかかって変節した。彼に何度か怪しげな素振りが見えたが、主席も遊撃隊員たちも気づかないふりをした。かえって、イタチ捕りでやっと暮らしを立てている彼に同情し、心をこめてもてなした。部外者は一切立ち入りを禁じていた密営の規定に反してまで彼を連れて来て、キビのご飯を食べさせた。また、部隊を見学させ、娯楽会や講演会、学習討論会なども見せたりして啓発しようとした。

老人は、司令官をはじめ遊撃隊員たちがみな自分を絶対的に信頼し、厚くもてなしてくれることに感じ入った。

ある日、主席が話をするつもりで老人を呼んだ時、彼は自ら自分の正体を明かした。そして、外に出て白樺の木の根もとに隠してあった手斧を持ってきて、日本人から司令部に危害を加える任務を受けたと告白した。彼は、ここでは自分を信じて貴賓のもてなしをしてくれたのに自首せずに手斧を隠し、自分が遊撃隊との連係をつけている工作対象である人物が変節したことを知りながら、それを司令部に告げなかった、と一部始終を打ち明けた。

金日成主席は回顧録で、あの時まかり間違えば司令部も部

隊もやられるところだったと述べ、イタチ捕りの老人を信頼したので、彼の邪心が人間本然の良心に立ち返ったのであり、信頼というもののおかげで禍をこうむらなかったと回想している。主席の革命的生涯にこのような事件は一度や二度ではなかった。そのたびに主席が逆境を順境に、禍を福に転じた武器は人間への信頼であった。主席は、不信によって得られるものはなくても、信頼によっては実に多くのものを得ることができるということを確信していたのである。

人間に対する金日成主席の信頼は革命同志と人民、軍人に対する真の信頼であり、絶対的な信任であった。

主席が歴史の有力な主体、自分の運命の自主的な主人として押し立てるために終生労苦を重ねたのは個々の人や集団ではなかった。それはハンマーと鎌、筆を掲げた労働者と農民、勤労知識人であり、銃を取った軍人、全国の人民であった。

祖国解放戦争の時、停戦問題が初めて上程されてから実際に停戦が成立するまでになぜ2年もかかったのかを具体的に知る人は多くないだろう。

開戦3日目に全朝鮮を占領するとしたアメリカ帝国主義の大それた野望は打ち砕かれ、人民軍は決定的な反攻撃により、わずか1カ月余りの間に傀儡韓国領土の90％以上と人口の92％以上を解放した。

しかし、敵を慶尚南北道の狭い地域に追いつめた人民軍は、銃がなくて戦略的な一時的後退を余儀なくされた。一時的後退という厳しい試練を、朝鮮人民と人民軍は自分たちに対する主席の変わらぬ信頼によって乗り越えた。そして、敵の「クリスマス総攻撃」を粉砕して戦争第3段階の作戦を勝利のうちに締めくくり、アメリカ帝国主義侵略軍を再び共和国の領土から追い出した。総攻勢が失敗した後、マッカーサーは「……アメリカが朝鮮で勝利を得るのは不可能だ」と吐露した。あわてふためいたアメリカ帝国主義は開戦1年後に停戦を申し入れてきた。

しかし、戦争はその後2年も続いた。もちろん、これには停戦の幕裏で会談を引き延ばして新たな「攻勢」をもくろんでいたアメリカ帝国主義の陰険な企図をはじめ、さまざまな原因がある。だが、停戦会談が長びいた主な理由の一つは捕虜問題であった。

金日成主席は、戦争をしかけたアメリカ帝国主義が停戦を申し入れてきたのは降伏したも同然だと見なした。それゆえ、主席は停戦協定を結ぶとしても朝鮮の要求を貫くよう強硬な措置をとるようにした。その中でも必ず実現しなければならない基本問題の一つとしてとらえたのはほかならぬ捕虜問題であった。主席は、停戦の可能性が見えはじめた時から、捕虜にされ

た人たちを連れ戻すためにアメリカ帝国主義との砲声なき戦いを続けた。

どんな戦争でも捕虜はあり得る。捕虜を人道的に待遇し、虐待、拷問、殺害したり実験対象としてはならず、無条件に本国に送還しなければならないということは国際法によって規制されている。

しかし、祖国解放戦争の時期、アメリカ帝国主義は捕虜を転向させたり、彼らが共和国に反対するようにしむけるため、捕虜を拷問し脅迫するという反人倫的行為を働いた。

このことに誰よりも胸を痛めた主席は、捕虜を全員連れ戻すために心を砕いた。主席は、ほかの問題はいざ知らず、捕虜交換の問題だけは絶対に譲歩できない問題と見なした。捕虜交換を実現するために、この時期に主席は軍事停戦委員会の首席代表に100回以上電話をかけた。後日、主席はそのころを回想して、捕虜交換問題のためにアメリカ帝国主義と1年余り闘った、この問題さえなければ停戦協定がもっと早く結ばれたかもしれない、と言った。日に日に戦火が広がり、人々が血を流していた日々に、主席をしてあらゆる心の痛みと困難に打ち勝ち、捕虜を連れ戻すために心血を注がせたのはほかならぬ信頼であった。

単に自分の兵士たちを大事にする司令官の道徳的義務ではな

く、兵士たちを信じる純潔な人間的信頼、共和国の息子たちを固く信じる慈父の心が、主席をして捕虜を連れ戻そうと心を砕かせたのである。

ゆえに、後日そのころを回想して主席は、あの時捕虜を信じなかったなら、はじめから連れ戻そうとしなかっただろうと語った。

主席は、人々を信じないで疑ってばかりいる人は島にでも行って独りで暮らすべきだとして、そうした傾向が現れるたびに是正させた。

祖国解放戦争の時期、任務を受けて人民軍の某師団を点検してきた武力部門の幹部が、師団の人員の85％が悪い人だと報告した時、主席は、危険なのは師団ではなく君の言動だとして、彼を手厳しく批判した。また、幹部が家族関係の複雑な人たちに偏狭な態度で対した時には、即時に問題視して是正させた。

このように、主席の人間への信頼は差別のない絶対的な信頼であった。界線や限界を設けず、誰にも寄せる偉大な慈父のこのような信頼の中で、歴史に類を見ない仁徳政治が生まれ、この地に一心団結の偉大な現実がもたらされたのである。

金日成主席が終生具現してきた人間への信頼は、いかなる打算もない真実な信頼であった。主席は人間への信頼について、**「信**

頼にはいつわりというものはあり得ない」と常に強調していた。

　このように人間を固く信じる崇高な人間愛の体現者であるがゆえに、主席は身の危険も顧みず、人間を守りぬくための闘いの場に決然と臨んだのである。

　主席は常に、昔の戦友に会っても、平凡な労働者や農民に会っても、私はいつも君たちを固く信じていると明言し、彼らに対する自分の真実な態度をありのままに見せた。それゆえ、主席の信頼を受けた人たちはそれを自分たちの生命線と見なし、その信頼にこたえるために命が尽きるまで自分のすべてをささげたのである。

　祖国解放戦争の時期、戦争の勝利を確信した主席は、戦後の復興建設に必要な技術幹部を育成するために、多くの技術者を外国で実習させることにした。ところが、一部の狭量な人たちが実習に送る人たちの出身と経歴を問題視した。主席は彼らに、かつて朝鮮人の中で労働者や農民の息子・娘たちは金がなくて学校に行くことすらできず、多少学んだ人たちはみな裕福な家庭の息子・娘たちだ、わが国の知識人たちを問題視するなら問題のない人は一人もいない、私は名簿に載っている技術者たちが外国に実習に行ってスパイにならないだろうし、祖国に帰った後も害悪行為をしないものと信じている、実習生の名簿と一緒に私の保証書をその国の当該機関に

送るように、と言った。

主席のこのような温かい愛情と信頼によって、朝鮮では、指導者と人民が血縁的なきずなで結ばれて運命を共にする偉大な歴史が展開されたのである。

大海原のような人情味

自分の心と才能、力を尽くして人のためを思い、助け、見守るのが、まさに人間への真の愛である。愛は決して単なる感情の噴出ではない。それは、尊重し信頼する対象に対する熱く、真実な自己献身であり、熱烈で積極的な自己犠牲である。

金日成主席は、大海原のような深い人情味をもって人々に対し、人民のために生涯をささげた限りなく慈愛深い人であった。

主席の深い人情味は、主席の人間愛を最も真実な愛にした重要な要因であった。

常に深い人情味を持ち、人情をもって人々に対し、人情をもって人民を見守り、導いたところに主席の高潔な人間愛、慈父の愛情の重要な特徴がある。

一国の元首なら職務としては最高の地位だと言える。しかし、主席は命令や指示ではなく、愛と情によって、慈父の深い

人情味によって人々を見守り、導いた。

万人の胸を打つこの人情のために、主席は戦時にも両親を失った子供をそばに置いて育て、戦後には夫と父親のいない越南者家族を哀れんで彼らと共に涙を流し、しばしば彼らを訪ねた。主席の温かい人情の世界に接すると、大人も子供もみな心配事を忘れた。

昔から人々は、傑出した軍事戦略家や革命を導いた偉人といえば、いかめしい姿を思い浮かべたものである。慈愛に満ちた姿とは程遠いと考えたのである。

1941年12月にモスクワでスターリンと会見したアメリカ大統領ルーズベルトの特使も、スターリンの印象について「不必要な身振りや不自然な表情は全く見られなかった。驚くほど節度のある理性的な機械と話しているようだった」と述べている。

こうした評価は、人々に対する時にいかめしい顔つきをするスターリンの独特な人間像についての評価だと言える。

人々は昔から、人情味を人間社会を美しく飾る第一の美徳と見なしてきた。しかし、金日成主席の人情味は万人の心をつかむ、広々とした大海原のようなものであった。

明るい微笑は、主席の特異な人情味の集中的な現れであった。万人の心をとらえる笑みを満面にたたえた姿は主席の生涯を貫いた太陽の姿であった。

朝鮮人民の心に刻まれている主席の姿は、限りなく慈愛深い父の姿、いつも満面に笑みをたたえている太陽の姿である。

主席はいついかなる場合でも笑みを絶やさなかった。労働者や農民、子供たちに会う時もいつも笑みを浮かべ、幹部たちに対する時も、現地指導の道で軍人や革新者に会う時も満面に笑みをたたえて話し合った。さらには、過ちを犯して主席に心配をかけ、恐縮する幹部や人々にも笑顔で対し、懇々と諭した。また、公式の会議や談話、党や国家行事の幹部壇でもいつもにこやかに微笑んでいた。

すべての人の気持ちを安らかに、楽しくしてくれる主席の笑顔は、ほかならぬ人間への真実な愛情、温かい人情の現れであった。まさに、この人一倍の人情により、主席は超人的な意志をもって歴史のあらゆる試練と困難を乗り越え、耐えがたいあらゆる心の痛みに耐えながらも、人民の前では決してそれを顔に出さず、いつも微笑みを絶やさなかったのである。

満面に笑みをたたえて革命戦士たちを温かく見守り、愛情を注ぐのは金日成主席特有の偉人としての品性であった。

朝鮮戦争以降、アメリカの政治家で初めて平壌を訪問し、主席と会見したのはアメリカの下院外交委員会アジア太平洋小委員会の委員長であった。

その時の面談録が20年後に公開された。その後、1980年の記

者会見で、主席に会った時の印象について話してほしいという記者の質問に、彼は「あの時、私は金日成主席と4時間ほど話した。金日成主席は非常に頭脳明晰で柔和であるのは言うまでもなく、笑顔を絶やさずに話し、心の優しい人だという印象を受けた」と答えた。彼の言葉は、にこやかに微笑み、朝鮮民族、朝鮮人民はもとより外国人にも優しく大らかに対する主席の特異な品性に対する告白だと言える。

さらには、裏で悪巧みをしながら何食わぬ顔をしている者たちの正体を見抜いていても、めったに怒らず、正体をあばこうとするのでなく、雅量と笑顔で対し、彼らが自白し、改悛するよう先に機会を与えた。

敵の前では目を鋭く光らせ、憤怒の炎を燃やしたが、人民に対する主席の姿はいつも満面に笑みをたたえた太陽の姿であった。

朝鮮人民が国なき民の鬱憤と悲しみにもだえていた時期に民族の誇る才子として名声が高かった洪命熹先生が、解放後、金日成将軍はどんな方か？　将軍に一家の運命を託することができるのかと息子が聞いた時、自分は将軍の明るい笑顔に魅せられたと言ったことはよく知られている。それは、主席に会って人生の転機を迎えた一人の人間の声であるだけでなく、いつも満面に笑みをたたえている主席の太陽のような姿に魅せられた朝

鮮人民と世界各国の人々の気持ちを代弁するものであった。

1984年6月、金日成主席が旧ユーゴスラビアを訪問した時、同国のあるカメラマンは、主席が満面に笑みをたたえて列車から降りる歴史的瞬間をカメラに収めることができなかった自分の失策について次のように述べた。

「金日成同志の微笑は人々を魅了する慈愛に満ちた微笑でした。偉大な包容力と海のように大きな度量、強い感化力と高潔な人情味が漂うあの微笑をそのまま再現できるカメラマンは世界にいないでしょう」

主席の微笑に一瞬にして魅せられ、記者としての本分を忘れた彼を責めることはできないだろう。

1994年7月、主席と永訣した時、朝鮮人民が哭声を上げ、泣きに泣いたのは、太陽のように明るく微笑む主席の肖像を見た瞬間、人民を思い、愛してくれた偉大な慈父への懐かしさが込み上げてきたからである。

生活の中で味わう喜びや満足感、楽しさのような感情や情緒の最も一般的で明白な表現は、ほかならぬ笑いである。こうした意味で、笑いは人間の最も率直な感情の表現だと言える。

その懐に抱かれていた朝鮮人民の胸に秘められている主席の姿は、満足して、楽しくて満面に笑みをたたえている慈父の姿である。朝鮮人民と世界の人々は、主席がいつも笑顔を絶やさ

ない慈愛に満ちた方であったことをあまりにもよく知っている。

しかし、いつも満面に笑みをたたえ、人民と子供たち、友人たちに温かく対してくださった主席、涙もろかった主席の心のうちを知っていた人は多くないだろう。

実際、主席の生涯には楽しさと満足感、喜びと笑いだけがあったわけではない。主席には笑いよりも涙が多かったのであり、終生誰よりも大きな喪失の痛みを胸に秘めていた。

主席は、人間が体験するあらゆる苦しみを全部味わい、誰も味わったことのない大きな痛みのため涙も多く流した。実際、主席の胸中は涙の乾く日がほとんどなかった。

百戦百勝の鋼鉄の総帥であり、卓越した政治元老であった主席が、誰よりも大きな心の痛みを抱き、人知れず涙を多く流したのは、まさに人間への愛、大海原のような人情のためであった。

人間のさまざまな思想・感情の中でも一番真実な温かい愛が人情であるなら、人情の最も率直な表現の一つがまさに真情がこもった涙である。

人一倍情にもろく、涙を多く流した金日成主席は、涙もろい人であってこそ真の英雄になることができるという独特の見解を持っていた。

1988年1月2日と1989年6月8日、11月6日の党、国家、軍隊の

責任幹部への談話で金日成主席は次のように述べている。

「人は涙もろくあるべきです。冷たく薄情な人は泣けと言っても一滴の涙も流しません。涙もろい英雄が真の英雄です」

金日成主席は、人民への愛情、革命同志への友情のために終生多くの涙を流した。主席が一番悲しみ、心が痛んで涙を流したのは愛する革命同志を失った時であった。

戦友や同志の訃報に接するたびに涙し、心の傷は永遠にいえることがなかった。

抗日戦の日々、同志たちが祖国解放の日を見ることができず先に逝くたびに、主席は悲しみのあまり寝食を忘れ、涙を流しながら悼辞を書き、自ら烈士たちを手厚く葬った。

抗日武装闘争の時期、知り合って10日にしかならないコミンテルンの派遣員が敵の凶弾に倒れたという報告を受けた時は、部屋を閉め切り、終日涙を流しながら故人を追慕した。解放後も、金策、安吉、朴達などの革命同志や許憲、洪命熹などの愛国の士、金鐘泰、崔永道などの統一愛国闘士を失うたびにむせび泣いた。

幹部を失った時だけではない。平凡な兵士や自分の知っている普通の人が他界したという報告を受けた時も涙した。

戦争の時期、自分の運転手がハンドルを握ったまま心臓麻痺で急死した時、主席は涙を流して葬儀を執り行い、墓所を定め

た。葬儀が終わると、いくら道を急いでいるとしても彼とひと晩一緒に過ごそうと言って出発を遅らせ、終日食事をとらずに涙した。

革命戦士が犠牲になるのに心を痛めた主席は、兵の損失の程度を戦闘の勝敗を判別する重要な基準とした。

祖国解放戦争の時期、主席は、一部の指揮官が朝鮮労働党の坑道戦の方針に反して、朝鮮の実情に合わない運動戦だのなんだのを取り入れて少なからぬ兵士を犠牲にしたことを厳しく批判し、**「敵との戦闘で味方の損失が大きければ、それは勝ち戦とは言えない」**と断言した。そして、私は、兵士大衆をただの戦争手段と見なし、彼らの大量の犠牲とは関係なしに勝利の祝杯を挙げるブルジョア軍事活動家の思考法を排撃すると強調した。

世界の戦史には、死体の山の上に戦勝の旗を立て、快勝を叫んだ例が多々ある。20世紀の初め、日本軍は旅順港攻撃戦闘の時、5万1000人のロシア軍が防御する港を13万人の兵力で攻撃し、7カ月の間に11万人の死傷者を出してやっと占領しながらも大勝を唱えた。第2次世界大戦の時、米英軍はフランスのノルマンディーへの上陸作戦で多くの兵力を失いながらも、近代上陸戦の「模範」だと喧伝した。アメリカのマッカーサーは、面積が20.3㎢しかない日本の硫黄島への上陸作戦で多くの兵力を失いながらも、アメリカ帝国侵略軍の数少ない「5星将

軍」に昇進した。

金日成主席は抗日武装闘争の時期、霊妙な遊撃戦法によりほとんど戦死者を出すことなく戦闘に勝利を収めたが、革命戦士たちが犠牲になると涙を流した。祖国解放戦争の時も、戦死者が多く出ると戦闘の勝利そのものを認めなかった。

このように人情に厚い慈愛の化身であるがゆえに、主席は不人情な人を一番憎悪した。

金日成主席の人情味はまた、歳月が流れても永遠に薄れることのない最も真実で強固なものであった。

解放後、『白頭山』という長編叙事詩を書いた詩人趙基天が主席を訪ねた。主席は最初の読者となって彼が朗誦する詩を鑑賞した。

その詩には心の琴線に触れるくだりが多々あったが、その中でも主席が最も大きな感動を覚えたのは、詩の主人公が敵弾に倒れた愛するヨンナムを葬る時の心の痛みを吐露するくだりであった。そのくだりは下記のとおりである。

……

この国の樵たちよ、

どうぞ謹んで木を切りたまえ――

われら烈士の霊を

この木が守るをなぜに分かるか、

どうか路傍の石を蹴りたまうことなかれ——
われら烈士の骸骨が
その石の下に眠るをなぜに分かるか！
……

主席はこのくだりを聞いて、こらえきれずに涙した。先に逝った戦友たちが思い浮かんだからであった。異国の山野に墓碑も立ててやれずに葬った烈士たちの面影がまぶたに浮かび、胸がうずいたのである。歳月は流れても、主席の人情は薄れもしなければ、変わりもしなかった。

金日成主席は、誰もが会った瞬間魅せられ、心の琴線に触れる特有の人情味を体質化していたので、常に万人の支持と信頼を受けた。

人の真実な情はどんな障壁も乗り越える。

主席の崇高な人情味に魅せられて主席を支持し慕ったのは、朝鮮の革命家と平凡な人民だけではない。抗日戦の日々、頑固な民族主義者や良心的な民族資本家、愛国的地主、宗教界の上層人物は、20代の若い主席を支持し慕い、解放後、あちこちから現れて自分なりに偉ぶっていた人たちも、度量の広い主席の温かい人情の前では頭を下げるしかなかった。

アメリカのある国際平和財団の首席研究員は、カーター元米大統領が「金日成主席から深い感動を受けた」「金日成主席

を政治指導者として尊敬する」と語ったことに言及し、「私があえて金日成主席について評するならば、温かい人間味を身に付けた人だと言いたい」と述べたのは、決して理由なきことではない。

朝鮮人民だけでなく、世界の人々が主席の温かい情に感動し、仰ぎ慕うのはほかでもなく、主席がすぐれた思想や指導力よりもまず万人の心をとらえる豊かな人情味の持ち主であるからである。思想で魅了させ、指導で動かす前に人情をもって人の心を惹きつける主席の高潔な魅力は、その周りに各界層の人々を結集させたのである。

人情に笑い、人情に涙もろい偉人、豊かな人情をもって人民を大事にし見守る偉人である金日成主席を、朝鮮人民と世界の進歩的諸人民は永遠に忘れないであろう。

人民の呼称――「オボイ」

金日成主席は一生を謙譲の心構えで生きた。自らを人民の子、人民のために働く奉仕者と見なしていたがゆえに、自身が人々から尊称で呼ばれることを決して喜びとせず、自身を特に引き立てようとするいかなる試みも行為も決して許さなかった。

けれどもその生涯を通じて、人民が心の奥底から呼ぶ一つの呼称のみはとても満足し、喜んで受け入れた。それは、人民の「オボイ」という呼称だった。オボイとは親つまり父母という意味の朝鮮語である。

主席は1985年7月、朝鮮を訪れたスウェーデン共産主義者左翼党代表団との談話で、**「…活動家は、私をさして『オボイ』と呼んでいます。わたしはそれに反対しません」**と言った。

主席は談話で、朝鮮で遂げた革命闘争と建設事業の成果と経験について具体的に説明した。また朝鮮における民族幹部問題を解決した経験について言及しながら、今ここに参加したわが党と国家の幹部たちもみな私が体系的に育成した人たちです、それで、幹部たちは私をオボイと呼んでいるが、私はそれに異を唱えず、彼らにオボイの言葉にきちんと従って国に忠実な人間、人民の忠僕になり、不屈の革命家になれと常に言い聞かせている、と誇らしげに語ったものである。

オボイ、この呼称は、主席が初期革命闘争当時から革命の同志たちや人民が主席に対する称賛の呼称や尊称のうちで最も満足した気持ち、誇らしい思いで受け入れた呼称であった。

朝鮮民主主義人民共和国主席、朝鮮労働党の総書記以外にも、国際的に数知れないほど多くの名誉称号を得た栄誉にあずかっていながらも、主席は自らの公職よりも、オボイという人民

から受けている呼称を最も誇らしくも喜ばしいものとしていた。

生み育ててくれた父母という意味を持つオボイという概念は、朝鮮では領袖と人民の間の血縁的なきずなという完全に新しい意味で使われている。朝鮮人民は誰もが主席に対するいろいろな尊称の中でも、オボイという敬称を最も親しみをこめて、また好んで用いている。他方主席も、一生の間朝鮮民主主義人民共和国主席や朝鮮労働党の総書記という公式の呼称よりもオボイという表現に喜びを抱いていた。

朝鮮の幹部も人民も、歴史的に固まって使われてきたオボイという語の用途を変えて、国家の領袖をオボイと呼んでおし戴き、主席も人民からオボイと呼ばれることを快く受け入れたのには、それだけの理由があった。

人民のオボイという呼称は、主席を国の領袖として迎えて、血を分けた両親からも満足に受け得なかった愛を心ゆくまで受けながら生きる全朝鮮人民の心の底からほとばしり出た真情の吐露であり、主席も人民のオボイとして生きることを一生の大きな念願としていたのである。

誰であれ家族の一員であるなら、自分を生み育ててくれる父親と母親がいるのは当然であるが、それにも増して朝鮮人民の誰もが一様に心から崇め従うオボイは金日成主席であった。

主席は、朝鮮人民にとって党と国家の最高の指導者である前

にこの上なく慈しみ深いばかりでなく、心の強い支えとなってくれた父親であり、やさしくて思いやりの深い母親であった。人民に注ぐ主席の愛は、自分たちを生み育ててくれた両親の愛よりもはるかに深い無限の深さと幅があった。

主席は生涯人民の安寧を守る盾であり、彼らの幸せを培う園芸師であった。

主席は人民に対する熱愛を胸に秘めて、冷たい露に濡れ、歳月の風雪に打たれながら工場や農場、軍部隊を巡り、労働者、農民、兵士たちの生活に肉親の情をもって思いをめぐらした。生涯人民の食生活問題、衣料問題、住居問題の解決に苦慮し、これにわが生を傾けて生きた偉人であった。

主席は幼時から塗炭の苦しみにあえぐ民族の受難を自ら体験しながら成長した。主席は亡国の悲哀に暮れて生きる朝鮮人民が目に余る涙ぐましい生活苦にあえいでいた当時、朝鮮の典型的な農家に生まれ、幼年時代をすごした。そんな訳で常に飢えに苦しみ、衣服や履物もいやになるほど見すぼらしかった。

そんな生活だったので、おなかが減ってたまらないと、せめて豚肉の一切れでも食べたいという幼い思いで、ホワギ（風土病の一つ）にかかったらいいのになあと考えたりもし、まれに買ってもらった履物も履くのがもったいなくて通学の行き来の道ははだしで歩いたという。今日も万景台の生家を訪れて見る

わらぶきの粗末な家は元々、墓守り用の住家だったし、その大家族の財産なるものも、焼き損ねて大きくひずんだかめ、その他の台所用具や農具のようなものがすべてであった。一家の主食は、皮がついたまま砕いたキビの粥だったし、欲しくてならなかった柱時計も国の解放がなるまで遂に壁にかけることがなかった。このように万景台の生家は、日本帝国主義の植民地支配下における朝鮮の最下層家庭の一つであった。主席はそのような家庭に生まれ、育ったのである。

だからこそ主席は、空腹がいかに大きな悲しみであり、着る物も履く物もまともなもののない生活がどんなにつらいものであるかを人一倍強く体験していたのである。さらに病にかかっても治療を受けることがままならず、勉強をしたくてもそれができない境遇がなんと大きな悲哀であるかを身にしみて思い知らされていた。

主席は、亡国の民の一人として生きたこの悲痛な思いを80有余年の生涯上一時として忘れたことがなかったし、その痛切な思いのゆえに、人民に立派な衣服を着せ、白米と肉汁を食べさせ、瓦ぶきの家で暮らせるようにすることを社会主義の重要な目標として定め、それを実現すべく、生涯を生きたのであった。

以前、朝鮮で人々は祖先を祭る法事の日、祭壇に載せる供

え物の碗に一杯の白米のご飯もままにならず、碗の底に雑穀飯を入れ、その上に幾さじかの白米の飯を載せて法事を行ったと言われている。

主席は幼い頃、白米のご飯を一度として食べたことのない胸の痛む体験を、愛する人民や子孫たちに決して味わせるべきでないとして、労苦を尽くし心血を注いだ。人民に豊かな食膳をと心を尽くす思索と労苦は生を終える最後の日まで、しばしも止むことなく続けられたのである。

人民の食生活の向上にそれほど尽くしていることを知ったソ連の首相スターリンが、金日成主席の誕生日に祝電でも貴重な贈呈品でもない、人民の生活に役立てるようにとして小麦粉を贈り物として寄せた出来事があった。

朝鮮戦争たけなわの1952年4月14日の夕方、国の幹部たちは、戦況の極めて厳しい今、主席の誕生40周年を迎える明日4月15日を楽しく祝うことができないもどかしさを無理に抑えていた。

ところで夜11時、ソ連大使館員が訪れて来て主席に会い、スターリン首相から送られてきた電報を伝えた。その内容は次のようであった。

「金日成同志

平壌

私は、朝鮮人民に食糧が要求されるということを知りました。われわれのシベリアに蓄えておいた5万トンの小麦粉があります。われわれはこの小麦粉を朝鮮人民に贈りたいと思います。あなたの同意いかんを電報でお知らせください。あなたの意向に従ってわれわれは即時小麦粉を送ります。挨拶を送りつつ……

イ・ヴェ・スターリン

1952年4月14日」

電報を手にした主席は、何枚かの祝文よりもこのように小麦粉を贈ってもらうのがずっと気持ちが良いとして大変喜んだ。当時、国の食糧事情は極めて緊張していた。そのような時に軍人や人民に与える小麦粉が贈られてくると知って、主席の胸は喜びにはずんだ。祝賀の電報や貴重な贈り物よりも、軍人や人民のための食糧を贈られたことに大きな喜びを覚える主席を仰いで、その無限の人民愛に改めて大きく感動した幹部たちは目をうるませた。

ひたすら人民の食衣住の改善に心を致し、人民に仕えることにのみ専念する主席の心情に心を打たれていたスターリンは、その後朝鮮の幹部たちを接見した際、あの時金日成同志の誕生日に祝電を送るよりも小麦粉を贈る方が金日成同志にはるかに喜ばれるだろうと思ってあらかじめ小麦粉を貨車に積載しておき、4月15日に朝鮮に到着するよう手配したのだったと述

懐している。

人民の食卓を潤すことに大きな思いを寄せていた主席は、戦争の砲声が鳴り止まぬ時期に最高司令部の近くに鶏舎と養魚場を設けて、300羽のニワトリと1000匹のニジマスを自らの手で飼い、畑では各種の野菜を栽培して、家禽業と畜産業、野菜栽培の明るい展望を構想した。また、肉類や卵の生産を本格化して人民に供給するのに必要ならばとして、戦時中に輸送機を外国へ送って種子を購入してくるよう手配もした。咸鏡南道定平郡広浦アヒル工場は、そのようにして戦時のさなかに生まれたのである。

人民の食生活を改善すべく、全国の農場を足繁く見て歩き、朝鮮の農業の発展に心を致した主席は、ある日、道を行く子供たちを呼び止めて一人ひとりの弁当箱を開けてみて、みな白米のご飯を包んでいると知ってたいそう満足し、始終笑顔を絶やさなかった。

農事に励むことで人民が食事を腹一杯取れるようになるなら、国家主席を辞して農業を指導する顧問になりたいものだと言った主席。この言葉は人民のオボイとしての人民愛がいかに深かったかを如実に示してなお余りある主席の偽らざる真情であった。

人民の食生活の向上にどれほど深く心していたかということ

は、対外活動のスケジュールに含まれていたある外国代表団の接見を先に延ばしてまで、家禽業の指導を続けたという事実からも十分にうなずけるであろう。

1993年5月6日、西浦養鶏工場を視察して帰った一幹部から、金正日(キムジョンイル)同志が15年前の1978年6月、当工場に種子として送った56匹のミミズがものすごく繁殖しているとの報告を聞いた主席は、嬉しさのあまり翌日その工場へ出掛けた。

そこで、ミミズを入れた箱が生息場の外へ持ち出されているのを見て、中をのぞいていた主席は、移植ごてはないかと聞いた。ミミズが土の中にいて見えなかったのである。

一幹部がすぐさま移植ごてを持ってきて、箱の中の土を掘り返した。すると、十分に育った赤いミミズが何十匹も現れた。

「うむ、素晴らしい。実に素晴らしい」

こう言って大いに満足した主席は、ミミズの生息場を見ようとして、立ち上がった。

工場の幹部たちはあわてた。生息場はニワトリや牛などの排泄物とトウモロコシの茎や葉、土を混ぜ合わせた積み肥をもって作られているので、建物の中の空気が悪く、臭気も甚だしかったのである。

工場の幹部が、臭いがよくないので生息場には入らないでくださいととどめると、主席は、**「臭いがちょっとばかしするの**

がどうだと言うのだ。養鶏工場へわざわざやって来て、ミミズの生息場を見もしないで、建物の外にただ立っていただけで帰ってもよいと言うのかね。構うことはない。入ってみよう」と言って建物の中へ入った。

確かに中の空気は悪く、積み肥の臭気が鼻をついた。けれども主席はそんなことに構わず、移植ごてで掘り返してみるようにと言った。

よく育ったミミズが群れをなして現れる様子に見入った主席は大いに満足し、顔が晴ればれとしていた。

ついでニワトリの飼育場に歩を移し、前と同じように悪臭が深く、空気もよくないことには一向に気にせず、ニワトリの生育や産卵の状況を観察した主席は、次のスケジュールである外国代表団との会見を先に延ばすようにして、工場の事務所で家禽部門責任幹部協議会を開き、指導した。

主席は、天候の良し悪しや出掛ける道の状態、視察先の状況がどのようであれ、そういうことは一向に気にしなかった。現地指導の継続で疲労が重なることにも、食事を遅らせたり、抜いたりしても、そんなことを苦にするようなことはなかった。

主席が一生涯関心を寄せて問題にしたのは、ただ一つ、どうしたら人民の生活を高めることができるかということであった。特に人民の食生活の改善をはかって工場へ、農場へ、都市

へ、郡へ、学校へ、軍部隊へと、果てを知らずに歩き続けた。工場では生産の実態を確かめる前に労働者寮の食堂を見、農村でもまず農家の台所に入って米がめのふたを開けて見たり、食器戸棚の中をのぞいてみたり、食べ物の量や味を見ることが一つの習性となっていた。

金日成主席が人々の住み働く地を現地指導する写真のうち、食堂や調理室、副業農牧場を見て歩く写真は、会議場で演説をしたり、談話をしたりする写真より比べようもなく多いのである。

主席の関心は決して人民の食事にのみ向けられていたのではない。人民の衣料や履物はもとより、日常生活に欠かせない家具調度や小間物などどれ一つとして見落とすことなく深い注意が向けられていた。

あの困難を極めた抗日武装闘争のさなか、遊撃区住民の子たちがはだしで歩くことのないよう、なんとしても子供たちの履物を手に入れようと努めた当時と同じ愛情をもって、人民軍のある区分隊を視察した際、若い女兵士が弟から履物が不足して困っているとの手紙をもらって悲しんでいるという話を聞いて、それが人民大衆の共通した不便であると見なし、直ちに党中央委員会政治委員会を招集し、履物の生産がもたついていることを非常事態として批判し、その解決策を講じた主席。

主席は、現地指導に向かう途中、見すぼらしい身なりの子供たちに目を止めて車を降り、その原因を確かめて必要な措置を講じ、ついで季節が変わるたびに全国の子供たちに衣服を与えるようにした。国家が子供たちに無料で衣服を与える制度については、早くも抗日武装闘争時代から主席の胸中に去来していた構想であった。

主席は、1977年4月12日、全国の児童、生徒、学生たちに贈った制服を見てみるべく、安州市延豊高等中学校を訪れた。

新しい制服を着て顔を輝かせて喜んでいる生徒たちを見回して、**「私よりもっとりゅうとした紳士たちだ」**と言って喜び、運動場で長いこと一人ひとりの写真を撮ってその場で与えた。いかに嬉しかったのか主席は、**「この60歳になるまで喜ばしい日は幾日もなかったが、今日のように嬉しい日は初めてだ」**と繰り返して言った。

主席は生涯の最後に開かれた経済部門責任幹部協議会の席でも、自分から与えられた課題をたがえることなく、全国の子たちに新しい衣服を作って供給したという報告を聞いて非常に喜び、有り難う、有り難うと繰り返し礼を述べた。一国の元首が下位の幹部に対して、全国の子供たちに衣服を作って着せてくれて有り難うと感謝する、人類の政治史上二度と再び繰り返されることがないであろうこの日の光景は、全国の少年少女をわが子と

して慈しむ金日成主席ならでは起き得ない出来事である。

このような偉人であったからこそ、主席は1958年6月、安州郡龍淵商店で老婆たちが着るようなズボンはあるかと聞き、商業従事者は商品をただ売ることばかり考えず、客の立場に立ってもみなければならないと言い聞かせたことがあり、国家的な織物の生産計画を立てる際は、手帳に世帯当たり、一人当たりに行き渡る布地の量をいちいち計算してみもしていたのである。

主席は、あの苛烈を極めた戦争の日々に、わざわざ市に出掛けて、チジム（小麦粉などの鉄板焼き）売りや肉屋の主人に会って、人々の戦時中の生活について確かめてみては、地下に市場を設けるようにした。

このように主席は生涯、人民の生活の向上を最も重要な国策と見なして心を砕いた。その胸中には食糧、食塩、卵、魚類、せっけん、履物、薪など人民の生活に関する指標が常に去来していた。

主席の人民愛の観点から、世界にまたとない無料治療制や無料教育制が実施され、人民の生活を不断に高めることが、党と国家の活動の最高原則として定着したのである。

普通人々は長生きの秘法が身体の鍛錬、摂生、強壮剤などにあると考えているが、主席は自身の長寿の前提をそれらとは全

く異なる点に求めていた。

主席は愛してやまない人民の無病長寿をはかって心血を注ぎながらも、わが健康の第一の条件を人民の豊かな生活を実現することにあると見なしていた。主席は、党と国家の幹部や人民から自身の無病息災を願うという言葉をかけられると、自分はわが人民が腹づつみを打ち、着ることに困らず、立派な家で豊かに暮らせるようになったら100歳まで生きるだろうと答えたものである。

だからこそ人民は誰もが主席を、偉大なオボイ、人民のオボイと呼び、慕ってやまなかったのである。

農村を現地指導した際、渋みの残っているドングリ製のムク（ところてん）を味わってみながら、郡内の住民の生活をいかに改善すべきかについて懇切に教える主席の思いやりがなかったとしたら、山間僻地の昌城郡の住民は今に至っても白米のご飯というものを口にすることはできなかったであろうし、他方、都市の子供たちにも大人たちにも喜ばれる初トウモロコシやサツマイモのことまで気づかうオボイの配慮がなかったとしたら、今もって四季おりおりに果物や青物、イモを運送するトラックが長い列をなして走る風景は現出しなかったであろう。

人民軍部隊の軍人たちにとっても主席は最高司令官であると同時に、常に温かく自分たちを見守ってくださる真のオボイで

あった。足の汗の臭いがする兵士の防寒靴の中に手を入れて靴の厚さを確かめてみもすれば、歩哨に立っている兵士に、厳しい戦時に自身の防寒帽をかぶせ、手袋もはめてやるその深い思いやり、オボイの愛があってこそ、朝鮮人民軍の威力があったのである。

全国を一つの団結した大家庭につくり上げようというのは金日成主席の理想であった。

その理想を実現する上で主席が選んだ位置は、国家主席や党総書記という地位より前に、人民のオボイ、全国的な大家庭の家長であった。

全国的大家庭のオボイであった主席は、すべての子たちを国の王として押し立てようとの異例の観点に立って、子供たちと一緒に歌を歌い、踊りも踊るなど、彼らと共にすごすことを何よりも好んだ。主席の多忙な日程に齟齬をきたしてはとして気を揉む随員たちにわびるかのように、**「子供たちに会ったら時間がどんなふうに流れているのか分からん」**と独り言のようにつぶやいたりしたものである。このように、子供たちと一緒にすごしたために計画した日程を取り消さざるを得なかったこともよくあった。

1970年代の初め、『読売新聞』は「世に、全国の子供たちが国家首班を『お父さん』と呼ぶ国は朝鮮以外にない」「金日成

首相は1年の間国事により積もった疲労を、正月元旦に子供たちと一緒に楽しんでいやしている」「朝鮮は子供たちの王国だ。ここには国策が反映されている」などと評して日本の社会に波紋を起こした。

これらの記事は、『読売新聞』の記者高木健夫が朝鮮を訪問した際に子供たちの新春公演に招待され、ここで金日成主席に会った時、主席と子供たちの間に行き交う交歓を目撃し、大きな感動を覚えて書いた記事の一端である。

公演に先立って、子供たちが主席の前へ群がり、主席の首に自分たちの赤い少年団ネクタイを回して結び、一方主席は子供たちの頬をさすり、頭をなで、胸に抱きしめもし、そのあと、娯楽室で子供たちと一緒に娯楽に興じるのである。

子供たちが「アボジ（お父さん）」と呼んで主席にすがりつく様子をカメラに納めようとしたものの、あまりにも大きなショックと感動に手が震えてシャッターを思い通りに切ることができなかったという。

公演が始まると、**「あの子らの公演はなかなか素晴らしい」**と誇らしげにたたえもすれば、**「子供たちの中にいると疲れもいえ、楽しく愉快になります」**と手放しで喜び、なかなかよくやる、立派なものだとして、アンコールを求めもする主席の喜び様に魅せられて、記者高木健夫はノートを取り出して即興詩

を作り始めた。以下に記すのはその重訳である。

……

可愛い子たちの新春公演で

金日成首相新年を迎える

サンタクロース、この国には必要ない

子たちへの贈り物首相がたまわる

栄光の新年もたらしてくださる

年ごと子たちの祝日の歌をお聞きになる

……

「アボジ」「アボジ」と首相の周りに

波のように子供たち押し寄せ、押し寄せて

その海に舟浮かべて首相は楽しむ

……

ペンを進めながらもどうにもアボジと幸せに酔う子供たちの内面世界を描き切れないと思い直した彼は、その裏面にこう書いた。

「金日成首相に会った人だけがその偉大さと素朴さ、その方の身についた愛の世界を知ることができる。もし会った人が大変な筆力の持ち主か雄弁家であって、その方に対する自分の率直な思いをその文や言をもって表現したとしても、その文や言にはその方の人品と偉大さの100分の1、1000分の1もこめる

ことはできないだろう」

彼のこの詩と文は決して記者としての職業感覚によって発見した特異な現実に対する所感ではなかった。それはこの世の誰であれ、朝鮮にやって来さえすれば、たやすく知りうる大家庭の最も一般的な倫理であり、血が躍動し、感情のある人なら誰であれ、涙がなく激情もなしには見ることのできない、オボイと子供たちの間に行き交う心温まる愛情であった。

主席は自分の誕生日や国の祝祭日にも、人民と共に素朴に、慎ましやかにすごすことを好んだ。主席は、誕生祝いを行おうとする幹部たちの動きに気づくと、そんなことをするのは私を喜ばせることにはならない、私の誕生日にかかわる一切の準備は無用だ、平日のそれと変わりのない食事を用意すればよい、と厳しく言ったものである。

主席が予定していなかった現地指導に向けて地方へおもむき、当地人民の生活の向上についての方途を教えた日や現地指導の途上の日が主席の誕生日であったり、祝祭日であったりしたことは、1度や2度にすぎなかったのではない。

このような偉人をオボイと慕って生きた人民であったがゆえに、主席の急逝という思いもよらぬ悲報に接した時、大人は言うまでもなく、幼少の子供たちまで全人民が驚愕し、何日も目を泣きはらしたのである。

主席と人民の間に結ばれたオボイとその子、人民の間に結ばれた愛のきずなの深い意味がどうにも理解できないでいたペルー民族解放戦線委員長であった博士アンヘル・カストロはその回想録に「朝鮮の人たちは尊敬する金日成主席を『オボイ領袖様』とたたえ呼称している。……朝鮮を初めて訪れた時までも、自分たちの指導者、わが領袖をオボイと呼ぶこの国の人民の気持ちをはっきり理解できずにいた。しかし、今では私もなんらのためらいも気おくれもせず、その方を『オボイ領袖様』とたたえて呼びたい気持ちになっている。私にはいかに深く考え、思い巡らしてみても、ほかには呼びようのない方だ」と書いている。

日本立教大学の安井郁名誉教授は朝鮮の現実について、「久しい歳月が過ぎた今日まで、人間に対する真の愛が完全に実現した地はなかった。ところが、ひとりチュチェ朝鮮では人間に対する愛が一杯に花咲いている。私が幼い頃から描き見、渇望していた人間に対する愛はほかならぬ朝鮮で見出すことができた。実に驚くべき恍惚たる現実であった」として、金日成主席を真の人間の生命の父であるとたたえた。

朝鮮人民は、昨日も今日もそうであったし、明日も永遠に熱い愛をもって人間愛の花園をつくり上げた金日成主席を、われらが慈しみ深いオボイだとして仰ぎ見るであろう。

国境を越えた人間愛

金日成主席の愛の世界は、国境を越えた無限の人間愛の世界であった。主席は限りなく広い度量と抱擁力をもって一生涯無数の外国の人士と親交を結び、心温まる恩情と配慮を巡らした。

主席が驚くほど多くの外国人士と深い親交を結んだのは、決して革命を指導した期間が長かったからとか、一国の元首であったからとかいう理由のためではなかった。

主席が人々に会うのは、それ自体が政治であり、彼らに会って親交を結び、正しく生きる道へいざなうのは、最も重要な活動であった。

主席が国の解放以後一生の間に会った136カ国7万余の外国人の中には、外国の元首級人物はもとより、さまざまの職務にたずさわり、政見を異にする人など、各階層の人たちが含まれており、その50年近くの間、毎年平均1400余人、1日当たり4人の外国人に会ったことになる。自国の人民でも海外居住同胞でもない外国人にこんなにも多く会ったというのは、普通人の常識を越える想像外のことである。

外国人に会ったのは国の解放後に限られていたのではない。祖国の解放を目指して戦った抗日革命闘争の日々、主席は実に

多くの中国人革命家や抗日連軍の中国人将兵はもとより、各階層の中国人と手を取って日本帝国主義侵略軍と戦った。また、国の解放を前にして最後の攻撃を準備していた頃には、国際連合軍内ソ連の革命家や将兵との共同戦線を張り、活動した。これらの時期に共に手を取って戦った外国人の数は記録に残されてはいないが、大変な数に上ったことは事実である。

世界の政治史上これほど多くの外国人に会った国家元首や外交官はいない。

主席が党や国家の最高指導者として会った外国の元首は120名、党首は206名、政府首班は76名で、合わせて400余名であるが、この数字は、主席が会った外国人総数の1パーセントにすぎない。だから主席が会った外国人の絶対多数は、普通の政界人、ジャーナリスト、外交官、宗教者、学者、軍人、労働者、農民、留学生、ひいては少年少女であった。

一国の元首が外国の国家や政府、党のリーダーでもない各階層の多くの外国人を必ず接見するという外交慣例も国際規範もある訳はない。それに外国の高位クラスの多くの人物はわが利益にかない、その国際的な権威を示威しうる外交の場でないと、わざわざそこへ出掛けようなどとはしない。むしろ外国人との面談を意図的に避けることでわが権威を保ち、偉ぶって見せようとする傾向が強いのである。

ところが金日成主席は、世間の人たちが見慣れている政党や国家の権力者とはあまりにもかけ離れた指導者であった。

主席は多忙を極めた政務の中でも、各階層の外国人に一切差別することなく喜んで会い、厚い友情を示した。現地指導で遠地へ出掛けている際も、遠く外国の地からやって来た人たちのことを思って、きっと会わなければと言い、貴重な時間を割いて会見したものである。

主席の接見を受けたいと希望する外国人士なら、主席がいかに高い権威の持ち主であり、その仕事がどんなに重大なものであるかを知らない訳がなかったろうが、それにもかかわらず、なんとしても主席に会わなければとし、接見を受けると、ためらいなくわが真情を吐露しているが、それは主席の高潔な人柄に知らず知らず引き付けられてしまうからであった。

主席の外交術は天才的なものだった。それは世人の通念とは全く異なる特異なもので、なんらかの打算的な言動やサービスのような話ぶりはどこにも見られなかった。それは気高い人情に貫かれた人間愛の発現であり、自主的な人間に対するこの上ない尊重心と信頼のなせるわざであった。

主席の人間愛は、朝鮮人民の大業を支持する外国の人士や自主性を志向する進歩的な人民すべてを親しい友と見なす大海の如き度量と抱擁力を源泉としている。この大きな度量と抱擁力

を源泉としているところにこそ、主席の人間愛の抜きん出た魅力と牽引力があるのである。

主席は生前、「親交関係」という語をよく使っていた。自身と外国の人々との切っても切れない人間関係について語る時にしばしば使っていた表現である。「親交関係」というこの短い表現は、外国の人々との関係を単なる政治的な外交関係とか実務関係を越えた人間的な友情関係と見なした主席の特異な人間愛によって生み出された新語である。

そんな中で知り合った外国のある学者が子宝に恵まれていないことを苦に痛んでいると知り、それをわが事のように気にかけて、健康を粗末にすべきでないとして、朝鮮の民族料理神仙炉（炉付きの鍋料理）と人参湯（高麗人参の煮汁）を贈ったこともあれば、ある国の独立闘争の指導者が大統領に就任した時は大喜びして、自身の名入りの金時計と、人民大衆の前に堂々と立つようにとして高級洋服地を共に贈ったこともある。主席はまた、カンボジアのノロドム・シアヌーク国王が内乱で政権を失った時にも、彼と結んだ友好のきずなを断ち切ったのではなく、以前にも増して親交関係を深め、政権の座に帰り咲くよう力づけ、惜しみのない援助を与え続けた。

父親の没後も続けられた、その未亡人や子女に向けられた主席の恩情にほだされた日朝文化交流協会の高木健夫・元理事

長の子女が主席の接見を受けて、「金日成主席は、生前の父から常に聞かされた偉大なお姿でわたくしたちに会って下さった。わたくしたちは、金日成主席がとても親しみ深く、度量の大きいお方だということを即座に感じることができた。まことに金日成主席はわたくしたちみんなを温かく遇して下さる慈しみ深いお方だ」と語っているが、これは国境を越えた主席の熱い人間愛についての偽らざる感想であろう。

それがゆえに、朝鮮と敵対関係にある国の人物や朝鮮を嫌っていた外国人も、主席に一度でも会う機会のあったあとは、その人柄に魅せられて主席の支持者、宣伝者になるのが常だったのである。

フランスの『リベラシオン』紙は、「クリントン大統領がナポリ先進７カ国サミットに参加すべくワシントンを出発する前に行った先進7カ国の記者とのインタビューで、『金日成主席の善意を信じている』とコメントした」と報じている。

万物は温かい太陽に従い、人間は真情のあふれる人物に従うものである。主席がそれほど大きな度量と抱擁力をもって外国人に私心のない真情を尽くしたがゆえに、国境を越えてすべての人たちがみな金日成主席を心底から尊敬し、信頼を寄せて従い、高く仰いだのである。そうした人たちの中には、主席を兄さんと呼んで敬意を表した首班級の外国人もいれば、お父さ

ん、おじいさんと呼んで慕った人たちもいた。

世界的な名声を博していた権威者スターリンや毛沢東など大国の元首、チトーのように自尊心の強いことでよく知られている国家元首たちも金日成主席を偉大な革命家、偉大な人間だとして心から尊敬し、信頼を寄せたものである。

主席の接見を2度も受けた外国のある人士は、金日成主席はどのような人物かと聞かれると、主席は一度会うと忘れようにも忘れることのできない、いつまでも従って生きたいという思いに駆られる人物だとして次のように書いている。

「人々を真正な人間にならせるのは、自主性に基づく人間愛と人情味であり、それは人間の香りだと言いたい。美しい花の放つ香りに惹かれて蜂や蝶が集まるように、気高い人間が身に付けた人間愛と人情味に惹かれて人々は金日成主席に従い結びつくのである。金日成主席の人間愛と人情味が実に熱く気高いがゆえに、万人が主席に魅せられて主席を尊敬し、慕っているのである」

このように、主席の人間愛の世界はその際限がどこにあるのか、誰も推量し得ない無限の広がりを持っていた。金日成主席の度量と抱擁力を前にして、万民が主席は世界を胸に抱いて生きた偉人であったとして今も仰ぎ見、たたえている。

最上の喜び——同志の獲得

金日成主席の生涯は真正な同志愛によって彩られている。

革命の同志一人ひとりに向けられた主席の同志愛は、瞬時として冷めることのなかったほど熱いものであった。

主席には同志が多かった。主席が終生情を注ぎ、真情を分かち合った同志は、実に数千数万を数えていた。共に死を覚悟して戦った決戦の場においても、また平和的建設の時期にも、ひとり主席のみを清い同志的信義をもって高く戴いた人たちのすべては、主席が自ら見出し、力を尽くしてたゆみなく育て上げた、主席の同志たちであった。

主席の生涯は、同志の獲得に傾けられた気高い生であった。

早くも若年にして両親の革命的影響の下で強い革命的同志観を確立していた主席は、その特有な同志観を固い信念とし、愛によって結ばれるべき同志の獲得に向けて生涯を生きたのであった。

主席は幼少年時代から、いかに苦しい道を歩いても、すぐれた同志を見つけた満足感で、疲労の色を露ほども見せず、喜ばしい表情を浮かべていた父親の姿から、人生の貴重な道理を学んだ。

同志の獲得から闘争の道に乗り出した父親金亨稷先生がわが子に教えた人生の道理は、同志を愛し、重視することであり、残し

た貴重な遺産の一つは、同志の獲得に関する思想であった。

父親は病床にあって臨終を間近にしていた時にも、わが子にすぐれた同志は天から降りてくるものでも地から湧いてくるものでもない、金や宝石を掘り出すように努力して自ら探し出し、育て上げなければならない、この父親がこれまで足が棒になるほど朝鮮と満州の広野を巡りに巡ったのも、お母さんが客を迎えて食事をもてなしながら自分は空腹をこらえたのも、そのためだったのだと言い聞かせた。そして、民衆に尽くそうという真心さえあれば、千万金をもってしても得られない友情をただ一杯のおこげ湯や1粒のジャガイモをもってしても得ることができるのだと教えた。

「同志のために死ぬ覚悟をしている人間であってこそ、立派な同志を得ることができる」として同志たちと多く交わるのだと繰り返す父親の切々とした遺言は、主席の胸に深く刻まれ、絶対的な金言として生涯守り続けられたのであった。

主席が同志の獲得に乗り出したのは、民族主義者たちの団体が満州で運営していた華成義塾で勉強するようになった時である。

華成義塾に入学した主席は、一方では新しい時代の思潮を探究し、他方では同志たちによって結ばれた組織の必要性を痛感して、共に手を取って革命闘争を始める同志たち一人ひとりを獲得していった。いかに正しくすぐれた目的を抱いていても、

生死を共にすることを覚悟した同志がいなければ、決してわが偉業の達成はなり得ないと教えた父親の遺言にのっとって、その実践に初めて取り組んだのが、この華成義塾時代であった。ここで手を結んだ同志の一人ひとりは、朝鮮革命の初の核心的根幹となって朝鮮革命の帆を上げた前衛たちであった。

朝鮮労働党の根源である初の党組織を建設同志社と名づけた意味は実に大きい。建設同志社という名称には、同志を獲得することから革命の第一歩を踏み出し、生死を共にすべき同志たちを中断することなく獲得し、その力を結束することで、革命の最終的勝利を達成しようという主席の雄大な抱負と確固とした意志がこもっていた。

同志の獲得を目指す遠くも多難な道を踏み分けてきた主席はその日々に、人民大衆の解放闘争史上前例のない崇高な同志観を確立した。

その同志観は、同志はほかならぬ第2の自分であり、同志を得たならば、天下を得ることができるという信条であった。主席にとって同志は、友情を分かち合う単なる知友でも親友でもなかった。主席の言う革命の同志は、互いが生命をも惜しげなくなげうつ覚悟のできる自分自身であり、相手であった。

同志愛についてのこのように独特な哲学を信条としていたがゆえに主席は、朝鮮革命が峻厳な時代に遭遇するたびに革命的

同志愛の信条を強く押し出し、同志愛の威力をもって革命を推し進めたのである。

同志の獲得を第一として革命の道を踏み出し、同志の獲得後に武器の獲得に乗り出し、党と国を建設した主席にとって最高の喜びは同志の獲得であった。

主席はわが生涯を振り返った回顧録『**世紀とともに**』に「**資本家は金儲けが格別の楽しみだというが、私にとっては同志を集めることがまたとない楽しみであり喜びであった**」としている。

主席は同志の一人ひとりを得るたびに大きな喜びにひたった。それは他のいかなる喜ばしい慶事よりも大きなものであった。茫洋たる海で真珠を見つけたかのようにすぐれた同志を得ると、わが生涯に特別に記録したいと思うほど、格別な幸運と見なした主席。

主席は一切の活動を科学的な見通しと厳密な計画の下に算段し、特出した英知をもって展開するのが常であった。このような主席にとって偶然の幸運なるものがあるはずはないと言ってもよかろうが、なんと、自身の幸運を大きなものとして誇らしげに話すことがよくあった。それはすぐれた同志に巡り合った場合である。

祖国と人民のために尽力している人には間違いなくすぐれた同志が現れ、困境にある時は恩人の援助を受けるのが世の常である。

主席の周りにすぐれた同志が密集したのは、主席が終生同志の獲得に努めたからである。にもかかわらずすぐれた同志を得た時は、それを非常な喜び、またとない幸運と見なしたのである。

同志愛を革命の第一の推進力と見なしていた主席は、終始一貫すぐれた同志を見出し、同志的なきずなを結ぶことをあらゆる活動の第一歩と見て、これに大きな力を入れた。

朝鮮人民は最も親しみ深い同志である主席を偉大な領袖、慈しみ深いオボイとして慕っていたばかりでなく、「偉大な金日成同志」と呼称して、その革命偉業にふるって力添えした。

ところが、その「同志」という呼称が問題にされた出来事があった。これを問題視した農民たちがいたのである。

彼らは主席の名の下に同志という呼称を付けて呼ぶのはもってのほかだとして、この問題を提起したのである。主席を同志と呼んでいたのは朝鮮人民の一般的な習わしとして全国に固着していた当時ではあったが、よく考えてみると確かにその意見に妥当性はあった。

実際、同志という呼称は思想と理念を共にする革命の戦友という意味を持つ用語である。ところで一般に仲間同士の間で使うこの呼称を、朝鮮革命の最高指導者であり、朝鮮民族の領袖と崇める主席の名の下に付けて呼ぶのは、素朴純真な彼ら農民にとっては納得し得ないことであった。

とは言え、その呼称を一概に否定する訳にはいかなかった。実際、その呼称よりよい尊称がない訳ではなかった。しかし、革命を共に行う人たち一人ひとりを同志と呼び、自身も彼らの同志の一人だと見なす主席、領袖と戦士という職務上の関係よりも愛と友情を分かち合い、生死を共にする同志的なきずなを一層重視し、貴重なものと見なす主席の志はこの上なく尊いものであった。

主席が抗日闘争の百勝の老将崔賢に初めて会ったのは東寧県城の戦いを勝利のうちに終えたあとの1933年9月のことである。東寧県城の戦いは、主席が作戦を立てて指揮し、そこに抗日遊撃隊の諸部隊と満州人の救国軍部隊が参加して2日間に結束をつけた輝かしい戦いであった。ところが通信連絡員のミスで戦闘への参加命令を後れて受けた延吉県の崔賢部隊が駆けつけたのは戦いが終わったあとだった。連絡員に当たり散らした崔賢は、主席に、「金日成隊長様、ほかにまた攻撃する計画はありませんか」と聞いた。すると主席は5歳年上の彼に**「若い者に向かって様とはなんたることです。ただ金日成とだけ呼んで下さい」**と言った。

崔賢は何をばかなと言わんばかりに、「ここに年齢の上下となんの関わりがあるとおっしゃるのです。私は胸中に金隊長を朝鮮軍の上座に戴いて久しいのです。ですから敬称を付けてお

呼びするのは当然です」と言った。主席は、そんなにしきりにおだてるとのぼせ上がってしまいますとして、**「あなたが私をいつまでもそんなにおだて上げるなら、私は二度と相手にしません」**とたしなめた。崔賢は主席の態度のあまりにも強硬なことに恐れ入って、今後はおっしゃる通りに致しますと約束した。

もちろんこの逸話は久しい以前の出来事ではあるが、このいわれからは革命の同志たちの間に成り立つ友情において礼儀や格式は無意味だとし、真実性のこもる固い同志的な友情を重視していた主席の真情を汲み取ることができるのである。

このような主席の真情がこもる逸話は、決して武装闘争時代にのみあったのではない。自身に対する同志たちの姿勢についての主席の要求は、生涯変わることがなかった。朝鮮人民革命軍の指揮者であった時も、党と国家の最高指導者の地位にあった時も、自らを共に力を合わせて闘う人たちの近しい同志、共同の目的に向けて生死を共にする戦友と見なしていた主席は、自分を同志と呼んで親しんでくれる人たちを非常に喜んで遇した。主席のこのような心情、同志たちへの要求は、愛する同志たちに求めてやまなかった純粋な要求であった。

自身の権威や職務の必要からではなく、手を取り合って共に働く大勢の人たちを最高の宝と見なし、同志としての愛と信頼に包まれて生きることを最大の幸せとする真の同志愛の体現者こそ生

涯変わりなく革命的同志愛を信条として生きうるのである。

主席は常に変わりなくそば近くにすぐれた同志たちがいることを最大の誇りとしていた。主席は機会のあるたびに、自分は革命闘争を続けた全期間、革命の同志たちの愛と保護の中で生きてきた、両親から愛された以上に同志の深い愛に包まれて生きてきたと回顧していた。

主席はさまざまな人に対応する上で、真の信義を不変の道徳的な評価基準とし、信義を尊び、信義を守ってわが身を犠牲にすることもためらわない人たちを最も気高い道徳の体現者であるとして高く押し立てて、革命の裏切り者や脱落者を信義に欠けた最も下劣な人間のくずだと見なした。

主席は人間的な信義を人々に対する道徳的な評価基準としてだけでなく、自分自身の一切の思考と行動の徹底した基準としていた。

主席は抗日革命戦争の神話の如き勝利の秘訣はなんであったかを知りたいと思っている人たちからよく質問された一つの問題があったが、それは朝鮮人民革命軍がどうして新興軍事強国日本の軍事力に対抗しうるほど強力であったかということであった。

これに対して主席は回顧録『**世紀とともに**』で、**「朝鮮人民革命軍が強かったのはなぜかと問われるたびに、私は、信義によって結束した集団だったからだと答えてきた。われわれの団**

結が道徳と信義に基づかず、ただ思想・意志の共通性によるもののだけであったなら、われわれはこれほど強くはなかったであろう」と述べている。

抗日武装闘争は正規軍の支援も国家的な後ろ盾もない最悪の状況の下で繰り広げられた血まみれの革命戦争であった。想像を絶するこの革命戦争において勝利した秘訣は、決して兵力の数や武装力の優位ではなく革命隊伍の鉄桶の団結にあったし、その団結の不動の礎石はほかならぬ抗日革命闘士たちの純潔な道義心であった。

もちろん大衆の結びつきを実現する上では一定の規制が不可欠である。けれども単なる規制一点張りでは人々の団結は不可能であり、したがって革命を前進させることもできない。

主席は複雑にからみ合った活動の一切を単なる規制一つのみをもってしては一歩も前進し得ないと見なし、革命と建設を指導した最初の日から規制のような強制力を用いて人々の一切の実践活動を統制し、操ることができると思うのは、全くの考え違いだと見なしていた。

だからこそ主席は、強盗日本帝国主義者が現代の軍事科学技術の精華と数十年にわたる暴圧政治や領土の拡大を通じてつくり上げたファシスト的な抑圧手段を総動員して、朝鮮革命を圧殺し朝鮮民族を抹殺しようと躍起になっていた時に、革命的な

信義と団結の戦略をもって抗日革命戦争を展開し、国の独立と人民の解放を成就したのであった。

1971年5月、平壌では戦傷栄誉軍人芸術サークル公演が盛大に行われ、公演を金日成主席も観覧した。公演は成功裏に進み、やがて元山戦傷栄誉軍人樹脂日用品工場の一芸術サークル員が舞台に立ち、『金日成将軍の歌』と『雪が降る』を演奏した。演奏が終わると主席が真っ先に拍手を送り、場内は割れんばかりの拍手でどよめいた。

丁重に一礼をして舞台を退いた彼は、主席がアンコールを求めていると知らされて、舞台に戻った。一瞬彼はあわてた。拍手が不意にぴたりと止んだのである。どうしたのだろうか。ひょっとして、自分が感激に我を忘れて何かしくじったのだろうかと思って棒立ちになった。ところが、またしても嵐のような拍手が巻き起こった。

あとで聞かされたことだったが、拍手が急に止んだのは、拍手を送っていた主席が、ハンカチで目じりを押さえていることに観覧者たちが気づいたからであった。

主席は涙を流していた。あの厳しい朝鮮戦争の日々、人民軍の勇士たちと共に戦火を衝いた百戦百勝の鋼鉄の勇将が、自分たちの最高司令官を変わることなく奉戴し、革命の花を引き続き花咲かせている戦傷栄誉軍人たちにこの上ない感謝

を覚え、その激情が胸を突き上げて熱い涙になり、頬を濡らしたのである。

アンコールが終わり、やがて公演も終了した。主席は静かに腰を上げたが、拍手をしなかった。またハンカチを目に当てていたのだった。主席は突き上げる激情を抑えることができず、**「あの戦傷栄誉軍人たちの公演を見ていると涙がしきりに出てなりませんでした。彼らは戦時に血を流した人たちです。……彼らと写真を1枚撮りたいが……撮影の準備をさせなさい」**と言った。

劇場の休憩室でも主席は、戦傷栄誉軍人は誰もがみな貴重な革命の同志たちだ、彼らの生活によりよく気を配り、今回の公演のニュースを新聞で大きく報じ、人民軍軍人たちも招いて観覧させるようにと言った。

専門のアーチストでもない彼らがいかに立派な演技を見せたとしても、どれほどのことであったろうか。けれども主席は、彼らの舞台を単なる芸術公演だとは見なさなかった。彼らの歌や演奏を党と領袖に向かって誓う革命の同志たちの信義を吐露する信念の噴出と見たのである。

実際彼らが大敵を向こうに回し血を流して戦ったのは、それまで侵略者の暴政の下で呻吟していた自分たちを解放と自由の喜びにひたらせてくれた主席に対する心からの報恩であり、祖

国を守るべく銃を手にして戦った兵士としての当然の道義でもあった。

それにもかかわらず主席は身障者になった革命の同志たちを気遣って、整形外科手術を専門とする病院を建て、さらには彼らのための学校も設けたばかりか、戦傷栄誉軍人向けの補助金を支給する制度を立てた。それでも足りず、戦傷栄誉軍人のいる全国の市、郡に戦傷栄誉軍人工場を建てて、彼らが革命の花をいつまでも咲かせるよう与える限りの措置を講じた。主席は、彼らが悲観に暮れず楽天的に生き、働く姿に接すると、有り難う、立派なものだとたたえることを忘れなかった。そして戦傷栄誉軍人に会うたびに、彼らに与えることがもっとあったのではないかと気にかけるなど、革命の同志としてあくまでも信頼し押し立てるべく尽力した。

それは、革命の同志たちに対する限りなく気高い信義の世界に生きる主席ならでは到底実行することも思い付くこともできない倫理であり、慈愛に満ちた人情であった。

革命の同志に対する主席の信義は時間を超越した永遠のものであった。

歳月の流れは、人々の多くの思い出を次第に薄れさせ、楽しかったことも悲しかったことも、また格別に親しんだ人たちさえも忘却のかなたへ押しやるものである。

けれども主席は革命の戦士や同志の生存中だけでなく、死別後もいささかの変わりもなく、生存中に劣らぬ深い愛と恩情をほどこしたのである。

主席は回顧録**『世紀とともに』**でこう述べている。

「生きている人は逝った人を忘れてはならない。生きている人が故人を忘れないでいてこそ、その友情は強固で真実で、永遠なものになりうる」

主席は、生存者が死別した人のことを忘れると、その瞬間から友情は霧散すると見ていた。同志たちの間に時間の限界と生死のいかんを超越した真の信義がなければ、歴史と伝統の正しい継承はあり得ないというのが、主席が革命的信義の歴史を生み出す中で汲んだ不変の真理である。

革命は犠牲を伴うものである。だが主席は、革命の同志が犠牲になると人一倍悲痛な思いを抑えることができず、2日、3日も箸を取ろうとしなった。同志一人ひとりを失うたびに体験するあまりもの悲しみ、やるせない胸の痛みは、世の人々の体験するいかなる苦しみをも超越するほど大きいものであった。

遺影まで色褪せるほど久しい歳月が流れても、先に逝った同志たちのことが忘れられず、彼らと変わりのない情を交わす主席の信義により、平壌市郊外大城山朱雀峰に抗日革命先烈の胸像をおごそかに建て並べた革命烈士陵が造営された。

最初烈士陵を造営する件が持ち上がった時、関係幹部たちは、記念碑を立派に建て、そこに烈士たちの姓名を刻もうという意見を出した。ところが主席はそれを首肯しがたいとし、生前の姿と同じ烈士たちの個性的な姿を胸像として再生させて、後世の人たちに見せるべきだと考えた。

ところが問題は、ほとんどの烈士が1枚の写真も残さずに荒涼たる満州の山野に埋葬されていることだった。家庭を持つことも、子女を残すこともできなかった烈士たちも一人や二人ではない。それも数十年の歳月が流れた今、彼らの容貌を記憶に残している人はほとんどいないのである。

ところが主席は、彼ら一人ひとりの容貌の特徴や姿形を数十年の歳月が流れても詳細に記憶していたのである。

どれほど先に逝った同志たちとまた会いたかったのか、どんなに彼らの姿を描き見、また描き見たのか、主席の記憶の中にはそれら大勢の同志たちの生前の姿が焼き付いていたのである。

主席は彫刻家たちに烈士たちの一人ひとりの容貌の特徴を丹念に教え、その結果、彼らの生前の姿は立派に再現できたのである。

主席は烈士陵の造営後、世を去った抗日の先烈、なつかしい同志たちの生前の姿が見たくなると、錦繡山議事堂（当時）の執務室の窓を開けて、抗日武装闘争時代の今は亡き同志たちの

生前の姿の胸像がある烈士陵を望見するようになった。主席と抗日戦の姿で永生している同志たちの間には、気高い信義をもって行き交う慕情と真情あふれる心中の対話がいつ果てるともなく続いたものである。

1960年8月のある日、主席は大同江の岸辺で魚を捕っている老人を見かけて近寄り、その様子をしばらく眺めて、どこでどんな仕事をしているのかと聞いた。何か気おくれしたかのようにもじもじしていた老人は消え入るような声で、遺児学院で散髪の仕事をしていますと答えた。

主席は、**「それはそれはご苦労さんなことです。あなたは実に立派な仕事をなさっています」**とにこにこして言った。

この言葉は、自分の職業に誇りを抱けずにいる老人をただなぐさめようとして言ったのでは決してなかった。主席は彼の職業を実に立派なものだと見たのである。というのは、自分は革命の同志たちが残して逝った遺児たちの頭をいちいちなでてみることができずにいるのに、老人はそれら可愛い国の大事な子供たち一人ひとりの頭をさすりながら働いているからであった。

子供たちのことをお頼みしますと言って現地指導に出かけようとしていた主席は、老人を呼び寄せて昼食を一緒にしましょうと言い、食卓をはさんで座って先に老人の杯に酒を注いだ。

革命家の遺児たちをわが責任で世話し、立派に育てること

を、先に世を去った同志たちに対する自身の義務とわきまえていた主席の信義の世界は限りなく広くも深く、切々たるものであった。

主席が生を終えるまで最愛の同志金策と並んで撮った1枚の写真を金庫に大事に保存していた事実、国の処々に革命闘士たちの銅像を建て、都市や機関、職域などの名称を革命の先烈たちの姓名を付けて呼ぶようにした事実、数多くの革命の同志たちの遺児一人ひとりを大事に育ててすぐれた幹部に登用している事実など、主席の気高い信義の世界についての話をここにすべて紹介することは無理である。

金日成主席が革命の同志を貴重な存在と見なし、先に逝った同志を忘れがたく思っていることに感動していたスターリンはある時、社会主義諸国の首班たちが参加して催された宴会で、真っ先に、金日成同志の健康を願って乾杯しましょうと提議し、次いで金日成同志の右腕であり、親しい同志であった金策同志を追慕して乾杯しましょうと提議した話もある。

主席が生涯変わりなく持ち続けた気高い信義の世界は、その幅においても限界のない限りなく崇高な人間愛の世界であった。

主席が気高い信義をもって限りない愛を注ぎ、恩情をほどこし情を分かち合った対象は、そば近くで活動していた幹部だけでなく、労働者や農民、幼い少年少女や海外居住同胞は言うに

及ばず、外国人にまで広く及んでいた。主席が革命活動に乗り出しその中で知り合い援助を受けたことのある人なら、それが朝鮮人であれ外国人であれ、彼らを恩人と見なして、人間としての信義を尽くそうと努めた。

それら外国人の中には中国籍の抗日革命縁故者たちもいれば、アパナセンコやノビチェンコら旧ソ連の軍人もいたし、モンゴルの平凡な女性もいた。

主席は、昔の知友を忘れることなく、なんとしても再会を果たしたいとして、わが生涯を振り返り、**「たとえ何カ月でもいいから、普通の旅券を持った一市民になって、パルチザン時代のように地下足袋に脚絆、背のうといった格好でにぎり飯をほおばり、ズボンの裾をたくしあげて川を渡り、草木に埋もれた昔日の激戦場をめぐって、戦友の墓に芝を植え、そして、私を命がけで助け、守ってくれた恩人たちに挨拶がしたかった」**と偽りなき心情を切々と打ち明けたものである。

一国の元首が平民の生活にあこがれ、羨むのも普通人には思いもよらないことではあるが、そうした気持ちに駆られることも前例のないいちずな心情であろう。

平民の生活にあこがれ、思いつめるほどになった理由はただ一つ、人間としての信義をなんとしても守りたいという気持ちにあった。

このように金日成主席は、人民大衆が同志愛によって固まり前進する革命こそ連戦連勝するという真理を歴史の前に証明した絶世の偉人であった。

たくましい精神力

3

金日成主席はたくましい精神力の持ち主であった。

幼少の頃から両親をはじめ万景台一家の強い精神力の影響を受けて育った主席は、生涯あらゆる困難をそのたくましい精神力をもって克服し、革命と建設を推し進めた。

主席の歩んだ数千数万里の革命の道は、想像を絶する厳しい試練が折り重なる闘争の道であった。しかし主席は、不屈の信念と胆力、革命的情熱と未来に対する楽観をもって立ちはだかる試練を克服しつつ前進した。たとえ天が崩れ落ちようとも愛する祖国と人民を抱きかかえて必ずや這い上がらずにはおかないというのが主席の不屈の覚悟であり、生涯を貫いた透徹した観点であった。

その不抜の精神は、朝鮮人民が学び具現すべき鑑となり、朝鮮の誇り高い尊厳となった。

無比の胆力

　胆力は人間の精神力を特徴づける資質である。肝の太い人間は逆境にあってもいささかも動揺せず、臆病な人間はいかに知力に長けていても、危険を前にすると及び腰になり、あるいはくじけてへたばってしまうのが常である。こうした点から「心臓は知恵を付けてくれるが、知恵は心臓にとってなんの足しにもならない」という格言はなかなか含蓄のある言葉である。

　金日成主席はたぐいまれな胆力を備えており、その胆力を駆使して革命と建設を指導した希有の実力者だった。

　主席の胆力はいかなる脅威にもびくともしない勇敢さと、生命の危険ももののかは正面から突き抜けてゆき、何事であれ大きなスケールで設計し、最後まで推し進める実践力であった。いかなる試練に遭遇しても泰然として事態を処理し、結束をつけずにはおかないのが主席の気質であった。

　主席の胆力はまず、いかなる強国の威嚇や侵略、いかなる試練や逆境の中でも平然として対処する気概として表現された。

　人間の胆力の真価は苦境に陥った時に現れるものである。思いもよらない難局に直面し、あるいは巨大な試練に遭遇した時、とりわけ強大な帝国主義侵略勢力の威嚇を前にした時、こ

れにいかに対応するかにより、人間の胆力いかんが評価されるのである。

主席は2度にわたる強大国を相手どった革命戦争の指揮者であった。これら困難を極めた革命戦争は、難局にいかに対処すべきかという人間の胆力の強さを実践的に示した事例である。

主席が相手どって戦った両国は、どの面から見てもあなどりがたい帝国主義強大国であった。日本はアジアの盟主を自称していた新興軍事強国であり、アメリカは世界の最強を誇るいわゆる唯一の超大国であった。それにもかかわらず、胆力絶倫の主席が導く朝鮮人民の前にこれら両国も屈服せざるを得なかったのである。

抗日革命戦争は主席の類ない胆力に基づいて開始され、展開された血みどろの戦いであった。実際、父親から譲り受けた2挺の拳銃を持って、大量の航空機や戦車、軍艦を備えた日本軍に正面から戦いを挑むというのは、常識を大きくはずれた無謀きわまる軽挙と見なされてしかるべきであったろう。

ところが主席は、想像を絶するこの厳しい戦いの道を決然として選び、抗日大戦に踏み切った。物的・軍事的な土台もなければ、外部の支援を受ける条件も皆無の状況下で、ただ正義の大業への確信と自国人民の力を絶対的なものと見なす胆力がそこにあったのである。

抗日革命戦争のさなか、極左的な反「民生団」闘争の旋風が巻き起こっていた時、迫害を恐れて誰一人収拾に乗り出せないでいたが、主席が敢然として朝鮮革命を救った話や、敵軍の追撃を受けている中でも白昼、ある山の台地でこれ見よがしに祭日の祝賀大会を開いた話など、その類ない胆力についての伝説のような話は数え切れないほど多い。

民族の尊厳と祖国の運命を決然として守り抜いた主席の無類の精神力は、朝鮮戦争のひとこま、ひとこまにも明瞭に焼き付けられている。

アメリカ帝国主義者による開戦の日1950年6月25日、敵軍が38度線の全域にわたって北進を始めた時、内閣の緊急会議に集まった幹部たちは高度に緊張して主席を待っていた。彼らの表情は、この危機を前にして不安を隠せないでいた。

その時、廊下から主席の力強い声が聞こえた。

「……彼らはなんという愚か者たちだ。アメリカ人は朝鮮人を見損なっている」

会場に入る主席の足どりは気力に満ちていた。

主席は泰然として一同を見回し、敵は朝鮮人をばかにしている、狼は棒で叩きのめせというが、朝鮮人を見損なって襲いかかる者どもにわが朝鮮人の力を思い知らせてやることだと力強く言った。会議場の雰囲気はたちまちにして、いかなる大敵が

攻め寄せようとも泰然自若として落ち着きはらっている主席の大きな胆力と革命的気概に感嘆し、この戦争は既に勝ったも同然だと確信して勇気の盛り上がる思いをした。

主席は戦争の全期間、いささかも動揺の色も見せたことがなく、そのたくましい精神力をもってアメリカ帝国主義侵略軍との戦いを指導した。こうして、第2次世界大戦後、われこそはと自負していたアメリカの将軍たちが相次いで敗戦将軍なる憂き目を見ることになった。

アメリカのある軍事専門家は「去る朝鮮戦争は金日成将軍の戦法によりアメリカが敗れ、アメリカの名将たちが一番多く死に、免職されるという戦争として特徴づけられる。金日成将軍の戦法がいかにすぐれていたのか、3年間の戦争の中でその戦法にかかり敗れた罪を問われて、何人もの国連軍司令官や第8軍司令官が取り換えられた。最後には投入すべき将官がいなかった。有名なマッカーサーもアイゼンハワーもその戦法にかかって敗れた」と評した。

ヨーロッパのある軍事評論家も『ニューヨーク・タイムズ』紙に「ウォール街の商人たちが最初北朝鮮を見くびったことは取り返しのつかない過ちであった。彼らは弱者だったのか。いや、そうではない。戦争の成り行きが見せていたように、彼らは武装は貧弱でありながらも、特異な戦略と戦術、変幻無双の

戦法によって戦う強兵であった。アメリカの将軍たちは後ればせながらも彼らが相手にした軍の統帥者金日成将軍が豊かな経験を積んだ遊撃戦の名手であることに当然の注目を向けるべきであった」とする文を投稿している。

当時、米極東軍司令官兼国連軍司令官であったクラークも、板門店で停戦協定文にサインしたあと、その時に使った万年筆を記者たちに見せながら、自分がサインする羽目になったことは遺憾に堪えないとし、「しかし、私だってどうしようがあるのか。金日成将軍を相手にしたのでは……。ナポレオンが100人いても、朝鮮に打ち勝てるものではない」と語った。

朝鮮人民がアメリカ帝国主義の高慢な鼻柱をへし折り、反帝反米の新時代を開いた英雄的な人民になり得たのは、全的に金日成主席の鉄の胆力と気概によってもたらされた輝かしい結実であった。

無類の胆力をもって終生祖国と革命を守り続けた主席のたくましい精神力は、生を終える時期までも衰えることがなかった。

主席は東欧の社会主義諸国が相次いで崩れていく悲劇的な事態の中でも、古典的なその著作**『わが国の社会主義の優越性をさらに強く発揮させよう』**（1990年5月24日）、**『アメリカ社会労働党代表団との談話』**（1990年10月5日）、**『「毎日新聞」編集局長の質問にたいする回答』**（1991年4月19日）、**『わが国の**

社会主義はチュチェの社会主義である』（1994年4月16日）などで、一切の帝国主義反動勢力と対抗してあくまでも正義の革命的立場を強く守るべきとする鉄の意志を闡明した。

主席の胆力はまた、スケールの大きい大胆な作戦と頑強な展開力をもって革命と建設を指導する強力な精神力として表現された。

主席はいかなる事業であれ、普通人には思いもよらないほど高い目標を定めて推し進め、いったん定めた目標は必ずや達成せずにはおかない実践力を備えていた。

朝鮮の西海閘門は、主席の革命的な展開力と頑強な実践力を誇示した労働党時代の限りなく多い創造物の中でも突出した構造物の一つである。

1981年10月、主席は朝鮮労働党中央委員会第6期第4回総会において4大自然改造計画を提議し、その一つとして西海閘門の建設目標を打ち出すという雄大な設計図を公表した。

当時、一部の幹部や設計技師は、大同江河口をかなりさかのぼった南浦市臥牛島の前方を塞いで閘門を建設する案を立て、それもソ連のボルガ・ドン運河とルーマニアのドナウ川下流運河の建設状況と見合わせて、自国の閘門の建設は数十年をかけなければならないだろうと見ていた。

ところが主席は、そんなことでは干拓地の用水問題を完全に

解決することはできないとして、彼らが意図した閘門の位置を否定し、大同江の河口の外側の海上に8キロもの長さを持つ閘門を構築し、それも数十年ならぬ数年間でやり遂げようという雄大な目標を設定したのである。

計画が公表されると、ある国の専門家は、水深が深い上、干満の差が大きい朝鮮西海上に8キロもの長さの海を塞ぐなどとはたわけた話だ、朝鮮が西海閘門の建設に成功したら、自分たちはベーリング海峡を塞いでやると、あざ笑った。しかしながら彼らは結局、主席の不屈の精神力により西海閘門の雄大な建設が予定通りに完了したことに驚嘆し、自分たちの思考が全くの誤りであったと自認せざるを得なかった。

主席のスケールの大きい大胆な作戦と頑強な実践力に鼓舞された人民軍の建設者や労働者たちは、国産の設備と資材をもって自らの技術でわずか5年にして、西海閘門を立派に建設するという奇跡的な成果を達成したのである。

たとえ当代にはその恵沢にあずかれないとしても、いずれ子孫たちのためになるならば、いかに大きな資金を投じ、力に余ることであっても、大胆に手がけ、完遂するまで押し通すべきだとするのが、主席の活動の原則であり気風であった。

主席から両江道甲山郡の一帯で銅鉱を探してみるようにとの課題を受けた地質探査隊が探査を続けたが、銅鉱は発見でき

ず、貴重な資金が浪費されるだけに終わった。

報告を受けた主席は決してあきらめてはならない、探査を放棄せず、もっと続けるようにと彼らを力づけ、追加を求めた金額をはるかに上回る資金を配当する措置を講じた。そして、たとえ銅鉱が発見できなかったとしても構わない、銅鉱がなければその地に、この一帯には銅鉱がないから探さないことという標識杭を立てよう、そうしたらのちの世の人たちは銅鉱を見つけようとして苦労をしないだろうから、今いくら金を使っても惜しくはないと言った。このように主席の太っ腹な措置と展開力も幸いして、遂に銅鉱は発見されて、国家経済の発展と人民の生活の向上に大きく役立てられることになった。

主席はまた、熱しやすく冷めやすい仕事ぶりを唾棄すべきだとし、何事を手がけても常にけりがつくまで、止むことなく推し進めることを習性としていた。主席は、革命闘争に乗り出した時から生を終えるまで常に大きなスケールで大胆に活動を展開し、例外なく最後まで推し進めるという活動気風の手本を身をもって示したものであった。

主席はいったん政策を立てると、いかに複雑にして困難な環境に際会しても、一歩も退かず、足踏みすることもなく、頑強な忍耐力と不屈の闘争力をもって決められた政策や路線を必ずや貫かずにはおかなかった。

1987年3月、化学工業部門責任幹部協議会で、化学工業のいっそうの前進を促し、幹部たちの中でわれわれの方式で生きる革命的気風を確立することの重要性を強調した主席は、以前自分の父親から聞かされたことだが、それは朝鮮人にとって最大の欠陥は三日坊主式に働くことである、これはなんとしても克服しなければならない、自分が父親からその教えを受けていなかったとしたら、15年もの間山の中で苦しくも厳しい抗日武装闘争の試練に打ち克つことはできなかったであろうとして、幹部たちは熱しやすく冷めやすい仕事ぶりを徹底してなくし、すべての活動を粘り強く推し進めていかなければならないと懇々と語った。

主席はある時、インゲン豆を積極的に植えるよう強調した際にも、熱しやすく冷めやすい仕事ぶりをなくさなければならないとして、インゲン豆には蛋白質が多い、以前咸鏡道の人たちは卵をあまり食べられなかったが、インゲン豆をたくさん植えて食べたので丈も高く、体格もよかった、インゲン豆に含まれている蛋白質の量を見ると、インゲン豆50粒は1個の卵に匹敵する、慈江道では以前はインゲン豆を積極的に植えていたが、今ではあまり植えていない、われわれ朝鮮人は何事であれ最後まで粘り強く取り組むことがなく、ちょっと手をかけてみては投げ出してしまう、実にこれがわが国の人たちの大きな弱み

だ、全国の至る所でインゲン豆をたくさん植える運動を力強く繰り広げることだと言った。

金日成主席はいかなる逆境にもひるむことを知らず、敢然として立ち向かう強力な攻撃精神をもって生を輝かせた剛腹無双の偉人であった。

主席は豪胆な取り組みで朝鮮革命と反侵略戦争、国づくりを力強く推し進めた。そのたくましい精神力をいかんなく発揮し、いかなる不正をも許さずに粉砕し、厳しい自然を手なずけてきた主席には、人並みはずれた度胸が備わっていた。それはいかなる大敵にも敢然として立ち向かう攻撃精神、不可能を知らない不屈の心構えであり、どのような場合も余裕綽々として対処する心のゆとりであった。

敢然として立ち向かう攻撃精神は、主席の一生に貫かれていた特有の精神力であった。

主席はその回顧録で**「私の生涯を通じての志向は、防御ではなく攻撃だったと言える。私は革命に身を投じたその日から今日に至るまで、敢然として立ち向かう攻撃戦術をもって人生を生き抜いてきた。前進途上に難関が立ちはだかるたびに、私はその前でためらったり動揺したりしなかったし、迂回したり避けたりすることもなかった」**と述べ、発展する革命のいろいろな段階で敢然として立ち向かう攻撃戦術を使ってきたのは、複

雑な試練にみちたわれわれの革命が提起した要求であった、20世紀の世界を揺さぶる歴史の渦の中でも、防御や後退、迂回するという方法にしがみついていたなら、わが革命の前に横たわる難局を克服し得なかったであろう、それゆえ今でも逆境に正面から立ち向かって、それを順境に変えた革命的戦略がまったく正しかったと考えていると、熱い思いを込めて振り返っている。

主席の一生に貫かれていた攻撃戦術は、その剛腹な精神力の集中的な表出であった。初期革命活動の頃から苦労という苦労をなめながらも、敢然として立ち向かう攻撃精神をもって万難を突き抜けてきたあの苦難にみちた抗日武装闘争時代、死境に陥ると、不動の胆力をもって危機を乗り越えて、逆境を順境に、禍を福に変えたものである。

実際、抗日革命闘争の全過程はその一歩一歩が死と向かい合った過程であった。国の解放後、詩人李燦が『金日成将軍の歌』を作詞し、そこで「長白の山なみ血に染めて　鴨緑の流れを血に染めて……」とうたったのは、そこにいささかの誇張もない真実がある。しかし主席は、この果てのない死境、死と向かい合った激戦場で一度として敢然と立ち向かう攻撃精神を遅滞させも、変更させもしなかった。

主席は1939年2月、苦難の行軍を続けていたある日、日本軍討伐隊の目の前を白昼平然として行軍し、危機を切り抜けると

いう、並々ならぬ胆力を発揮したこともあった。

この日の行軍は、長白県佳在水の裏山から始まった。その頃は人民革命軍の主力部隊が分散行動に移って活動していたせいで、司令部の人員は少数にすぎなかった。ところがそんな時、敵軍は偶然司令部の動きを探知した。いささかなりとも移動が後れ、ぐずぐずしていると、大変なことになる。

主席はこの重大な危機を前にして、佳在水の裏山をいち早く降りて、広い草原を決死の覚悟で強行突破すべきだと決心し、隊員たちに敵軍が気づいて押し寄せて来ようが来まいが振り向きもせずに行軍せよと命じた。すると、部隊の指揮官呉白龍が、「将軍、われわれが行軍を始めたら、敵の銃弾が降り注ぐにきまっているのに、どうやってあの草原を突破できましょうか」と言った。将軍の命令を一度として尻込みせず、無条件遂行している肝の太った彼が驚いたほどの命令だったのである。

主席は、どうもこうもない、前後に機関銃を一挺ずつ配して敵軍が前方に現れたら前の機関銃が撃ち、後ろから追ってくれば後ろの機関銃が撃ちながら何がなんでも行軍するほかないのだ、ときっぱり答えた。主席のこの案は、あまりにも急迫した抜き差しならない事態を乗り越えるには、豪胆に敵の目の前を決死の覚悟で突っ走るほかない、そうすれば敵兵は肝をつぶしてあわてふためくだろうから、その隙に草原を突破しようとい

う策略であった。実際、討伐隊は不意に自分たちの前に現れ、風のように遠ざかる人民革命軍の動きに度肝を抜かれて1発の銃弾も放たず茫然と見送るばかりだったし、革命軍の隊員たちも草原を突破し、樹林の中に到着したあとになって、主席の豪胆な度胸があったればこそ、全員が傷一つ負わず無事に生き延びたのだと感嘆した。

後日、主席は当時を振り返り、しわぶき一つなく息を呑んで遊撃隊の行軍を見下ろす敵兵たちを見て、隊員たちがあっけに取られていたとし、人間が抜き差しならぬ窮地に陥った時、貴様が死ぬかおれが死ぬか、ここで決着をつけよう、死ねば一度死ぬ、二度死ぬものかという肝っ玉を持って何事にも大胆にぶつかっていけば、克服できない難関はないと言った。

主席は1937年春、朝鮮人民革命軍の主力部隊が小湯河で数千の敵軍の包囲を受けた時も、敵軍が樹林地帯にのみ気を奪われていることを見抜いて、大胆にも大道路に抜け出して行軍し、住民地域へ部隊をまぎれ込ませて危険を脱したこともあった。

主席が小湯河の台地で決心した大道路の行軍と住民地区への脱出は勝算が確実な冒険であった。主席がそのような冒険を断行したのは、その冒険の中に逆境を順境に変え、受動から能動へ移行する明確な攻撃精神があり、敵軍の弱点がなんであるかを見抜いていたからであった。実に百発百中の冒険、それは天

が崩れ落ちても這い出る隙はあるという胆力の持ち主である主席ならでは断行し得ない攻撃方式であった。

主席は1939年の春、朝鮮の北部茂山地区へ国境を越えて進出した際も、日本軍が遊撃隊の討伐に利用すべく作り、竣工検査を前にしていた甲山と茂山を結ぶ甲茂警備道路を白昼堂々と行軍したが、これは日本軍を仰天させた快挙であった。

このようなたくましい攻撃精神を抱いていたからこそ、アメリカ帝国主義者が建国間もない朝鮮をあなどって侵略戦争を引き起こした時、主席は即時総反撃を命じて、開戦3日にしてソウルを解放し、1カ月余りあとには敵軍を洛東江の南の狭い地域に追い込むことで、彼らをして「アメリカ史上最も屈辱的な敗北を喫した」と慨嘆させた。さらに1960年代末のアメリカ軍の武装情報収集艦「プエブロ」号の拿捕事件とアメリカ軍の大型スパイ機「EC—121」の撃墜事件の時にも、アメリカ帝国主義者の「報復」には報復で、全面戦争には全面戦争でこたえると豪胆な対応をして、アメリカ帝国主義者の企図をことごとく粉砕した。

主席は、1990年代に入り、アメリカが国際原子力機関を通じて朝鮮に核査察を強要した際も、アメリカがわれわれに圧力を加えるならば、われわれはそれに断固として対応するであろう、圧力によりわれわれを屈服させようとするのは愚かな考え

だ、われわれは即座に強力な対応打撃を加えるであろうと断固と言明して、アメリカの心胆を寒からしめた。

革命のため、愛する祖国と人民のためとあらばいかなる危険もものともせず、大胆に攻撃戦に乗り出す偉人であるがゆえに、抗日大戦と祖国解放戦争で多くの期間を第一線で過ごしたのである。

主席は1966年10月18日、朝鮮労働党中央委員会の幹部たちの前で行った演説で次のように述べた。

「わたしは以前、パルチザン闘争の頃、弾に当たるなら当たれと、危険なところへもかまわず入っていきましたが、背嚢は銃弾に射抜かれて穴が開いても、体には当たりませんでした。みなさんは、こういう革命的信条を持ってこそ、革命事業を続けることができるのです」

抗日武装闘争の日々、主席のいた司令部は戦場では常に最も危険な位置を占め、主席は拳銃を手にして戦いを指揮していた。大沙河付近戦闘の場合のように、司令部を狙う敵兵がひそかに近づいていた時も主席は一度としてわが身の安全について考えたことがなく激戦を指揮した。時には機関銃をつかんで突撃の先頭に立ち、時には隊伍のしんがりについて追撃してくる敵兵を撃ち倒すようなこともあった。

主席は祖国解放戦争の時も、激戦の続く1211高地一帯に出向

いて軍人たちを勝利へと鼓舞激励した。

1951年9月23日、主席が最前線の直洞嶺の麓へ至った時、野戦車はそれ以上前進することが不可能になった。主席は車を降りて、煙雲のたなびく峰々や戦う高地を見渡し、車が前進できないなら歩いて行こうとして、爆弾の穴や折れた木が処々にある道ならぬ道を歩き出した。危険ですとして随員たちが引き止めようとすると、主席は高地で戦う兵士たちのことを考えながら歩くと疲れもせず、危険な思いもしないとして、標高1100メートル余の峠道を登り、激戦場1211高地に連なる最前線の1237.3高地に立った。その頃敵軍は、「最大の砲撃」「最大の爆撃」と称して、1211高地に日に3万～4万発の砲爆弾を浴びせ、数多くの戦車の援護を受ける敵兵が高地に入れ違いに這い上がる熾烈な攻防戦が休みなく続いていた。狼の群れのように押し寄せる敵軍を迎え撃って戦う熾烈な激戦の中で日が暮れ夜が明けた。うっそうたる森林は影も残さず炎上し、岩々が粉砕されて粉が風に吹かれて舞い上がるという有様だった。砲爆撃がいかに激しかったか、生き残ったリスが逃げ場に迷って人民軍兵士のふところに飛び込んできた例もあった。

怒号する爆音、きな臭い硝煙が鼻をつく高地に立ち、双眼鏡を目に当てて戦場を注視していた主席は、前線指揮官たちに向き直って敵の主要攻撃方向を指しながら、**「1211高地は戦略的**

に極めて重要な高地です」と言った。そして、この高地を生命を賭して守らなければならないと強調し、そのための作戦ならびに戦術方案を具体的に教えた。

主席を最前線に迎えて貴重な教えを受けた人民軍将兵は、「最高司令官同志のために！」という合言葉の下に1211高地を血潮をもって守り、敵の最後のあがき「夏期攻勢」を粉砕した。

国の運命を賭けた厳しい祖国解放戦争の勝利は、このように、祖国と人民のためとあらばわが身の安全は一向意に介せず戦いを指揮した主席の不屈の精神力と胆力によって成就し得たのであり、朝鮮人民はその精神力と胆力に支えられて、戦後における数十年間の社会主義の防衛と国づくりにおいても驚異の成果を収めたのである。

金日成主席は不可能というものを知らない無類の剛毅な精神力をもって革命と建設を輝かしい勝利に導いた希世の指導者である。

抗日武装闘争の初期、遊撃区において火薬の製造に成功したのも、主席の類まれな革命精神、決心して取り組めば不可能事はないという鉄の信念と胆力によって遂げられたのである。

主席はその時、生命の危険が伴うそれまでの火薬の獲得方法を脱して、自力で火薬を製造することを決心した。一部の人たちは、それは砂土に楼閣を建てようとする、できない相談だと

してかぶりを振ったが、主席は人間がいったん決心すれば不可能事はない、わが国の先祖が作った火薬をその子孫がなぜ作れないというのかとして、火薬が生み出された史実とそれにかかわる資料を求めて研究し、遂に火薬の原料である焔硝（硝酸カリウム）を民間でいくらでも得ることができると確認した。

焔硝は民家さえあればどこにでも見られるものであった。ある日、主席は兵器廠で働く人たちを伴って灰や堆肥の積まれてある一農家の裏庭へ行った。主席は堆肥の表面を覆っている白い塩のようなものを指して、これが焔硝なのだと教えた。そうと知った一同は、自分たちはわが手にキセルを持っていながらもわしのキセル、わしのキセルと言ってきょろきょろしている年寄りとなんら変わりがなかったとして大笑いした。

外国人が何かの発明をしたと聞くとひどく感嘆しながらも、自国人が発明をした話を聞くと首をかしげる事大思想の持ち主やニヒルな人間たちの思考方式は、主席にとっては縁もゆかりもなかった。主席は繰り返される失敗にもめげず粘り強く実験を続けて、遂に理想的な配合比を確定し、火薬の自製を確実になしうる道を拓いたのである。

朝鮮がトウモロコシの栽培を大々的に行うようになったのも、主席の決断によるものであった。

朝鮮戦争の終了後、主席がトウモロコシの栽培を大々的に進め

ようにとの方針を示した時、一部の保守的な人たちは首をかしげて成り行きを見守った。けれども主席は農民たちの積極的な支持を得て、保守主義者や消極的な人たちの反対を押し切り、全国の農地でトウモロコシを大々的に栽培すべく綿密な措置を講じた。その結果、戦後の困難な食糧事情は解消されたのである。

主席はいかに緊迫した情勢にあっても余裕綽々として一切の問題を処理し、逆境を順境に、禍を福に転ぜしめたものである。

去る祖国解放戦争における一時的な戦略的後退に際して主席は警護連隊長に、親衛中隊を平壌市の街路で歌唱行進を行うようにせよと命じた。

連隊長はわが耳を疑った。その時の戦況からして後退を瞬時たりとも遅らせることは許されなかったのである。敵軍は早くも首都平壌を目指して北上し、10数キロ南の地域で戦いが始まり、首都の市民はあわて、意気消沈していた。とはいえ、主席自らは後退を急がずに泰然として当面の問題を処理し、市民をはじめ全人民に勝利の信念を抱かせるべく、親衛中隊の市内歌唱行進を命じたのであった。

親衛中隊は直ちに歩武堂々と勇ましい歌を歌いながら街頭行進を始めた。陰惨としていた首都の大通りににわかに響く親衛中隊の歌う『祖国防衛の歌』を聞いて、数千の市民が雲集した。

（親衛中隊がここにいる。親衛中隊が残っているからには最

高司令官もわれわれの近くにいるはずだ）

彼らは、金日成将軍がこんなにも悠々としているのだから、われわれはきっと勝つとして胸をなでおろしたものである。主席が親衛中隊を引き連れて平壌をあとにしたのは、市内のすべての機関が後退を始めた時であった。

このように主席の悠然たる態度は、後退を余儀なくされた非常状態の中にありながらも、国の運命を憂える人々の悲観と不安をきれいに払拭する巨大な力になったのである。

主席は戦後の数十年間、アメリカ帝国主義者と南の好戦勢力が第2の朝鮮戦争を挑発すべく狂気になっていた時も常に、明日戦争が起こるとしても今夜の12時までは社会主義の建設を進めなければならないと、余裕綽々とした気組みをもって人民を国づくりに鼓舞した。

1960年代にアメリカ帝国主義者がベトナムに対するトンキン湾事件を起こし、キューバに対するカリブ海危機を作り出し、さらに朝鮮に圧力を加えて侵略の企図を露にした時、主席は、戦争が起きると破壊は必定だとして経済建設をないがしろにするのは、人々を恐怖と絶望に陥れ、前途への希望を失わせる悲観主義の現われだ、われわれは戦争が起きたら破壊されることばかり気にするのではなく、敵を叩きのめすことを考えるべきだ、われわれは明日戦争が起きるとしても今夜12時までは建設

を続けなければならないとして、朝鮮人民や軍人を力づけた。

戦争が起きても建設したものすべてが破壊されるのではない、たとえすべてが破壊されたとしてもまた建設すればよいし、現在のものよりもっと立派なものを建設すればよいというのが主席の土性骨であった。

アメリカ帝国主義者がこれまでの数十年間、朝鮮が近代的な兵器や装備を有しているとして新たな侵略戦争を引き起こせなかったのではない。それは、主席の鉄の信念と天にもまさる気概に恐れを抱いていたからである。実に金日成主席は、絶大の胆力をもって朝鮮人民と人民軍を陣頭指揮した世に類のないたくましい精神力の持ち主であった。

燃える情熱

金日成主席は燃える情熱の持ち主、情熱の力で万難を乗り越え、情熱をもって不滅の業績を積んだ偉大な情熱家であった。

主席の一生は文字通り超人的な情熱で貫かれた生であった。革命の道に乗り出した当初から革命に対する限りない献身と熱烈な人民愛、燃えるような情熱で心身を燃焼させた。

80星霜にわたるその情熱あふれる活動は、朝鮮人民を勝利一路

に力強く導いた最も大きな要因の一つであった。主席のその情熱的な指導があったればこそ、朝鮮は長年にわたる後進性と貧困を振り払い、自主、自立、自衛の社会主義強国にのし上がり、世界の中で万人の認める強国の地歩を占めるに至ったのである。

東南アジアのある国の首班が主席に、1日に何時間お休みになるのかと質問を提起したことがあった。

主席は、**「あなたは私が日に何時間睡眠をとるのかと質問されましたが、私は抗日革命闘争の時から夜は遅くなって眠り、朝は早く起きたものですが、今はそれが習慣になりました。ある時は明け方まで仕事をすることもあります」**と答えた。

主席は、生涯時間が足りないことを嘆いていた。それほど主席は時間を惜しみながら1日1日を送った。抗日武装闘争の日々に続く新しい国づくりの時期も、また祖国解放戦争と戦後の復興建設期、社会主義建設の時代にも安らかな睡眠をとる日が1日としてなかった。

側近の幹部たちが、夜遅くまで働きながらも朝は人より早く起きて仕事を始めるのは少し考慮なさって下さいと強くお願いすると、主席は微笑を浮かべて、体にしみついた習慣はなかなか直せないものだとして、こう続けた。

「朝早く起きるのは私の長い生活の中で固まった習慣なのだ。……あの山で戦っていた時、敵は決まって夜明け前の未明

に襲ってきたものだ。われわれが夜中に行軍した末にやっと眠り込んだその時間にだ。敵にとっては極めて適切な時間を選んだと言えよう。

われわれがすっかり疲れ果てて深い眠りに落ちている時だからね。

そんな訳で、部隊の運命に責任を持っている人間がなんで平気で眠っていられようか。その時以来、私は暁には目がさめて眠れなくなったのだ……」

しばらく口をつぐんでいた主席は語を継いだ。

——祖国の解放がなったらそうしようと約束したが、いざ解放がなってみると、なんという膨大な仕事が待ち構えていたのか。山にいた頃と同じように、やはり夜が明けるとどうにも眠れなくなった。それで気づかってくれる人たちに、建党・建国・建軍が一段落ついたら心ゆくまでぐっすり眠ってみようと言ったものだが、その次に戦争が起こり、戦争が終わると、復興建設が始まり、引き続き千里馬の大進軍だ。実際他の国々より後れているのにぐっすり眠り、休息をしたいだけしていたらどうそれらの国に追いつき追い越せようか。とどのつまりは生活が私に朝安らかに眠ることを許さなかった。そうして、ますます固まった習慣だから朝早く目をさます癖だけは一生直せそうにない。健康は革命を行う上で必要だし、革命家は革命活動

を瞬時も停止するわけにはいかないのだ。

一生革命家として生き、わが情熱を祖国と人民のために余すことなく傾けずにはいられないというのが情熱家金日成主席の気構えであった。

戦時中、慈江道長江郡香河里で朝鮮労働党第3回総会（1950年12月）の準備を行っていた時も、二晩を一睡もせず報告文を執筆したが、睡魔に襲われると、戸外泉の水で顔を洗って睡魔を追った。

そのことで気をもむ軍人たちに向かって主席は、戦争は信念と意志の対決であると同時に情熱の対決でもある、われわれはいかに厳しい試練の中でも燃える情熱を持って勝利を早く勝ち取らなければならないと言った。このように主席は2日間一睡もせず報告書を作成し、夜が明けると、歴史的な朝鮮労働党第3回総会に臨み、報告を行った。

1968年11月某日、主席は朝早く平安南道龍岡郡の養鶏場に向かった。

国の家禽業を盛り上げて人民の生活を改善する問題について何日も内閣の責任幹部や平壌市と諸道の幹部たちと協議を重ねた末、現地でじかに実態を確かめた上で具体的な対策を立てることにしたのであった。

主席は龍岡乳牛牧場をも視察したあと、青山協同農場に趣

き、ここで江西養鶏場、龍岡養鶏場、龍岡乳牛牧場、青山協同農場の責任幹部協議会を午後1時まで指導した。

農場では昼食を用意し、食堂へ案内しようとしたが、主席は、時間がない、今日はいろいろな仕事が待っている、食事は車の中でも取れるとして、何粒かのジャガイモと持参したパンで簡単に腹ごしらえをして、現地指導の道を歩み続けた。主席は朝からそれまでいっときとして休息していなかった。

平壌に帰った主席はその足で党中央委員会のある部屋に入り、全国の学生・生徒や幼稚園児に与える冬服のサンプルをいちいち手にとってみて満足を表した。

そうこうしているうちに時間は流れ、退勤時間がかなり過ぎていたが、主席は帰宅を勧める幹部たちに、寒さが次第に厳しくなっていくが、平壌市のセントラルヒーティング問題がどうなっているか、気がかりだ、それに便益サービス施設と託児所、幼稚園の建設状況も確かめてみなければとして、平壌市中区域のある居住人民班に出掛けて、人々の生活状況を具体的に確かめたあと、執務室に帰り、遅くまで仕事を続けた。その夜主席は、**『交通運輸の緊張を緩和するために』**（1968年11月16日）と**『労働行政の諸問題について』**（1968年11月16日）の執筆を行い、夜12時もかなり過ぎた深夜に帰宅することになったが、2通の原稿をかばんに入れながら帰ってからこれらを仕上

げなければと言った。

主席が朝4時にはきっと起床すると言っていることから推して、その夜の就寝時間は2時間内であったろうが、これはその日に限られたことではなく、毎日の生活がそのように流れていたのである。そのたくましい精神力、革命に向けた情熱は、自然の生理的要求とされる必須の睡眠時間をも大きく短縮させていたのである

ある日曜日、側近の幹部から、せめて今日1日だけでもゆっくりくつろぐようにと勧められたことがあるが、主席は笑って、**「休息は特別なものじゃない。工場や農村を見て歩くこと以上によい休息がどこにあろうか。さまざまに複雑な問題が重なっている時に、一つの案件を処理し、次の案件を手掛けることになれば、新しい気分にひたれるから、それも休息だ。またいろいろな人に会って苦心していた難件の解決策を見つけたり、未だ念頭になかった問題に気づいた時ほどに喜ばしいことはない。これらも私にとってはすぐれた休息なのだ。だからほかにどんな休息が必要だろうか」**と言った。

活動そのものに安らぎを覚え、活動と結びつかない休息については一度として考えたことのなかった主席は、燃える情熱を持って生涯、国の繁栄と人民の幸福をはかり奔走したのであった。

主席はしばしば、今日仕事に取り組み、明日倒れることが起

こり得るとしても、いったん仕事に取り組んだら、夜が更けるのにも、食事の時間が過ぎていることにも気がつかずに、情熱的に働く気風なくしては、革命を進めていくことはできないと、幹部たちに強調していた。

主席の情熱は、たんに時間を短縮して働くということにとどまらず、苦しみに満ち、険悪を極めた道を乗り越えてきたことにもよく現れている。

祖国の解放を目指して険しい白頭の広野であらゆる辛苦に耐え、解放後新しい国づくりの草分けの道を歩んだ主席の長きにわたる革命的生涯に1日として安らかな日はなかったが、燃えるような情熱をもって試練と苦難を克服したのである。

1966年8月26日、この日の天候はひどく悪かった。海が大きく荒れ、海風はすさまじかった。けれども主席は人民の衣料問題の解決をはかり、アシの栽培地朝鮮西海のピダン(絹)島の視察に向かった。

この悪天候でピダン島へ渡るのは危険だから中止することと、党中央委員会政治委員会は決定したが、主席は、人民のために決心したことだったから、雨に濡れてもきっと行かなければならないとして出発した。荒れる海を乗り越えて島に上がったが、道はどろどろで、どこを踏んだらよいかとぐずぐずし、とまどっている随員たちに向かって主席は、形式主義をするん

ならわざわざ島へ来る必要がどこにあるのかと言い、ひどいそのぬかるみを先に立って歩いた。

朝鮮革命博物館には襟が古びて毛羽立ち、くたびれた軍人用外套が保管されている。主席が朝鮮戦争後、現地指導の日々に着用していた外套である。その外套には、危機に瀕した革命の運命、祖国と民族の運命を救い、人民に豊かな開けた生活をと願って、しばしの休息もとらず現地指導をやむことなく続けた主席の大きな労苦と人民愛がこもっている。

金日成主席は、生を終える最後の日まで祖国と人民のために自身のすべてをささげて、何代にわたっても遂げ得ないほどの功業を一代にして成し遂げた情熱家であった。

世界が主席を20世紀を代表する傑出した偉人だとたたえたのは、決していわれのないことではない。それほど主席が生涯を通じて残した業績は、いくばくかの美辞麗句や記念碑をもってしただけではとても表現し得ないほどに偉大なのである。

新しい朝鮮の建設に向けて初の気笛を高らかに鳴らして乗り出した主席の人民行き列車は、生涯の最後の日まで休むことなく走り続け、情熱にあふれた活動はいつ果てるともなく続いた。

ある日、一女性抗日革命闘士に会った主席は、ユーゴスロビアのチトー大統領が平壌を訪れた際、自分にもうそろそろ現役から退いて休むようにと勧められたと話して、**「チトー大統領**

が平壌市を見ただけでも戦時に廃墟に帰した都市を壮大華麗に建設したことがよく分かるが、一体また何事を続けてみようとしているのか、もう仕事を止めて休むようにと強く勧められました。私は今後とも仕事を続けるつもりでいます。革命を行う人間の活動欲にはきりがありません。人々のために大きな住宅を1軒建てたら、もっと大きな住宅を建てたくなるし、立派な物を作ったらそれよりもっと立派な物を作ってみたいと思うようになります」と語った。

主席は高齢とはとても思えないほど旺盛な精力を傾けて国事に取り組み、各階層の人たちに会いもして、その輝かしい生を締めくくった。世を去る前の数年間にも、抗日革命闘士や革命家の遺児たちを一人ひとり会って貴重な助言を行い、長くない余暇を利用して回顧録『**世紀とともに**』を執筆しながら、それを休息とした。

晩年、主席は心臓病をわずらっていた。生の最後の時期には眼病にかかり、1994年の新年の辞を行う時、目がよく見えないので、原稿を手にして苦労しながら読んだものだった。それで主席は目の手術を受けさえした。若い人もそのような手術を受けると1カ月ほど治療を続けるものだが、主席は手術の数日後、海外居住同胞孫元泰を接見し、ついで朝鮮少年団第5回大会に参加した少年少女たちと一緒に記念撮影を行った。

主席は世を去る前の数カ月間に全国農業大会と全国石炭工業部門従事者大会の参加者たちをはじめ多くの勤労者に会って綱領的な教示を行い、記念写真も撮っている。また逝去直前の1994年7月5日と6日には経済部門責任幹部協議会を招集して、社会主義経済建設で堅持すべき綱領的指針を示した。

主席が誕生80周年を迎えた1992年4月から世を去るまでの2年余の間、人民経済の諸部門と人民軍の諸部隊を現地指導した回数は、実に40数度に及んでいる。主席の負担はなんとも言えないほど重いものではあったが、主席はそれを誰も代行し得ない自身の果たすべき義務として、情熱を燃やした。

生涯のどの1日も変わることなく献身し続けた祖国と人民のための活動は国内においてのみでなく、世界の各国を訪問していた中でも変わりなく続けられた。主席は生前54回にわたり延べ87カ国を訪問しているが、その道のりは52万2460キロに達している。その間、主席が会った外国の首班や政治家、各界層の人士はとても数え切れないほどである。

外国を訪問した時ばかりでなく、朝鮮を訪れた外国の著名な人士たちすべてを接見し、それも日に数回を数える場合もあったが、そのどれとも長時間にわたって国内外の重要な政治上の問題について談話を交わし、必要な助言なども行った。その晩年に、平壌を訪れた元米大統領カーターに会って、朝米関係問

題をはじめ東北アジアと世界の平和と安全を守る上に役立てるための話し合いも行っている。

以上のように、生涯まれに見る情熱をもって革命を指導し続けた金日成主席の不滅の労苦により、朝鮮革命は一路前進を続け、人民の幸福は日と共に高まり続けたのである。

多情多感の楽天家

金日成主席は一生を楽観的に生きた楽天主義者であった。

主席がどの国の革命よりも複雑を極めた困難多端な朝鮮革命をいささかの脱線も、停滞もなしに勝利一路を間断なく推し進めることができた要因の一つは、あらゆる困難を笑って克服していく革命的な楽観主義に徹していたことにある。主席は革命闘争の途上で試練に遭遇するたびに、透徹した革命的楽観主義の精神をもって試練に立ち向かい、克服することを常とした。

主席の回顧録**『世紀とともに』**には次のようなくだりがある。

「人間の生理的年齢が生活をいかに楽天的に営むかによって左右されるように、一国の革命の成否や生命力は革命的楽天主義によって左右されるというのが私の見解です」

主席は一生の間にどの誰よりも多くの労苦をし、胸を痛めたし、喪失の苦痛も少なからず味わった。けれども主席は一度と

して悲観に暮れ、心の動揺を起こすようなことはなかった。ことに革命が試練に際会すると、常に勝利の確信をもって正面から突破してゆき、常に楽天的に生きてきた。革命が厳しい試練に直面するたびに、逆境を順境に、禍を福に変えながら積極的に勝利を収めてきた非凡な指導力もその革命的楽観主義に支えられていたと言えるのである。

抗日革命闘争においても、また苛烈を極めた祖国解放戦争においても主席は常に、人民がおり、忠実な同志たちがおり、革命の銃があるからには必ず勝利するという必勝の信念と楽観に基づいて一切の困難を克服したのであった。

主席によって展開された抗日武装闘争は事実上、歴史に類のない最悪の条件の下で進められた。頼るべき国土も正規軍の支援も、安定した銃後もない状態で「東亜の盟主」を自負する日本帝国主義大軍を相手どって正面からぶつかる戦いであった。一握りの穀物、1着の衣服を手に入れるにも血みどろの戦いを繰り広げなければならず、遊撃隊を討伐するとしてしつこく追ってくる敵軍と決死の戦いを繰り広げながら何日も休みなく行軍することもまれでなかった。飢えに苦しみ、夜も安らかに眠れず、日本の正規武力を相手にして戦ったのが抗日武装闘争であった。

それにもかかわらず、いささかの動揺も苦悩も知らず、主席

は常に楽観的であった。主席は隊員たちに常々、やがて国の独立を成就したら平壌のボラ汁に舌鼓を打ち、冷麺を腹一杯食べ、牡丹峰に登って大同江の景色も楽しもうと言っては、解放祖国の姿をありありと描いて見せたものである。また隊員たちが苦しみを覚えている時には、みんなで歌を歌い、踊りも踊って楽しい一時をすごすようにすることなども忘れなかった。敵軍と戦う日々が続く中でも歌を作って隊員や人民の間に普及し、演劇の台本を書き、隊員たちを舞台に立たせて公演し、駐屯地の村人を喜ばせ、隊員たちの士気を高めもした。主席はあの厳しい戦いが続く中でも常時全隊員のための軍・政学習を手配し、密林の中の月夜には娯楽会を催し、祝祭日には盛大な軍民交歓集会を開きもして、隊員たちを革命的楽観主義者に鍛え上げ、彼らの不抜の闘争精神を推進力として抗日武装闘争を勝利のうちに推し進めたのであった。

蛙料理に舌鼓を打ちながら祝った1940年のメーデーも、そんな日の一つであった。この日主席は戦友たちに、諸君、今日は蛙料理でメーデーを祝ったが、日本帝国主義を打倒した暁には、平壌へ帰って大同江のボラ料理で祖国の解放を祝おう、敵は今われわれをどうにかしてみようと躍起になっているが、われわれは絶対に屈服もせず、へたばりもしない、われわれみんなが明日への確信を抱き、朝鮮民族の自負、朝鮮共産主義者の

自負を持って日本帝国主義侵略者を打倒し、祖国の解放を果たすために力強く戦おうと、勝利の確信に満ち、楽観に燃えて力強く訴えた。

主席のこの革命的楽観主義に支えられて、抗日の闘士たちは千古の密林の中で素手で延吉爆弾を作り、敵に捕らわれて両眼球をくり抜かれ、断頭台の霜と消えながらも、革命の勝利が見えると声高らかに叫んだのである。未来への楽観、解放なった祖国で幸せに暮らせる日は必ず来るという楽観、これこそが不撓不屈の闘争精神を生み、祖国解放の歴史的大業を成就するもといとなったのである。

金日成主席は強大国アメリカの侵略に抗して戦ったあの厳しい祖国解放戦争においても、革命的楽観に充満して万難を克服し、勝利を収めた。

アメリカを頭とする追随国の侵略軍を迎え打ち、祖国の自主権と尊厳、寸土をも血潮をもって守らずにおかないとして戦った祖国解放戦争で、朝鮮人民が発揮した集団的英雄主義と楽観主義は、主席の楽観主義によって生み出されたものである。

廃墟に化した国の全土ですべてを新たに始めなければならない戦後復興建設の時期にも、またアメリカ帝国主義者の新たな戦争挑発策動があくことなく続いた時も、周辺から加えられる修正主義・日和見主義者や大国主義者の干渉をはねのけて社会

主義の建設を進めていた時も、主席の革命的楽観主義はいささかも衰えず、かえってより強く発揮された。

主席はロマンチックな感情を持って生活を楽天的に行った。

このことについて主席は、1992年3月と翌年1月、抗日革命闘士たちを前にして、次のように語った。

「私は天が崩れ落ちても這い出る穴はあるという胆力と必勝の信念を持って常に楽観的に生活してきたし、いまもなお楽観的に生活しています」

主席は楽観的な生活について特別な観点を抱いていた。主席は、朝鮮人民や軍人が楽天的に生活すれば革命的情熱が湧き、軍人の士気も労働者の生産意欲も高まり、誰もが多情多感になり、文化的に開けた人間にもなると見ていたし、戦争の勝利も決して軍勢の多寡や武装の優劣によって決まるのではなく、朝鮮人民や軍人の精神力、勝利を確信する革命的楽観により決定されると見ていた。

厳しい戦いが続いていた祖国解放戦争のある日、平安北道龍川郡下長里の党細胞会議に参加した主席はそのあと、党員は困難な時ほど余計に大衆の先頭に立って横たわる隘路や困難を果敢に突破し、生活を楽天的にしなければならないとして、こう続けた。

「勝利の信念と強い意志の持ち主だけが戦争の厳しい試練の

中でも悲観したり、尻込みすることなく楽天的に生きていけます。確信に満ちて楽天的に生活しながら困難を突き抜けていくのが、今日、戦うわが人民の気象であり、このような人民はいかなる力をもってしても屈服させることはできません」

困難が大きければ大きいほど生活をより一層楽天的、愉快に行わなければならないというのが、主席の一貫した立場であった。

ある日主席は、以前われわれが行った遊撃隊生活の厳しさはいかに苦しい困難な仕事をする労働者たちの生活とは比べるべくもなく大きかった、けれどもわれわれは遊撃闘争を続けていた時楽天的に生き、文化的に生活したのであり、そうすることで常に高度の革命的気勢を発揮し得たのだと語った。

主席の一生は楽天家のそれであった。主席は、われわれの人生体験によれば、歌は革命的楽観主義のシンボルであり、革命の勝利のシンボルであるとして、折に触れ、人間の生活には詩もあり、踊りもあり、歌もなければならない、人間の世界に詩もなく、踊りもなく、歌もなかったとしたら、生きる楽しみがどこにあろうかと言ったものである。

文学と芸術をたいそう愛した主席は、機会があると、革命的な文学・芸術作品を創作した。

世に広く知られたことだが、不朽の名作**『血の海』『花を売**

る乙女』『血噴万国会議』『ある自衛団員の運命』『城隍堂』などの劇作品、革命歌**『思郷歌』『反日戦歌』**などは、抗日武装闘争時代の創作で、古典的意義を持つ作品である。

主席は小説を読み、映画を見ることなども好み、歌もよく歌い、楽器の演奏も行って、楽天的に生活した。主席の好んで歌った歌謡は『革命歌』『海の歌』『チョンリマ先駆者の歌』『敵に死を』その他いろいろなものがある。

主席がある年の春、平安南道の現地指導中にあったことだが、夕方、主席の宿舎の庭で軽快なハーモニカの奏音が鳴った。随員の一人が、誰かと思って庭へ出てみると、なんとハーモニカを吹いているのは主席であった。それも単純な奏法ではなく、基本のメロディーにアルペジオを添え、トレモロなど多様な手法を使っているのが、耳に聞こえるのは器楽重奏のそれである。

彼は以前から、主席がオルガンを見事に弾くことは知っていたが、ハーモニカをこんなに巧みに吹くのを見るのは初めてだった。『遊撃隊行進曲』についで『人民主権歌』を吹き終えると、集まっていた随員たちが激しく手を叩き、もう1曲をと子供たちのようにせがんだ。

主席は、**「いや、もうこれくらいにしておこう。私が国家主席でも党総書記でもなかったら、毎晩わが家で音楽会を開**

き、みなさんを呼ぶがね」と言った。それでもせがむので**「私にだけ吹けなどと言わんで君たちも吹くべきだ。人間は楽天的に生きないといかん」**と笑って言った。

ある時は毎夕、誰かが吹く草笛の音に引かれ、深い想念に沈んで聞いていたが、主席の思索の邪魔になるとして一人の幹部が彼に注意したために、草笛の音が聞かれなくなった。主席はひどく残念に思い、その幹部を呼んで叱責したこともあった。

主席は元来、運動をたいそう好み、水泳にも興ずれば、テニスや卓球も上手だったし、狩猟も行って生活を楽天的に行っていた。けれどもそのような運動や休息をするひまを見つけることはなかなかできなかった。ごくまれに何かの運動や休息をするほどの機会に恵まれることがありはしたが、運動も休息も名ばかりで、それを利用して、革命の重要な戦略や戦術を構想し、あるいは現実の中で重要な問題点を見つけるための有益な機会としたのであった。とはいえ革命の重荷がいかに大きく重いとしても、主席は革命と生活に対する楽観や喜びを一時的にしろ捨てたり戸惑ったりしたことは一度もなかった。

このように主席は一生を楽観的に生き、朝鮮革命と世界の自主化偉業にわが一生をささげたのである。

1986年3月、平壌を再び訪れたコスタリカ社会党委員長に会った席で主席は、あなたは私が10年前も今も相変わらず情熱的で

若く見えると言われたが、ある国の元首もこの前私に会った時にたいそう若く見えると言ったとして、こう続けた。

「人間が老衰したくなかったら、悲観したり、うつうつとして日を送らず、いつも楽天的に暮らさなければなりません。

私はこれまでいかに困難な複雑を極めた問題が持ち上がり、折り重なる難関に立ちはだかっても、わが国のことわざにあるように、天が崩れても這い出る隙はあると考えていささかも悲観せず、うつうつと沈み込むようなこともなく常に楽天的に暮らしています」

金日成主席はこのように、一国の革命の成敗も生命力も、人間の生活の高さも革命的楽観主義いかんによって左右されるとの信念をもって、革命闘争も生活をも楽天的に行った、たくましい精神力の体現者であり、それゆえに、朝鮮革命は歴史の厳しい風波の中でも一度としてくじけることなく、常に若さにあふれて力強く前進し得たのであった。

偉大な平民

4

　金日成主席は、人間的な品位からすれば偉大な平民だったと言える。平民としての偉人、ここに主席の高潔な人間的魅力があるのである。
　主席は革命と建設の重荷を双肩に担って歴史と人民の前に巨大な不滅の功績を積みながらも、生涯数千数万の人たちと変わりのない平民としての生を送った。
　いついかなる場合も普通一般の人たちと全く変わりのない生活を続けた主席は、服装や食事はもとより、生活のどの面から見ても平民の暮らしと異なる点がなかった。
　主席は自身の利益をはかって何事かをしてみようなどと考えるようなことも一切なかった。生涯ひたすら朝鮮の革命と人民のために尽くしてきた主席に感謝の思いを抱いてきた朝鮮人民は、ただただ主席を自分たちの慈しみ深いオボイとして慕った。
　人民との間にいささかの隔たりも置かず一生涯平凡に暮らした主席を敬慕してやまない人民の心の中に、金日成主席は永遠に生き続けている。

虚心な思考と実践

金日成主席の平民的な風格で最も重要な側面の一つは、万事に慎ましいことである。

常に己を低め、謙遜を旨とし、わずかの特権も求めずに生きたことに、偉人としての主席の真価がある。

主席の非常な慎ましさこそ、朝鮮人民と世界の人たちに、主席の人間像を偉大な平民として認識させる結果をもたらしたのである。

主席は生涯自らを人民の子として低めて生きたが、その「人民の子」という表現に主席の謙遜心が凝縮して表現されているのである。

抗日武装闘争当時、東満州一帯で活動していた頃、北満州で戦っていた中国人共産主義者たちの要請で主席は、170余名からなる朝鮮人民革命軍遠征隊を引き連れて第1次北満州遠征（1934年10月～1935年2月）を断行した。北満州で猛烈な軍事・政治活動を繰り広げて遠征の政治的・軍事的目的を果たした遠征隊は、汪清への帰路についた。その途上、日本軍討伐隊の執拗な追撃に加えて酷寒と食糧難、戦闘による犠牲、病魔との戦いは、遠征隊にとっての一歩一歩が生死の境界を歩む道の

りであった。その時日本軍は、「われわれが100人死に共産軍一人を殺しても大きな所得だ。われわれは100人を補充しうるが、遊撃隊は一人も補充できない」として追撃の手をゆるめなかった。

そのような中で一般の隊員と同じように毎夜歩哨にも立っていた主席は高熱に冒され、天橋嶺のあたりで失神した。この重大事になすすべを知らず、16名の隊員たち（遠征隊のほとんどは北満州に残された）は主席の周りに疲れ果てて倒れていた。その時、意識を取り戻した主席は、朦朧とした意識の中で隊員たちを見回して、革命歌『反日戦歌』を作って隊員たちに教えた。主席の激励に勇気を取り戻した隊員たちは、高らかに『反日戦歌』を歌いながら死地天橋嶺をあとにし、老爺嶺の大崴子谷間に住む朝鮮人趙宅周の一軒家に出会い、しばらく老人一家の世話になった。その一家の手厚い看護で、主席は健康を取り戻すことができた。伝令兵からその間のいきさつを聞いた主席は改めて老人に**「ご老人、有り難うございます。お陰さまで命拾いをしました」**と丁重に頭を下げ、礼の言葉を述べた。

すると老人は、「いやいや、金隊長は天が下した将帥です。この丸太小屋で生き返ったのは、わしらの力ではなく、天命です」と言い、天命を下した天の神に感謝をささげてでもいるか

のようにじっと天井を見上げた。

主席は当惑して、**「ご老人、お言葉がすぎます。私を天が下した将帥などとおっしゃるのは大げさです。私は天が下した将帥ではなく、普通の農家に生まれた人民の子であり、孫です」**と言った。

老人はその言葉に驚いて、たとえ私は虫けらのように生きている人間ではあっても、金隊長が積んだお手柄についてはみんな聞き及んでいますと言い、孫子を残らず呼んで主席に丁重にお辞儀をさせた。

人民の子、たとえ短い言葉ではあるにしてもその言葉の中には、自らを人民大衆と共にいる人民の一人だとする素朴な思いをもって平凡な人民の一人として生きようと願う高潔な真情と、人民の一人として生きることに生き甲斐と人生の価値を見いだす主席の独特な人生観が垣間見られるのである。

人民の子という言葉には本来、人民の中から現れ、人民と共に生きる平凡な人間だという意味がこもっている。もちろん主席も平凡な農民の家に生まれ、人民の一人として生きた。とはいえ、常人とはとても思えない非凡な天賦の才に恵まれていた主席を、世間一般に見られる並の人物として見る人はどこにもいなかった。

国際的な政治分野で主席の名声は非常なものだった。スター

リンは主席を指して、最も若い東方の英雄だとたたえ、毛沢東と周恩来は共に、臨終に際して主席に、人類の自主偉業を全うするよう切願した。チトーは誰にも打ち明けたことのないわが深い心情を主席に語り、主席と結んだ人間的なきずなに格段の関心を抱き、臨終を前にしては非同盟運動の将来を託している。米国の元大統領カーターは、平壌訪問を終えて帰った時に行った記者会見で、金日成主席は米国の歴代大統領のうちで最も名望ある3人の大統領ワシントンとジェファソン、リンカーンを合わせた総合体よりもすぐれた人物だと語っている。

しかしながら主席は生涯たとえようもなく自身を低め、慎ましく生きた。

1994年4月、平壌を訪れた米国CNN記者団に会った主席は、**「世界の多くの人は私が古くからの政治家の一人であるとして、私に大きな関心を持っているようですが、私は他の人と別に変わりのない平凡な人間です」**とへりくだって語った。

主席はその回顧録の冒頭に**「私は、自分の一生が決して人並みはずれた特別なものだとは思っていない。ただ、ひたすら祖国と民族のためにささげた一生であり、人民とともに歩んだ一生であったと自負することで満足するのみである」**と述べている。

主席は常に、虚心かつ謙虚な姿勢で党と国家のために働いた高潔な品格の持ち主であった。

朝鮮労働党と共和国の尊厳はつまり主席の高い権威であり、その不抜の威力の源泉も主席の卓絶した指導力であった。それゆえに朝鮮人民は、一様に朝鮮労働党と自国を「金日成同志の党」「金日成朝鮮」と呼び習わし、そのすぐれた思想と指導力に朝鮮革命の燦然たる未来を見ていたのである。にもかかわらず主席は己をむなしくして党と国家のためにひたすら献身したのであった。全朝鮮人民と世界の進歩的人民は、主席を朝鮮労働党と共和国の最高の首位としてあがめたが、主席は自身も共和国の公民の一人であり、朝鮮労働党の一党員であると自覚して働いた。

主席は党組織から任務を与えられて、その実行状況を報告する際に、私も党員だから任務を受けて実行し、党に報告するのは朝鮮労働党員としての当然の義務ではないかとして、丹念に報告していた。

党内には党員の間に高低の違いがあるべきでない、そこに二重の規律は絶対に許されるべきでないと、主席は常に強調し、実際に身をもってその手本を示していたのである。

祖国の解放後、党中央組織委員会に党細胞が作られた時、主席は真っ先に自分の履歴書を作成して細胞に提出してお

り、朝鮮戦争のさなかに党中央委員会第3回総会が開かれることになった時、報告**『現情勢と当面の任務』**（1950年12月21日）の作成で一睡もできなかったにもかかわらず、朝、細胞書記に会って、その月の党費を納めている。

ある時、主席を補佐していた一女性が、主席が所属している党細胞の党費収納簿を開いてみて驚いたことがある。そこには主席の毎月の給金額とそれに相当する党費の額が記され、主席のサインがきちんきちんと入れられていた。主席の身近にいてその高潔な人格については熟知していると自負していたのであるが、一般の勤労者と全く同じように定額の生活費（給料）を貰い、それに相応した党費を納めていることに驚いたのである。それで一度思い切って、将軍も生活費を貰って暮らしているのですかと聞いてみた。その当然のことについて質問された主席は、あきれたように彼女の顔を見つめてほほと笑い、私も公民なのだから生活費を貰うのは当然じゃないかと言った。

主席は朝鮮労働党中央委員会総書記、朝鮮民主主義人民共和国主席の名で外国の政治家や各界層の人士と会う公式の席でも、自分は党員の一人として党から任された任務を果たしていると謙虚に話していた。

1984年6月23日、主席は旧ソ連のヤロスラフを経てキーロフ

に到着した。それは、50数日をかけて延べ2万4000キロの道を列車に揺れられて東欧社会主義諸国を歴訪して帰国の途についていた時だった。ここで熱烈な歓迎儀式が行われ、州党委員会第1書記をはじめ当地域の党および政権機関の責任幹部たちは主席に温かい挨拶を送った。主席は可愛い子供からささげられた花束を受け取り、列車が発車する間際まで彼らと一緒に駅の構内を歩いた。その時、州党委員会第1書記が、ここで1日休息して出発されるようにと勧め、このたび主席同志は実に遠い道を歩まれたと慰労した。主席は彼の誠意を快く受け入れてこう語った。

「私は遠路を遠しとせず、今回ヨーロッパの社会主義諸国を訪問せざるを得ませんでした。

私はわが党の決定に従ってヨーロッパの社会主義諸国を訪問したのです。党員は党の決定を無条件実行しなければなりません」

主席のヨーロッパ社会主義諸国の訪問は、党と国家の最高の首脳として行った公式の対外活動であった。それにもかかわらず自らを一般の党員として、誰も代行し得ない対外活動を党から与えられた任務として実行するその謙虚な人柄に、随員も外国人もただただ感嘆して止まなかった。

1962年10月8日は第3期最高人民会議代議員の選挙日であっ

た。主席はこの日、ある選挙区へ出掛けて、労働者たちに混じって投票することになっていた。

朝早く自宅にやってきた車に乗ろうとした主席は、副官に私の公民証は持って来たのだろうねと聞いた。副官と運転手は驚いた。公民証は国の公民であることを証明するものである。それを国家元首が持参しなかったとして、誰が主席を見分けることができず、投票にさしさわりが生じるだろうか。こう思って副官は、「選挙場に公民証を持参しなくても別条ありません。時間がありませんから、早く出発しましょう」と言った。

すると主席は、**「君、今君が言ったように、たとえ私が公民証を持たずに行ったにしても選挙に参加できないわけはなかろう。けれども私は選挙場に必ず公民証を持っていかなければならん」**と言った。自分も共和国の一公民なのだ、どうして国家が制定した選挙秩序の例外になれようかということであった。

主席は続けて副官に、自分はこれまで一度として自分を人民の上に立っている特別な存在だと思ったことはない、時間がちょっと遅れても、選挙場へ公民証を持って行こうと言った。こうして副官が持ってきた公民証を手にし、汚損してはいまいかと裏表に目を通し、それを内ポケットに入れて車に乗った。

主席は選挙場に到着すると、受付に公民証を出して確認を受

けた上で投票用紙を受け取り、投票を終えた。

このように主席は、国家の法と秩序の順守を公民の違えることとの許されない義務とし、いつどこにあっても率先して国の制度と秩序を守ったものである。

ある日、主席は卒業試験を行っている市内の一学校を前ぶれもなしに視察した。学校へ到着したのは午前9時半頃で、運動場には人影がなくひっそりしていた。

この学校は、かなり以前に建てられていたので、玄関が狭く、日光も射していないので、薄暗かった。そこには当直の腕章をつけた少女が椅子に腰掛けていた。彼女は客たちが誰であるかに気づかず、ただ立ち上がってお辞儀をした。主席は答礼してそのまま廊下に向かって1歩踏み出した。すると少女は受け付けてお入り下さいと声をかけた。随員たちはあわてた。彼女に耳打ちすることも叱ることもならずまごまごしていると、主席が感心した顔で彼女を振り返り、にっこりして、**「うん、もっともだ。もっともなことだ」**と言った。そして、彼女の机の前へ戻り、差し出された受付簿と鉛筆を手にして、日時と面会者、用向き、自身の職場と職位、姓名を記入した。

受付簿に目を通した少女はびっくりして主席を見上げ、また受付簿に目を戻した。そして我を忘れて、元帥様、と一声発し、あとの言葉を続けることができず、体を強張らせた。慕っ

てやまない主席にまみえた喜びもさることながら、主席であることに気がつかず、無礼にもほどがあったとして恥じ入った。随員たちも恐縮して、ただ顔を見合わせるばかりだった。

ところが主席は欣然として少女の頭をなでて、**「お前はなんてしっかりしているのだ。まったくしっかりしている」**とたたえた。

金日成主席は実に広くも深い知識と識見を所有していながらも、生涯より新しいことを学ぶべく努力していた。虚心に一つのことでも余計に学んで、思想と知識の塔を高々と積み上げるのは主席の一生の目標であった。

主席は、1963年9月5日、朝鮮労働党中央委員会第4期第7回総会で次のように述べている。

「誰でも虚心に学ばなければなりません。知らないということは罪ではありません。知らないくせに、知っているふりをするのが重大な欠陥です」

主席が生涯変わりなく卑下し、見逃すことなく克服すべく努めたのは、人々の中に見られる3つの病弊であった。それは無くてもあるふりをすること、愚かなくせに偉ぶること、知りもしないのに知ったかぶりをすることであった。中でも最も大きな病弊と見なしたのは、知りもしないのに知ったかぶりをすることであった。

主席は自己の力も能力も知らずにいるのが最も危険なことだと見なした。

何事であれ、成功を裏付けるカギは、自己の力がいかほどなのかをはっきり知ることである。値段にたとえれば、自分が50チョンに値するのか1ウォンに相当するのかを正確に値踏みすることである。そうすれば行動を開始するための準備を手落ちなく行うことができ、事に当たってはわが能力を遺憾なく発揮して目的を果たしうる。——これが主席の持論であり、幹部たちに常々強調していたことである。

主席は、知りもしないで知ったかぶりをしながら事を進めていると自負している人たちの指導活動を、当たり障りなく表現したら遊覧式であり、ありのままに言えば怠慢な行為だと酷評し、機会あるたびに幹部たちに、誰であれ知ったかぶりをせず、知らなかったら知らないと率直に言ってすなおに教わらなければならない、知らないことを人に教えてもらったとして自分の権威が落ちるのではないと常に強調していた。

主席が生涯腰を低めて学んだ教師は、人民大衆であった。

主席は、1953年3月1日、道党委員長協議会で行った演説『**道党組織に提起された当面の幾つかの課題について**』で次のように語った。

「幹部たちは常に人民大衆を教師と見なして彼らから虚心に学び、すべての活動を人民大衆に依拠して進めなければなりません」

主席の謙虚な人柄は、人民大衆を革命の同志としてだけでなく、あらゆることを知っており、すぐれた意見をいろいろと出す教師と見る確信に基づいている。人民大衆を革命の同志、知恵ある教師と見なす見地に立って、主席は生涯己を低くして彼らに謙虚に接し、彼らから学ぶべく努力していた。

主席にとって本は無言の教師であり、人民は知恵深い博識な教師であった。それで主席は、どこで誰に会っても、その話に注意深く耳を傾けた。それら個々の人たちから聞いたいろいろな要求や志向は、整然と体系化されて党と国家の路線となり、政策となって、革命と建設の指導指針として立派に生かされたのである。

このように金日成主席は、終生人民の中にあって己を低くして彼らから学び、わが生涯を輝かせた偉人中の偉人であった。

生涯人民の中で

1999年11月に行われたタイの『ネーイション』紙記者との会見でカーターは、「金日成主席が磊落で謙虚な人柄であったので、彼との談話はスムーズに運んだ」と語っている。

誰であれ主席に初めて会うと、その瞬間、心温まる思いに捉われては、わが心情を吐露せずにおられなくなるのは、主席の気さくな話しぶりに引きつけられるからである。満面に明るい微笑をたたえて誰とでも心安く対応し、気持ちよく通俗的な会話を進め、冗談やユーモアなども交えて話す、その特異な親和力は、決して単なる外交術、いわんや妖術によるものではさらさらなかった。それは、人々と話す時にたくまずして見せる親しみに満ちた物腰にあった。

言葉は人間の第一の交際手段であり、人間の知能、ひいては話し相手に対する見方や態度がどのようなものであるかをはっきりと見せるものである。

エンゲルスはつとに、「言語はほかならぬ他人のために存在し、また、ただそうすることによってのみ自分自身のためにも存在する実践的かつ現実的な意識である」と述べている。話をどのように行うかにより、話し相手に対する態度が外に表れ、

その人柄が評価されるとする指摘だと言えよう。

主席の話す言葉の一言一言には常に自らを飾らぬ真情がこもり、話し相手に対する尊重心と思いやり、信頼がこもっており、それに引きつけられて、人々は主席に心の底からなる親しみを覚えるのである。

主席の接見をなんとしても受けたいと切望してやまなかった人たちが、実際にその願望がかない、主席の前に立つと、すっかり固くなり、挨拶の言葉もまともに出せない人たちが多かった。そのことを百も承知している主席は、彼らの緊張をほぐすべく心を配るのを常とし、客を迎えて述べる最初の挨拶の言葉からして親しみに満ちた思いやりのあるものであった。

幹部たちに会っても、工場や農村の平凡な人たち、さらには子供たちに会っても、常に笑みをたたえて、自分から先に挨拶の言葉を掛けたものである。

その言葉も、みなさんご苦労さんです、みなさんに会えて本当に嬉しい、みなさんにはお変わりありませんでしたか、お元気でしたかなどと親しみのこもるものであったし、久しぶりに訪れてきた人には、こうして会えて本当に嬉しい、よくお出でになりましたと心からなる歓迎の言葉を掛けた。国事に忙殺されながらも、わざわざ時間を割いて客に面会しては、遅れて申し訳ありませんと謝ってから挨拶を受けたものである。

それがただの勤労者であれ、外国人であれ、相手に対する信頼感と尊重心、親しみをこめて温かく心のこもる挨拶の言葉を掛けるのは、相手の緊張をたちまちにしてほぐし、支障なく対話を進めうるようにする主席に特有な対話の仕方であった。

人情味と親しみのこもる挨拶の言葉によって相手の緊張をほぐして本題に入ると、今度は興味深くも通俗的な話しぶりで人々を引きつけ、心服させる主席であった。

個々の幹部や勤労者たちを相手とする談話はもとより、党や国家の重要な会議などで行う主席の言葉も例外なく通俗的ながらも味わいの深いものであった。とりわけ労働者や農民、インテリ、アーチストなど広い層の人たちと話をする時は、それぞれの精神世界に溶け込んでいるかのような、通俗的な興味津々とした話しぶりで対話を進めるので、この方は本当に一国の元首だろうかと、聞く人たちの首をかしげさせるほどであった。

興味深くも通俗的な話しぶりだということは、分かりやすく、味わいに富み、誰にでも理解できるという話し方である。そこには生き生きとしたいろいろなたとえもあれば、明快な表現を駆使しながらも、その表現は人々の日常会話で頻繁に使われているものであり、しかもその平易な話し方で生活と革命闘争の道理を誰にでも分かりやすく理解させうる話し方である。

主席は、世界が一致して認める偉大な思想家、傑出した政治家であったが、労働者や農民に会っても、少年少女に会っても、また幹部たちに会っても、その興味深くも通俗的な話し方は一貫していた。人々が通常使っている用語を駆使して話すので、聞く人は一切つかえることなく、その趣旨・内容を容易に理解し得たのである。

1972年5月、主席に会ったカーネギー財団の一研究員が、「金日成主席はたいそう気さくに質問に応じ、協調的で分かりやすく答えてくれた。金日成主席は温かく、人を引きつけ、強く魅了する人物であった」と評したのはゆえなきことではない。

主席のその興味深くも通俗的な話し方の特徴は、生き生きとしてぴったりしたたとえと明快な表現力であった。思想・理論を定立する場合も、政策的な問題を提起する場合も珠玉のような名言やたとえを随所に混じえて、人々との対話を進める際も、彼らが常用する大衆用語、生活用語をもって話し、話題上の問題を生き生きと解き明かしたものである。

人間の自主性が実現した理想社会を、すべての人民が絹の服を着て、白米のご飯と肉汁を食べ、瓦葺の家に住む社会であると定義したことや、人民経済の先行者である鉄道運輸は国の動脈であると表現したことなどはみな、豊かな人民的用語を常用

して人々との会話を進める主席が最初に使用した生き生きとした表現の一部である。人々の健康や長寿について話す時は、60青春、90還暦と表現し、党生活について話す場合は、党員が党生活から逸脱するのは幼児が母親のふところから抜け出すことと同じように危険なことだと平易に表現している。また、幹部たちの活動作風について話した時は、猿が塀を乗り越える時に自分の技を信じて闇雲に飛び越えようとして転落する憂き目を見もするが、大蛇は安全いかんを確かめながら塀を乗り越えるから墜落するようなことはないとして、老練、慎重に活動するよう強調していた。ほかにも、幹部たちに何かの任務を与える場合や欠陥を指摘する場合などに、単に任務を与えたり叱責するのではなく、興味深い昔話や格言をもって任務の遂行方法を教え、欠陥も自らが悟って是正するようにしたものである。

生みの親の心情で人民の生活問題を気づかっていた主席が、1959年3月13日、鏡城陶磁器工場を訪れた時のこと。生産状況を確かめてみながら工場の諸職場を見て歩いていた主席は、選別職場で1枚の皿を手に取ってじっと見つめた。以前に比べると製品の質はいくぶん改善されてはいるが、まだまだ分厚く、色も真白ではなく、規格も一定していない。この品質の劣る製品を見つめながら、人民によりよい食器をと念ずる主席にとって、胸の痛みを覚えるのは当然だった。

職場を後にし庭へ出た主席は、見送りに出てきた成型工の娘たちに向かって、君たちの作った陶磁器は君たちのようにきれいでも美しくもないのが疵だ、若い娘たちが朝起きて顔を洗ったら鏡を見ながら眉ずみを塗り、化粧をするように、製品づくりに心をこめてきれいに仕上げなければいけないと、笑って言った。まわりの人たちもそのユーモアたっぷりの指摘に我を忘れて笑った。

工場を後にする時主席は、陶磁器づくりは繊細で精密な技芸を要する芸術だとし、今後製品の質を3点から5点に引き上げることができるだろうかと一同を見回して聞き、確信に満ちた労働者たちの返答を聞いて彼らに別れを告げた。

3点は可で、ようやく落第を免れる成績である。けれども主席は一言の叱責も行わず、愉快なたとえを用いて、陶磁器の生産をじかに行う女性労働者たちの自覚を起こすにとどまったのである。

その後陶磁器の品質がかなり高まった頃、再び工場を訪れた主席は技師長に会って、家に幼い子がいるかと聞き、**「われわれが親の務めを立派に果たすには子供用のお碗をもっとたくさん作らなければならんようだ」**と言い、製品の種類と量を一段と高めるよう力づけた。

批判や追及ならぬユーモアを混じえたたとえを用いて力づける主席の言葉に、工場の幹部や労働者たちは大きな良心の呵責

を受け、それ以来陶磁器の品質を高め、製品の種類を増やす上で大きな成果が達成された。

1964年7月16日、昌城郡薬水中学校の教員たちが主席の臨席を得て公演を行った時、一人が大きなミスをして曲が崩れるという出来事が生じた。最上のレベルで行うべき場で失敗をしでかしたのだから、大変なことになったと学校の幹部たちはひどく狼狽し、なすすべを知らなかった。ところが主席は拍手を送り、**「熱心に取り組めば、今後より立派な公演ができる。至誠あれば天に通ずるという言葉もある。初め半分ではないか。立派な公演だった」**として教員たちを励ました。

公演後休憩室でも主席はまた、公演は立派だったとたたえ、何よりも重要なことは情熱であり、総力を打ち込んで実行することだ、熱心に取り組めば、発展を続けることができると、改めて教員たちを励ました。

「至誠あれば天に通ずる」「初め半分」「重要なことは情熱であり総力」などという言葉は短いものではあったが、これらの語句はいずれも、技量よりも熱意こそより重要であり、熱意さえあれば、必ずやすべてがうまく行くという期待と信頼、今はまだ完全ではないが、事を始めたことに意味があるとして、熱意をたゆまず高めていけば、やむことなく上達するという激励がこもっていたのである。

金日成主席の興味ある通俗的な言葉の特徴は、ユーモアと日常生活に結びついた話を混じえて談話を興味深く進めることである。

興味津々と通俗的に話を進める主席の話し方の魅力は、冗談や笑い話、日常生活のありふれた実例を巧みに駆使して談話の雰囲気をなごやかなものにならせ、人々が気持ちよく話せるようにする親和力にある。

いつも粗末にすぎている食卓に鶏肉や豆腐のようなものが添えられていると、おや、今日は祭日だったのかなと冗句を飛ばして人々を笑わせもすれば、思慮分別のないおっちょこちょいな鳥がコウノトリの歩き方をして、とどのつまりは股が裂けて死んでしまったという笑い話をして人々を楽しませては、人はみなしっかりした心構えをもってわれわれの方式で生きるべきだとする教訓を垂れもしている。またある学校の新入生たちの教室へ入ってみた時には、あるいたずらっ子の膝小僧の擦り傷を腰をかがめてなでながら、どの「戦い」に参加して「負傷」したのかねと言って、まわりの子たちと一緒に面白そうに笑ったこともある。

主席は、外国人や海外居住同胞と談話を交わす時は言うまでもなく、外国の元首に会うときも、非常な親しみを誘う冗談や笑い話をしていた。

祖国の解放を間近にしてソ連軍の極東訓練基地にしばらくいた頃、蛙料理を食べたソ連軍将校が、そのことが妻に知られたら大変なことになるとそわそわしているのを見て、主席は彼の妻に向かって、自分は特別な人たちのみが食べる「天上のチキン料理」をご主人にもてなしましたと言い、その鳴き声まで出して見せて、場内を爆笑させたこともあった。中国の芸術団を接見した際、朝鮮の金剛山8天女の伝説を話した主席は、とても残念そうに、みなさんの中にチョンガーがいるなら天女に会うべく金剛山の八潭へ行ってみたら良かったろうにと言って、客たちを笑わせた。また自身の80歳の誕生祝いの宴会で、外国の首班たちとテーブルを囲んで大皿盛りの冷麺に舌鼓を打ちながら、この食べ物は昔、封建官僚がひと皿に盛られた冷麺をキーセンと共に皿の両側に口を当ててすすったことに由来したものだと言って、宴席を大笑いの渦に巻き込んだこともある。

かつて、外国のかなり多くの首班に会った前例のある自民党衆議院議員であり、郵政大臣を務めたこともある久野忠治は、「一国の指導者の立場にあれば、談話を行う際も、自国の権威と威力を背景にして話をするのでその内容は極めて公式的なものにすぎず、行動は堅苦しく、見栄えを張るのがごく普通だ」と言ったことがある。彼の言葉からしても、外国人を相手にする場合の国家指導者の対話の一般的な傾向がどのようなもので

あるかが推し量られるであろう。

ところが主席は、会ったほとんどの人に人間的な親しみをこめて接し、人情的な話をするのが通例であった。

相手の生活を知らずには、その人物を推し量ることができず、生活に無関心では人間について語ることができない。それゆえに主席は、人に会う場合は、実務的な見地よりもまず人間的な立場から対話を始め、実務的な関係よりも人間的なきずなを結ぶことに大きな関心を抱いていたのである。

主席のこのような志向は、自ずとその対話が生活的なものへと流れるように働いた。主席は生活的な雰囲気に包まれ、生活上の問題を題材にして談話を進めることを快しとした。

幹部たちに会うと、その活動状況より先に、相手の健康状態や家庭生活状況について聞き、勤労者に会っては、年齢や故郷、両親のことなどをいちいち尋ねたものである。工場の寮に寄ると、洗濯はどうしており、沐浴はどうしているのか、部屋は寒くないかなどと尋ね、住民の家庭を訪れると、水道の水の出はよいか、薪炭は切らしていないのかと聞いてみるのが常だった。

主席は外国人を接見した席でも生活上の問題についてなごやかに会話を進めることがよくあった。

ある年、ソ連を訪問して当国の幹部たちと宴席を共にした

際、あなたの国の人たちは辛い食べ物を食べているのかと聞き、キュウリのキムチを食べ、高麗人参酒も飲むようにと勧め、ソ連人は魚料理を食べる前にはワインを飲む習慣があるそうだから、一杯飲もうと言った。そして、人間は長年付き合った人がよく、衣服は新しいものがよいと言い、朝ソ友好を強めるべく30年間働いてきた一ソ連幹部を名指して私の旧友だと深い情をこめて言った。

生活に関する主席の話題は、人々の暮らしや人情関連の問題から、外国人の風俗や習慣、食生活などに至るまで広範であった。

主席は麗々しい言い回しには別して関心を向けなかった。簡単明瞭ながらも思想がはっきり言い表され、大衆の心を動かす通俗的なその言語表現はいくら聞いても飽きが来ず、いつまでも強く引きつけられるのである。そういうわけで、主席の話に聞き入る人たちの表情はいつも明るく微笑が漂っていた。

主席は、その誰であれ、いささかの間隔も置かず、打ち解けて付き合った。朝鮮のどの幼稚園や託児所にも、見る人の心を強く引きつける一幅の油絵が壁に掛かっている。国の未来である幼い子供たちの中にいる慈愛に満ちた主席の姿を描いた美術作品である。

公園のベンチに腰を下ろし、明るい微笑を漂えている主席の

周りに可愛い子供たちが群がり、ある子は主席の中折れをかぶって喜んでおり、またある子は両腕を主席の首に回して主席に何か耳打ちしている。その子たちはみな自分たちの慈父にまとわりつき、幸せに満ちているのである。

一国の元首と幼な子たちの間にたくまざる素朴ながらも熱い情が行き交う場面を描いたこの油絵は、主席と子供たち、ひいては人民との間の血縁的な関係をまざまざと見せている。それは、人類の歴史にかつてなかった人倫道徳と政治倫理、人間的風格の新しい境地を拓いた傑出した偉人を描き上げた歴史上最もすぐれて美しい絵画として世人に称揚されている。

興味深くも通俗的な話し方の中に沁みている親しみに満ちた温かい情が言語の美だとしたら、人々と常に分け隔てなく溶け合う気さくな品性は行動の美である。

主席は生涯、人々との間にいささかの間隔も置かず、差別をすることもなく活動し、生活した。そのような生活態度は、人民を天のように見なす観点を信念としていたがゆえに自ずと現れたのである。

1971年10月、東京都知事美濃部亮吉が平壌を訪れた。

朝鮮の処々を見て歩き、やむことなく変貌していく社会主義朝鮮の姿に大きな感銘を受けながらも、ただ一つどうにも合点のいかないことがあった。それは、主席が工場や農村のいずこ

を問わずどこへでも一切危険を覚えずに見て回っていることだった。日本の首都東京都の知事であった自分は東京都の最高の実権者でありながらも、都内の視察さえも危険が伴うとして何かと制約を受けていたし、平壌を訪問すべく空港で旅客機に乗ろうとして、右翼暴力団の攻撃を受けそうにさえなった彼としては、当然の疑問だったろう。

そんな訳で、彼は主席にどこへでも気ままに出掛けて大丈夫ですかと聞いてみた。

主席は笑って、朝鮮労働党の商工業者たちと古くからのインテリに対する政策について説明し、全人民のための善政をしいているのだから誰を恐れることがあろうか、私はどんな所へも心置きなく出掛けている、労働者の住宅建設場へも行き、工場や農村へも行って、一晩休んでくることもあると話した。

心からあがめ尊んでいる人民であるからこそ、主席は生涯人民の中で過ごし、彼らとわだかまりなく付き合ったのである。いつだったか、農村を視察していた時、田んぼの草取りをしていた農民たちが走ってきて、木陰で休むようにと勧めたことがあった。すると主席は**「木陰には田畑で汗を流しているみなさんが座るべきです。私はこちらの方が結構です」**と言って、熱い陽光の降り注ぐ日向の地面に座って彼らと語り合った。

このように主席は、革命の直接の担当者である人民大衆を、生死を共にする貴重な革命の同志、自身の依拠すべき、かけがえのない人たちだと見なして、彼らと親しむことに生の喜び、生き甲斐を求めたのであった。

主席は人民に会い彼らと共に過ごしたくて、時や場所にこだわらず常に人民の中に入り、彼らと親しんだ。

人民を天のように見なし尊ぶことが人民と打ち解けて過ごす上での精神的な基礎であるなら、人民を分け隔てなく遇するのは、主席が固く信じていた革命遂行のカギであった。

主席は信頼すべき人民の仲間であり、支持者であった。それゆえに人民の中に入り、彼らと共に過ごし、活動する時間をとりわけ重視し、特別に好んだのである。

主席の誕生55周年を祝うべく、平壌を訪れたインドの『インディアン・タイムズ』紙主筆が、現地指導中のある地方にいる主席に招かれた。

主筆と挨拶を交わした主席は、私は誕生祝いはほとんど避けている、今回も平壌にいたら大勢の人が私の誕生日を祝って訪ねてくるだろうから、それを避けることを兼ねてここに現地指導にやって来ているとして、**「私は、平壌で私の誕生日を祝う祝宴に参加することより、労働者や農民の中にいることの方がずっとよいのです」**と言った。

このように誕生祝いを避けて地方へ出掛けるのはまれでなかった。

ある時は、地方の現地指導中に国家の祝日を迎えることになったが、平壌に帰る計画を取り消して、地方人民の中で祝日を祝いもした。

1957年10月10日は朝鮮労働党創立12周年記念日であったが、主席はこの祝日も平安北道の現地指導先で迎えた。

当時、主席が自分たちの村に来、今川向こうの岸辺におられると知った東州中学校の生徒たちが、授業が終わると一斉に外へ飛び出して川岸に群がり、川向こうの主席に向けて万歳、万歳を叫んだ。

主席が手を振ってくれると生徒たちは、岸につながれてあった小舟に乗り、それが岸に着くのも待たずに飛び降りて岸辺に上がり、主席を取り巻いた。

主席はそんな子らに向かって、授業は終わったのか、勉強は熱心にしているのかとやさしく聞いた。子供たちは主席のその親しみに満ちた言葉に勢いづいて、濡れ鼠の身なりも構わず、その腕をつかもうとして押し合いへし合いした。

その有様を見かねた随員の一人が、「おい、みんな、いい加減にするんだ」と大声でたしなめた。その声に驚き、子供たちは我に返ってあとずさりした。

すると主席は**「そんなに叱るものではない。忙しくて学校へ行けなかったのに、私に会いたくて駆けつけてきたこの子らに向かってなんたることを言ってるのだ」**と叱責し、みんな近くへ来るのだと声をかけた。

　また子供たちに取り囲まれた主席は、大きくなったら何をするのかねと一人ひとりに尋ねては彼らの志望をたたえ、日が沈む前に写真を撮ろうと言い、みんなと一緒に芝生へ行って座った。子供たちは主席の少しでも近くにいようとしてもみ合った。

　写真を撮るにも、主席が彼らの中心に位置していないので、とまどっているカメラマンに向かって主席は、中心にいる生徒に焦点を当ててシャッターを切るとよい、写真に子供たちの顔がはっきり現れるようにし、日が沈みそうだからぐずぐずするでないと促した。

　この日、子供たちに囲まれて撮った記念写真は、朝鮮革命史における次世代寵愛の永遠のシンボルとして貴重に保存されている。

　主席は、自分を補佐する人たちに、一つ特に強調しておきたいことがあるとして、自分が人民とざっくばらんに付き合うのを遮らないでほしい、工場へ行けば労働者たちと溶け合ってなんでも話し、農村へ行けば農民と向き合って座り、いろいろのことを語り合うわけだが、このようなことを遮るのはよく

ない、人民は私に会いたいと思い、私は人民に会って話したいと思っている、私は人民に会うことを喜びとし、人民も私に会うことを幸せとしている、もちろん、みなさんが私の身辺の安全を気づかっていることは分からぬわけではないが、それは無用な不安だ、わが国の人民は心からわが党を信頼し支持しており、私も人民を固く信じ尊敬していると語った。

人民に親しみ、人民の中で過ごすことを大きな楽しみとしている主席は、あの厳しい朝鮮戦争のさなか、ある地方の見すぼらしい農家に何人もの模範戦闘員を呼び、**「狭い所で体を寄せ合って座っていると、いっそう親しみを覚えるものだ。さあさあ、もっと近くに出て座りなさい」**と言って側近くに座らせて彼らの話を聞き、そのあと娯楽会を開いて、自らも歌謡『思郷歌』を歌ったこともある。

最高司令官が軍の最下層の兵士たちの前で歌った歌は、単なる感情、興趣のおもむくままに歌ったものではなかった。平凡な兵士たちとの間に隔たりを置かず、彼らを官職を超越した自分と同じ人間として差別することなく親しみたいとして歌った、真情のこもる歌であった。

ある時、大同江のトゥル島へ渡り、そこで野良仕事をしている農民に会った主席は、彼と挨拶を交わしながらその手を取ろうとした。すると、農民はあわてて手を引っ込め、それまで積

み肥をいじくっていた手をパジに当ててこすろうとした。ところが主席は、大丈夫です、農民の手はそんなのじゃありませんかと言って、その手を取った。

主席の革命活動状況を撮った写真は無数であるが、そこにはいろいろな層の人たちと並んで撮ったものもかなりあり、中でも人の目を強く引くのは主席が一人ひとりと腕を組んで撮った写真である。農民安達守と並んで撮った写真もその一つであり、信念と意志の化身である李仁模と撮った写真も、車椅子に座っている彼の肩にやさしく手を当てて撮っている。崔栄玉姉妹のような親のないみなしごたちと偶然に出会ってその話を親切に聞き、彼女たちの手を強く取って写真を撮り、また三つ子が生まれすくすく育っていると聞いて、嬉しさのあまり、その子らに会って、わが孫子のように抱きしめて撮った写真もある。

主席のあまりにも近しく対応してくれるその人柄に、自分たちと全く同じ普通の人だろうと思い、単なる仲間と見なして付き合った人たちもいた。

抗日武装闘争初期の遊撃区時代、あまりにも人々と分け隔てなく付き合っていたので、主席が司令官ではなく、遊撃区の事務長だろうと思い込んでいた人たちがかなりいたし、祖国の解放直後、ある大衆食堂で、他の客たちと全く同じように振る舞う主席に、ある農民がなれなれしく、たばこを1本くれないか

と要求した話など、いろいろな逸話は、主席の革命活動史においてのみ見られた特異なものである。

国籍や肌の色、言語の異なる外国人に対しても、主席は儀礼上の対応には別して意に介せず、親しみをこめ、悪意のない態度をもって接するのを常とした。客が一国の首班であれ、普通の人士であれ、一切区別することなく、同じように遇したのである。

主席がモーリタニアを訪問することになった時、当国の大統領は戸惑いを隠せなかった。

彼は金日成主席を公式に招請したものの、この後進国、すべてが困難な国に主席が本当にやって来るだろうとは思っていなかった。迎賓館もなく、まともな会談場や宴会場もない自国に世界的な名声を博している主席を迎えることになったのだから、どうしたらよいか見当がつかなかったのである。フランス人の大統領夫人も頭をかかえこんでいた。

ところが、彼らの困境は主席の一言で霧散してしまった。主席は大統領夫妻に向かって、私は元来テント生活を好んでいる、パルチザン闘争を行っていた頃、15年間もテント生活を行った私が、国家主席になったからとしてテント生活ができないなどと言っていられましょうか、と笑って言った。

主席が自分たちの生活風習を意に介せず、それに準じた接待

を喜んで受け入れてくれたことに気をよくした大統領は、宴会も自国の風習にのっとって準備した。宴席で大統領は、主席の楽しげな様子に有頂天になり、羊の肉は脇肉が一番美味ですと言って手を洗い、その手で脇肉をもぎ取って主席に差し出した。主席はその肉を喜んで口に入れた。

モーリタニアでは、屠殺した羊の内臓を取り出して、腹の中へ米を詰めて丸焼きにし、それを食卓に乗せて、人々がその肉を手でもぎ取って食べる食生活風習があった。客が食卓に加わる場合も、主人側の人が自分の手でもぎ取って客に与えるが、主人がそのようにして与えた肉を客が何度か食べて初めて、主人と客の間に心からの親しみが生ずると言われている。

朝鮮の食生活風習にはそのようなものはないが、主席は大統領が何度も手でもぎ取ってくれる羊肉を楽しそうに食べたのである。

主席が丸焼きの羊肉を食べたのは、その時が初めてではなかった。アルジェリアでも、またモンゴルでもあったし、ブルガリアを訪問した際は、人々の制止を押して、当地方の人たちが賓客を歓迎して行う風習を快く受け入れて、セイヨウミザクラが一杯入っている大きな二つのかごを吊るした天秤棒を肩にかけて、セイヨウミザクラの畑で当地の人たちと並んで記念写真を撮りもしている。

外交上の慣例や手続きはどうであれ、訪問先の伝統や風習を尊重し、彼らとの心からの親交を重んじていたがゆえに、主席は行く先々で当地の人たちと親しみ、外国訪問の目的をスムーズに果たし得ていたのであった。

このように朝鮮人民の前でもまた外国の友人の前でも、人間的な側面をとりわけ重んじ心底から対応していたので、金日成主席の尊敬と権威、名声はいやが上にも上がり、偉人としての風格は世の人たちの胸にますます深く刻み付けられたのである。

素朴に流れた一生

日本帝国主義植民地支配下の朝鮮で出版されていたある雑誌は、1936年8月末から1937年初めまで朝鮮人民革命軍の密営に4カ月余の間過ごし、ここで金日成主席にたびたび会った愛国的な地主金鼎富の会見記を掲載しているが、そこには次のような内容があった。

「長身で太い声、なまりからして故郷は平安道と思われる。予想外にあまりにも若い血気盛んな30未満の青年。満州語に精通。隊長らしいところはなく、服装や食事まで兵卒と変わらず、起居、甘苦を共にするところにその感化力と包容力がうかがわれた」

日本帝国主義者の厳しい報道管制の下でも、主席のすぐれた

人品についての金鼎富の印象はかなり正確に表現されていると言えよう。

主席はこの記事に見られるような質素で慎ましやかな生き方を生涯変わりなく続けた。ここに、主席の素朴な人間としての気高い人格の今一つの特徴があったのである。

主席は早くから、質朴な生活が人間の人格の形成と革命闘争におけるその価値と意義の重大さをどの誰よりもはっきり認識していた。

人間の真正な生活についての主席の見解は、生活が質素で慎ましやかであればあるほどよいということであった。生活が質素で慎ましやかであればあるほど人格が高まり、大衆の尊敬と愛をより深く受け、常に大衆と溶け合って活動し、生活していけるということは、主席の自らの生活と活動の中で実証した貴重な所産であった。それで主席は、常に幹部たちに質朴に生きるよう強調し、自らがその手本を示したのである。

そうした主席の生活は、国の解放前も解放後も、また人民の生活が豊かになりつつあった時代にも、高齢に至っても一向に変わりなく続いた。そのような生活の基礎は、主席の清廉潔白な天性であった。

主席は革命の道に乗り出した初期から、革命思想と不屈の闘争精神を革命家の必須の品性であると見なしていた。主席が一

生の間に出会った限りなく多い同志たちの中でも、そのような思想、精神に徹した人物は、朝鮮人民革命軍の代表的な給養担当官金周賢であった。

人民革命軍に入隊して以来、戦死するまでの全期間、連隊長に昇格してからも、革命軍隊員の生活を支えるべく奮闘した彼は、病院にいる傷病兵のために山に登り蜂蜜を取っていた時、日本軍討伐隊に襲われて壮烈な最期を遂げた。

死後彼の背負い袋を開けてみると、中は空っぽであった。どの隊員たちにもある予備の履物も、戦死する前の日に履物の破けた戦友に与えていたので、それもなかった。彼が給養担当官時代から隊員たちのために手に入れた穀物や服地、数千足もの履物などをすべて積み上げると、ちょっとした小山になるほど膨大なものであったが、彼の遺品は空っぽの背負い袋だけであった。

主席は、その背負い袋をつかんで涙を流してやるせない思いに駆られた当時を振り返り、革命家の財宝、革命家の人生観について、回顧録**『世紀とともに』**で、次のように述べている。

「幸せを願うのは人間の本性である。この世には拝金主義者が多い。そのような人の目から見れば、金周賢は財産のかけらもない無産者だったと言えよう。しかし、私は金周賢こそまご

うかたなき富豪だったと思う。なぜなら、彼は生の最後の瞬間まで、億万の黄金にも替えがたい高潔な思想と精神を身につけていたからである」

気高い思想と魂が革命家の最大の財宝だということは、主席の生涯における不変の見解であった。この特異な観点、人生観の持ち主であった主席は、両親から引き継いだ思想的・精神的遺産を他のいかなる物質的な財宝よりも比べようもなく大きくも貴重なものとして、一生を清廉潔白に生きたのであった。

主席は金銭や財物は人民の福祉にとって有益なものだと見なしながらも、自分自身の生活と結びつけて考えたことは一度としてなかった。

ある時、主席が職務関連の費用を自身の生活費から割いて負担していることを気にした関係幹部が、生活費に添えて活動資金を差し出したことがあった。ところが主席は、国家の財政規定に背くべきでないとして、それを返納するようにした。また、ある日の閣議で、総合大学総長の生活費が首相のそれより高いことが問題視された時、主席は自分の職務が総長の職務と何のかかわりがあるのか、総合大学総長は科学者でもあるのだから、それ相応の生活費を貰うのは当然ではないかと指摘して、討議を中止させている。

重大な国事を担当し、朝鮮革命の遂行に精魂を傾けていた

主席の労苦はたとえようもなく大きかったが、生活費を高めようとの意見が持ち上がるたびに否決するのが常だった。

主席は幼少年時代から金銭とは無縁であった。父親からも、また母親からも小遣いなるものは一度として貰ったことがなく、ノートや鉛筆などの学用品は母親からじかに与えられたものだけだった。主席が革命活動を志してわが家を後にする時、母親は、賃仕事の洗濯をして、１銭、2銭と爪に火を灯して蓄えた20元を取り出して、これは暮らしに当てず、お金がなくてはどうにもならない苦境に陥った時に使うようにと言って手渡したのである。

人間が金銭や財物に目がくらむと、党も祖国も人民も眼中から消え失せ、甚だしくは親兄弟も捨ててかえりみない人間のくずになると主席は考えていたし、実際に長年の貯金を人民の福祉に役立てればとして差し出したこともある。

1993年11月、平安南道平原郡元和協同農場で年間決算分配集会が盛大に開かれた時、集会では戦後の社会主義農業協同化が進められた当初から名誉農場員に登録されていた主席に、10数年間貯金してあった分配金の総額10万2485ウォンを差し出す決定を行った。あの厳しい戦争のさなか、当農場の農民の中に混じって春の種まきを行った時から農場の進むべき道をいちいち教え、農場の経営を援助し続けた主席の労苦に対する感謝の表れであった。

報告を受けた主席は、10万ウォンだ、10万ウォンなら金持ちだな、協同組合を組織した当初は農民たちに一双の布団すらまともなものがなかったのだと言って、「こんなに多い分配金をどこに使おうか」というある歌詞を口ずさみながらたいそう喜んだ。そして、自分も金持ちになったのだから、一つ祝儀を奮発しなくちゃならんとして、そのお金で農場にトラクター、トラック、農業機械を買って贈ることにしようと言った。

その数日後、責任秘書を呼んで、農場へ贈る農業機械の値段を確かめてみた主席は、**「10万4300ウォンだと？それなら私の貯金より1800ウォン余り多い。困ったことになった。私にはお金がない。責任秘書同志が立て替えてくれまいか。この次の分配金から返済するからね」**と笑って言った。

こうして、総22台のトラクターとトレーラー、トラックが、4キロの村はずれまで出迎えた大勢の農民の歌や踊りの歓迎を受けながら元和協同農場に到着した。

この感動的な話を聞いたヨーロッパのある政治家は、「私は、この世に一国の領袖が名誉農場員になり、配当金を貰ったという話を聞いたのは初めてだし、その配当金を投じて農民のためにトラクターやトラックを購入し、農場に贈ったということも聞いたためしがない。人類が農業を始めてから数万年になるが、実にこれは伝説のような話だ」と言った。

主席は国家や人民の財産に関する問題や日常生活上の問題についての処置を行う場合は、一切公私を混同することがなかった。混同すると必ずや人民の利益が侵されるだけだと認めていたのである。

ある時、主席の邸宅の庭園に植えようとして、数人の幹部がある果樹農場から14本の果樹を貰ってきたことがあった。そのことを知った主席は、それらの果樹はやがて孫子たちに残すべく植えた人民の貴重な財ではないか、人民が汗を流して植え育てた木を勝手に抜いてきてもよいのかと叱責して、すぐ農場へ持ち帰って植え直すようにと言った。またある時は、某地方の現地指導中、そこの幹部たちが、自分たちの地域へも主席がやって来るだろうとして道普請をし、休息用のこざっぱりした建物も建てていることを知り、私が来るからとして、この忙しい農繁期に人々を駆り立てて道普請をし、家を建てているのか、国の財産は人民の財産である、それをそんなことに浪費してもいいのか、国家の財産に損失を及ぼしたら、人民の前で責任を負わなければならんと、厳しくたしなめた。

主席は、人民に提供する住居は立派に建てるよう心がけながらも、わが祖父母の住む家を新築するようなことはしなかった。苦労の絶えなかった祖父母のために私は何もしていない、あるとしたら祖母に老眼鏡を一つ買って上げたことだけだと、

主席は振り返っている。万景台の祖父母や親類たちも主席の立場に同調し、慎ましい生活に甘んじた。

主席は幹部たちに、**「誰であれわれわれは人民の生活水準を超過してはなりません」**としばしば強調し、その手本を見せていたのである。

国の解放直後、幹部用の生活物資の給与基準案を低めに修正しながら、首相だからとして特別に大きい給与を適用すべきでないとし、家庭の生活でも他人と差別があってはならないとしていた。そういうわけで生活上の費用は国から支給される定額の生活費のみでまかない、消費品も国家の配給物の域を出ることがなかった。

朝鮮人民や海外居住同胞、外国の大勢の人士たちが、主席の業績をたたえ万年長寿を願っていろいろと貴重な贈り物をしていたことは周知の事実であるが、主席はそのどの一つをも私物化せず、国の宝物、人民の所有とする措置を取った。中には、国内の人民からの贈呈品を骨の折れる困難な仕事をしている労働者や功労者に贈りもしたものである。

天下の名勝妙香山のふもとにある労働党時代の大記念碑的建築物である国際親善展覧館には、世界の国々の元首や政党指導者、各界人士、団体や機関から主席に贈られた贈呈品が展示されているが、そこには、深いいわれがこもっている。

かつて近くの大国に珍奇な貢ぎ物を贈る一方であった朝鮮が、金日成主席を国家元首に戴けてからは、世界の多くの国の元首や党首、各界人士から数々の贈呈品が贈られている。

ところが主席はそれらの贈り物を、自分一個人への贈り物だとは考えず、**「われわれが受け取った贈り物はどれもみな国の財産であって、個人のものではありません。だから贈り物はすべて陳列館へ持ってゆき、丁寧に保管しなければなりません」**として、外国から贈られたものはみな歴史的な意義を持つ国宝だから、大事に保管しなければならないと指示した。

その後、妙香山の景勝の地に改めて陳列館を建てて贈り物を展示する措置を取った時には、贈り物の保管を粗末に行ったら、後の世の人たちがわれわれをなじるだろうから、贈り物の展示を見栄えよくし、保管も手落ちなく行って人民や外国人に見せようと言った。こうして妙香山の陳列館は国際親善展覧館と命名され、数千数万の国内人民や海外居住同胞、外国人が展覧館を参観し、今もそれは止むことなく続いているのである。

外国の政治家の場合を見ると、一般的に貰った贈り物を公開する例は少ない。それらの贈り物は自分個人に贈られたものだから、わざわざ公開しようなどとは考えず、飾り物として客に見せるに留まり、または生活用品として手元に置いて使ってい

るにすぎない。

けれども主席は、自身に贈られた数多くの贈り物を自分一人だけへの贈り物だとは露程も考えず、それらをすべて貴重な国宝とし、朝鮮人民の尊厳と力を誇示するシンボルとならしめたのである。とはいえ主席は、3大革命展示館をはじめ歴史博物館、高句麗国の始祖東明王の陵、その他全国各地の記念碑的な建造物や歴史遺跡はもれなく見ておりながらも、自分に贈られた贈呈品を展示した国際親善展覧館内のすべてを見る機会には恵まれなかった。

主席は生涯国家の家長の地位にありながらも、一切贅沢というものを知らずに生活した。主席は、革命家は飯を冷や水に浸け、味噌をなめながら食べても、革命活動を支障なく行えるならそれまでではないかとして、生涯粗末な食生活に甘んじた。

主席が好んだ食べ物は、ありふれた五穀飯や味噌汁、味噌煮、ニンニクのしょう油漬け、白菜の丸漬けキムチ、カラシナ漬け、山菜のあえ物、アミの塩辛など一般の平民の食べ物であり、ご馳走だと言ってもせいぜい、凍りジャガイモ麺、粒トウモロコシ粥、ジャガイモ餅、カボチャ煮などであった。

主席が世の中で一番旨いものだと見なしたのは塩だったが、その訳は、塩が人民の食生活で絶対に欠かせない最も大切な基

礎食品だからであった。

そのように粗末な食べ物で日を送っていることを苦にして、ある幹部が、主席の食膳を潤すことができないものかとして、主席の祖母李宝益女史になんとかなさらなければと持ちかけたことがあった。すると祖母は、**「その気持ちは分からない訳じゃない。でも、百姓の子として生まれた人間の性分だもの。どうしようもないじゃない。それはこの婆さんにしたって直してやれないよ」**と言ったものである。

食べ物ばかりではない。衣服や履物の場合も同様であった。

1984年7月初め、ヨーロッパ社会主義諸国を歴訪して帰り、咸鏡北道と両江道の一帯にしばらく滞在して現地指導を行っていたある日のこと。

朝、庭園で散策をしている主席に朝の挨拶をすべく庭に出てきた幹部たちは目を見張った。背広にネクタイを結んだ主席が満面に明るい笑みをたたえて、みんなの挨拶を受けたが、意外にも主席は非常に若々しく見えたのである。

「私がスマートなゼントルマンになったという訳だな。諸君がにこにこしているのを見ると、私は確かに紳士になったに違いない」

こう言って自分が背広を着た訳を説明した。

その背広は、金正日同志から贈られたものであった。ヨー

ロッパ諸国の訪問中、随員はみな背広を着、ネクタイを結んでいたにもかかわらず、主席は詰襟姿であった。そのことで胸を痛めていた金正日同志が主席の到着を待って背広を贈ってくれたとのことであった。

その時金正日同志は、主席はこれまで軍服と詰襟を脱ぐことができず苦労のし通しでしたが、これからは自分が詰襟を着て国事を担当して働きますから、主席は背広を着て、しばらくお休みになるようにと強く頼んだのであった。

こう説明した主席は、喜ばしげにチョッキから白金の懐中時計を取り出してみんなに見せた。その懐中時計も総書記が準備したものであった。

主席は、こんな派手な衣服を着てみると、山で戦った時から積もりに積もった疲労がすっかり解けたような思いがすると晴れやかに言った。

主席が背広姿をして現れたことに驚いたある資本主義国のメディアは、国の指導者として何十年もの間変えることのなかった身なりを改めた動機と契機について疑惑を表したものである。

主席が背広を着用したのはこの時が初めてではなく、それは国の解放直後のことである。その洋服は抗日革命闘士たちが誂えて提供したものだった。

抗日の戦いで砲煙にくすんだ軍服を着て凱旋した主席を補佐していた同志たちが相談して、縞入りの茶色の洋服地と布を買い、服を仕立てて主席に差し出したのである。主席は、実のところ外出着がなくて気にしていたのだが、同志たちが私の心配を消してくれたとして喜んで受け取った。間もなく凱旋演説をしなければならず、また解放祖国の地で各階層の人たちにも少なからず会わなければならない。けれども主席には1着の外出着もなかった。同志たちが着替え用の外出着も必要でしょうから、上質の洋服をもう1着準備致しましょうと言ったところ、主席は、**「私には同志たちが作ってくれたこの洋服さえあればよい」**と言って謝絶した。そして祖国は解放なったが、わが国の人民は古びた衣服や綴れを着ているではないか、それなのに私がなんで上質の洋服を着ていられようか、新しい祖国の建設を推し進め、誰もがみな立派な身なりをするようになったら、私も上等の服を着ると言った。

こうして主席は背広姿で凱旋演説を行い、そのあと帰国後初めて生まれ故郷万景台のわが家へ帰り、祖父母と感激的な対面を行ったのである。

祖国解放後の国づくりを指導する主席の革命活動状況を伝える記録映画や写真に見られる背広を着用した主席の姿には、以上のようないわれがあったのである。

けれども主席はその短い一時期を除いて、高齢に至るまでの長い歳月、一度として背広を着ることがなかった。人民が立派な衣服を着て幸せに暮らせる日はまだ先のことだ、自分もそれまではと自制しながら、詰襟を着続けたのである。

主席のこのような思いや生活態度は自分一人に限られたものではなく、一家親類にもそのように生きるよう求めた。国の解放前、日本帝国主義支配者の虐政の下で苦労し、祖国の解放後も粗末な着物に甘んじて暮らしを立てている祖父母のことを思って、是非とも見栄えのする衣服を作って上げようとする同志たちの誠意を、主席は感謝しながらも、きっぱりと制した。そして、やがてわが国の人民が幸せに暮らせるようになったら、祖父母や叔父たちにも新しい服を買って上げることにしようと言った。孫の気持ちを十分に理解していた祖父は、もどかしい思いをしている人たちに、「いらぬ心配はせんでもよい。万民の幸せを願って苦労している孫のことを思ったら嬉しくてならん。昔から家事に目を奪われていたら偉人にはなれんと言われている」と言った。

主席は、世の人たちの誰もがそうしているように、粗末な生地で作ったありふれた形態の衣服を着て、どこへでも出掛けた。

主席は、人民の中に入るのに特別仕立ての服を着る必要が

どこにある、普通とは違うぱりっとした服を着ていると、労働者や農民は、私をまぶしがり、近づき難く思うだろうとして、人民の誰もが着ている詰襟、巷間の通用語となっている人民服を着ていたのである。外交の舞台や国内における公式の集会やイベントなどには、普段詰襟を着て過ごしている人たちも背広にネクタイを結んで参加するのが一つのしきたりになっているにもかかわらず、主席はずっと詰襟で通した。そのような身なりでも人民に親しまれ、支持を受けるならそれまでだったのである。

そのような主席であったから、ある時、ある山里に住む老婆から心をこめて織った麻布をもって仕立てたチョクサム（一重のチョゴリ）を貰って大喜びし、その場で着てみたこともあり、そのことをいつまでも忘れなかった。それでいながらも、幹部たちが色の褪せた主席の服を見かねて、上質の洋服を求めようとすると、主席は、工場や農村に出掛ける時に適した服をなぜ変える必要があるのかとして、色褪せた詰襟を裏返し、仕立て直して着続けた。また、革命家の遺児たちに会いたくて、朝の運動がてらに峠道を登っていた時、木の枝に引っ掛かって混紡の綿入れがちょっと破けたことがあったが、主席は、**「どうして私だからといって継ぎを当てた服を着てはならんのか」**として、そこを直してもらって着続けた

こともあった。

主席は履物や靴下も平民用のものを履いて過ごすことに慣れていた。革靴は、外国人に会う時や会議に参加する場合、それに出勤する時にのみ履き、それ以外の日常生活では、便利なズックを常用した。

ある年の冬、主席の革靴の内側が擦り切れているのを発見した側近が新しい靴と取り換えましょうと言った。すると主席は、まだまだ履けるのに捨てるのはもったいない、擦り切れた部分を他の革で張り替えようと言ってその方法を教え、直された靴を見て、うむ、なかなかよくできているとして満足した。

靴下の場合も同様で、たとえば3年間の朝鮮戦争の期間、2、3足の靴下を代わる代わる履いて済まし、たまたま手に入った毛の靴下は、側近の幹部や若い歩哨に与えていた。

主席は国家元首である。にもかかわらず、1976年に錦繍山議事堂（今日の錦繍山太陽宮殿）が主席宮に改装されるまでは、特別に立派な執務室はなかったし、主席宮が出来上がってからも、現地指導で地方を巡り歩く日が多かったので、寝食も何かと不便であった。見すぼらしい農家、天井から水のしたたり落ちる坑道、揺れる列車の中などで執務を取ったり就寝をし、あるいは食事を取ることもまれでなかった。

祖国解放戦争当時、元山地区海岸防御作戦計画を立て、戦争の戦略的局面を開くべく構想を練った所は法洞郡のある谷間の農家であった。党中央委員会第3回総会の際に宿泊して報告書を作成した場所も、オンドルの煙が漏れて鼻を突くような家だったが、それは慈江道長江郡香河里の農家であった。

主席は国の経済事情が困難であった時ばかりでなく、戦後の復興建設が成功裏に進み、住宅や公共施設の建設が本格的に行われた時にも、主席の住宅や政府庁舎を建てようという意見が出されるたびに、**「そんなことをしたら、人民がなんというでしょうか」**として、それらの提案を退け、それよりも学校や幼稚園、病院の建設を急ぐよう督励したものである。

主席はスターリンから乗用車を贈られたことがあった。スターリンの特命で作られた乗用車は性能のすぐれた防弾車であった。しかしそれも初期の国づくりと戦時の道ならぬ道を休む暇もなく走り続けたので古くなり、戦後かなり経った頃、そろそろ新車と換えてはという意見が持ち上がった。

そうした1962年8月、昌城郡を指導する会議を終えて外へ出た主席は、車の整備をしている運転手の側に歩み寄って働き振りを眺めながら、わが国で生産している「勝利－58号」型トラックのエンジンは何馬力かと聞いた。70馬力ですという答えに、主席はこの車のエンジンも70馬力だから、「勝利－58」の

エンジンを取り付けたら、車はまだまだ走れるとして、随員たちに向かってこう言った。

「今わが国では人民が苦労して稼いだ金を1銭、2銭と数えながら非常に大事に使っている。われわれにはまだ金が多くないために、人民に履物も十分に供給できないでいる。私の車を買ってくるほどの金があったら、人民用の履物を1足でも余計に買って来いと指示したい。私の見たところでは、きちんと直したら、この車はまだいくらでも使える。新車を買ってこようなどと考えず、この車をきちんと修理して使うことにしよう」

このような人柄であったために主席は、ある市の扶養家族協同組合の製品であるうちわを買って使い、某地方の織物工場の製品で服を仕立てて着て、現地指導を続けたのであった。

その世界的な名声や積み上げた業績、また国家元首の地位からしても、あまりにも対照的な素朴を旨とした金日成主席の生活気風を思い起こすたびに、人民は今も深い思慕の情に駆られて胸を熱くしている。

＊　＊　＊

金日成主席の高潔な偉人的品格は、今日も朝鮮人民の心の中に生き続けている。

今や主席の生誕113周年を迎えているが、白頭の広野において関東軍を震え上がらせた熱血の青年時代から頭髪に霜の降りた晩年に至るまで、一瞬としてしなびたことのないその偉大な人格は、朝鮮人民の崇拝の的となり、全人民の胸中に焼きついている。

偉大な人間の歴史は連綿として受け継がれている。偉人たちによって導かれている人間の勝利の歴史は、昨日もまた今日もそうであるが、明日も変わりなく、人間万歳の力強い喊声と共に前進し、完成するであろうし、金日成主席を永久に忘れることのない朝鮮人民は、主席を民族の永遠の領袖として崇め、とこしえにその永生を祈願するであろう。

偉大な人間

執　筆: 許順福

編　集: 尹英日

翻　訳: 金時習　金正蓮

発　行: 朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発行日: 2025年4月

No. 250880297093

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp